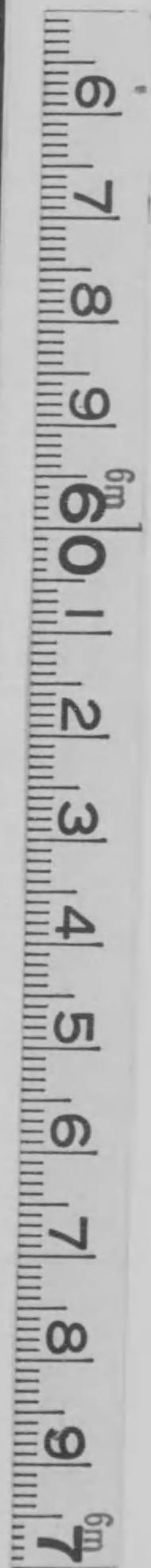


391  
165



始





# 雨 春

著 袋 花 山 田

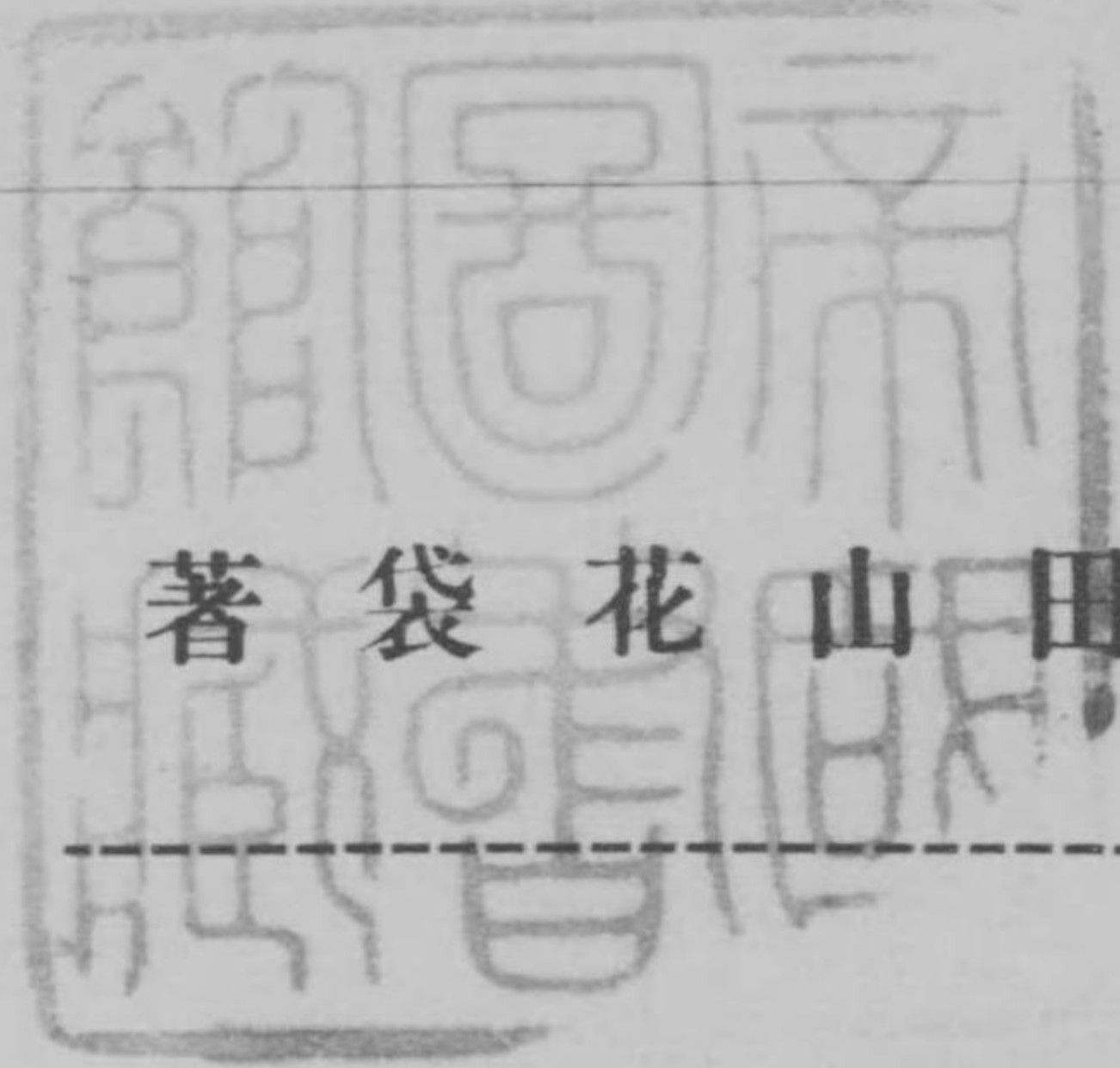
1920



堂 星 金



39/165



著 袋 花 山 田

雨 春

1920



堂 星 金

大正  
9.9.28  
内交



春

雨

田  
山  
花  
袋  
作





晝間は三味線のお稽古だの、店に出入りする大勢の人々の面白い話だの、絶えず口癖のやうにガミ／＼言ふ婆さんの小言だのにまぎれて、つい忘れるともなく忘れてゐることが多かつた。しかし夕方に町を掠めて通つて行く汽車の音を聞くと、玉子はいつも堪まらなく東京の方をこひしく思つた。ゴオといふ音は遠くの野の方から来て、半鐘臺や二階屋のくつきりと夕焼けの空に掠したやうに見えてゐる町を通つて、鐵橋をわたつて、そして向ふの方へと段々遠くなつて行つた。玉子はお座敷に出てゐる時でも、其時は縁側の方へ出て行つて、欄干に凭つてその遠くなつて行く汽車の音を聞いた。

「何うしたの？また東京を思ひ出したの？」

眼の縁を赤くしてゐるのを他の姐さんに見られて、かう言はれた事なども一度や二度ではなかつた。「いゝえ、さうぢやないのよ、ちよつと今……」かう言つて、玉子は涙を飲込むやうにして強いて笑顔をつくつて見せた。

鐵橋を渡る時には、汽身の音は殊に高く轟くやうにあたりを響いて聞えた。その鐵橋の上からは、いつも玉子の聘ばれて行く料理屋が見えてゐた。もう一軒の方の料理屋は町の通にかゝつてゐる橋を少し行つた處



にあつた。玉子は其處で此方に来てから覺えた踊をよく踊つた。

玉子は色の白い脊の小づくりな綺麗な子であつた。東京から来たお酌さんと言ふ名で料理屋の間にきこえてゐた。澤屋では好い子を置いたもんだ。今にどんなによくなるかわかんねえ」かう人々は噂し合つた。

停車場から町の方に来る茅葺屋根の多い長い路を世話をして呉れた男と母親とに伴れられて、澤屋の家に入つて行てからもうかれはれ四月以上になつた。来た時はまだ暑かつた。紹の單衣などを着てゐた。婆さんは「玉公、何をほんや吹いた。川の藻の黒く浮いてゐる中にさびしい赤い夕暮の雲が映つたりした。婆さんは「玉公、何をほんやりしてゐるんだえ。奥の方を早く掃除して呉んねえでは仕方がないぢやねえか」などと叱つた。三味線は姐さんが教へて呉れた。幼い身には、難かしくつて覺えられないのを、痾癩を起して「さうぢやないんだよ、かうだよ」など、言つて、木の撥で玉子の手を打つたりした。後には玉子は奥の壁の蔭に行つて泣いた。

母親に三味線を教つてゐる時分のことなどを玉子は頭に思ひ浮べてゐた。何うしても藝者になる。家に入るのは厭だ。かう言つて駄々をこねて母親の言ふことを聞かなかつた。生ひ立つた土地と、一緒に遊んだ兒と、落魄した貧しい家庭とは、藝者ほど好いものはないといふ念を早くから玉子の幼い心に起させた。その時、母親は「いくら親が困つてたからつて、親の言ふことを聞かないやうなものは、一生縁を切る約束で人にやつて了ふから」など、言つた。玉子は夜遅くお座敷から歸つて来て、薄い寒い蒲團にくるまりながら、母親の言つた言葉を繰返した。幼い玉子の心にはまだ世の中がわからなかつた。父親と母親とが何故あんな

に喧嘩をするか、それも不思議に思はれた。幾夜か續けて母親の夢から玉子は覺めた。

荷車や馬車や車が絶えず澤屋の前を停車場の方へと通つて行つた。同じ年頃の娘が綺麗な扮装をして母親と一緒に車に乗つて通つて行くことなどもあつた。店に来る靴を持った客が「ちよつと東京まで」など、言ふのを聞くと、いつも胸を躍らした。

汽車の通る路は澤屋の裏からも見えた。青々とした菜島などが其處にあつた。停車場で客を乗せた汽車は、ポツ／＼と喘ぐ様に白い烟を吐いて其前を通つて行つた。東京の方へ行く人達のいろ／＼な顔は動いて行く窓の中に見えるた。

桐の木が並んで植ゑられてある島の傍には、額髪を手拭で巻いた子守達がいつも五六人遊んでゐて、田舎訛の子守唄が絶えず其處から聞えて来た。メリンスの前垂をした玉子の姿が澤屋の裏口のところに見えると、「ヤツ、藝者ツ子、藝者ツ子」かう言つて傍に寄つて来た。

玉子はお座敷で種々な人達を見た。銀くさりを縮緬のへこ帯に巻きつけた顔に一面にきびの出でゐる田舎の金持の息子もあれば、町の財産家の若旦那だと云ふ髪を綺麗に分けた色の生白い青年などもあつた。瓜二つ割つたやうな顔のよく似てゐる兄弟は、町から一里ほど行つた近在の物持の息子であつた。家が亂脈なんですとさ、お父さんには、お妾がありながら、家には始終ゐないんですつて。それに、母さんがまけずに浮氣をするんですつて。あの家ももう駄目だつて言ふ話だよ」など、姐さん達は噂し合つた。それに、姐さん達と一緒に戯談を言つたり唄を唄ひ合つたりする人達は、大抵玉子の叔父さん位の年輩の人が多かつた。家



に来て母さんのことをお秀くと言つて酒を澤山飲んで行く叔父さんに似た人は、二里ほど離れた町の砂糖屋の旦那であつた。『玉ちゃんにも誰か好いのを取持つて頂戴な』そのお座敷に出る姐さんは、玉子の方を見てこんなことを言つた。酔つて、騒いで、三味線をガチャ／＼鳴らして、後には倒れて其處に寝て了ふやうな人達ばかりであつた。玉子のきらひな執こい町の呉服屋の若旦那は、『玉公、氷を持つて来い』などと言つて、蹠跟した體を玉子の方に寄せるやうにした。

お座敷の騒ぎの靜つた頃を見計つて、姐さんとお帳場とに挨拶して、玉子はいつも家の方へ歸つて来た。夜風が寒く衣の袖を吹いた。家ではもう婆さんが床の中に入つてゐて、『玉公か。姐さんは？』などと訊いた。姐さんは時間になつても歸つて来ないやうなことが多かつた。其時は姐さんは大抵町の裏道にある鰻屋に行つてゐた。そこには暗い狭い室があつた。

玉子が毎日踊を習ひに行くお師匠さんの家にも若い藝者が二人ほどゐた。踊やら三味線やらを町の娘達が午過から大勢習ひに行くやうな家で、町の大きな呉服屋の娘は、お酌のやうな綺麗な扮装をして毎日其處にやつて来た。肥つた脂切つた顔をしたお師匠さんは、拍子を取りながら、聲を張上げて越後獅子などを絶えず唄つた。元、土地の藝者でお師匠さんの娘に當る中年の姐さんは、をり／＼其處に訪ねて来て、『澤屋に來たの！好い子ですなえ』と言つて玉子をほめた。『踊りも上手ですなえ』なども言つた。

停車場の前を向ふに行くと、町の家並は段々盡きて、田圃の方へ出て行くやうになつてゐた。汽車の踏切の傍に、澤屋の持つてゐる島があつて、其處に婆さんと玉さんとに伴れられて枝豆を採りに行つた時には、

玉子は一層家の方を戀しく思つた。長いレールが遠く續いて向ふの青空には白い雲が靜かに漂つてゐた。停車場では、やがて来る汽車に積むための荷物を一生懸命に運んでゐるのが見えた。玉子は派手な姿を見せて、長い間其方を見てゐた。

踏切を越えて土地の代議士の園遊會に姐さん達と一緒に رفتつた翌日の四時過ぎに、玉子はちよつとお師匠さんの許までと云つて澤屋を出た。

いつもの通り町の大通から横町へと入つて行つたが、澤屋の家が見えなくなると、お師匠さんの方へは行かずに、裏道を通つて、停車場とは反對の方へすん／＼玉子は歩いて行つた。町の橋の下流に架つてゐる橋をわざ／＼大迂回をして渡つたりして、成べく細い通から通へと選んで行つた。不斷着の儘で、包らしいものは何も持つてゐなかつたが、指には母親から貰つた大事の指環を二つはめてゐた。帶留も金の方のをしめて來てゐた。

知つてゐる人に逢ひはしないかと思つて、誰とすれ違つても顔を見ないやうにして玉子は急いでさつさと歩いた。途中でお爺さんの百姓と番頭らしい男と知らない子守とに逢つたばかりで、幸ひにも誰にも見附けられずに町を向ふに通る抜けることが出来た。玉子はほつと長太息をついた。昨日の園遊會に、客の何かの話について『さう？ 次の停車場まで歩いて行つても一里ないの？ さう？』と言つたが、その時から玉子は獨りで逃げて東市へ歸る堅い決心をした。姐さんに打明けて暇を貰つても思はないではなかつたが、幼い心には、婆さんなどいろいろなことを言はれたり、いろいろな素振を見せられるのが厭であつた。あとで母さんに



来て話をつけて貰へばそれで好いと、唯單純に玉子は思った。玉子は昨夜一晚まんぢりともしなかつた。あれも持つて行きたい、これも持つて行きたい、お客に貰つたあの花櫛も持つて行きたい……。しかし、裏口からそつと抜けて出て行くにしても、そんな大きな包みなどはとても持つては行かれなかつた。其處にも此處にも知つた顔ばかりだ。すぐ知れて、追手がかゝつてつかまへられて了ふ。さうかと言つて夜は出られない。出られたにしても、怖くつて一里先の停車場までなどはとても行くことは出来ない。玉子はとうとう何も持たずに單身で知らん顔をして其處を出て行くことに心をきめた。

町を出外れやうとする處に、店に蜜柑だの柿だのをならべて、ちよつとした煮染で通りすがりの百姓に酒を飲ませるやうな店が一軒あつた。その上さんは澤屋の遠い親類か何かになつてゐた。顔を見たこともあれば、一二度其處に來たこともあつた。何うやら斯うやら町の裏道を通抜けて來た玉子は、其處に來てまた吐胸をついた。見つかつたら大變だ。何處に行くつて聞かれたら返事のしやうがない。玉子は怖々ながら其前を通つて行つた。

幸ひにも大和障子が半分明けてあるばかりで、上さんの顔も亭主の顔も見えなかつた。綿フランの汚れた襟巻で顔を包んだ百姓が唯一人ほつねんと酒を飲んでゐるばかりであつた。

それから先には廣い野が開けた。もうすつかり收穫がすんで、田にも畠にも百姓の影は見當らなかつた。大根の葉がひたと田の中に捨られてあつたりした。空車の音が四邊に響いて聞えたと思ふと、向ふから鼻根を叩ひながら機廻りの男がやつて來た。夕日は明るい光線を一面に野に漲らした。急いで歩いて行く玉子の

影は長く水田の上に動いて行つた。

ベルの音がチリリンとしたと思ふと、平らな路を向ふから自轉車が滑らかに此方に向つて走つて來た。摩れちがひながら、

『玉ちゃん？』

かう聲をかけられた。見るとそれはいつもよく聘んで呉れる近在の物持の若い旦那であつた。新形の春廣を着てゐた。

『何處に行くんだえ？玉ちゃん』

『ちよつと其處まで、お使に……』

玉子は狼狽しながら言つた。

自轉車はすうと通つて行つて了つた。玉子が振返つて見ると、もう町の入口の方へ行つてゐる。玉子は安心が出来なくなつた。あの人は屹度いつもの料理屋に出かけて行く途中に相違ない。『今、玉子に逢つた』など、言はれると、其處から澤屋に知れるのはすぐである。次の停車場まで行つたにしても、すぐ追手がかゝつてつかまへられて了ふ。いつそ今日は知らん顔をして歸つて、また機會の好い時を見つけやうか。かう思つて二足三足玉子はあとへ引返した。

其時野の向ふから一人の車夫が空車を曳いて來るのが見えた。町の車でないのは玉子にはすぐわかつた。

『さうしやう、次の停車場に行つてはつかまるかも知れないから、此處から向ふに行つて、水田を通つて、先



の武里から下りで久喜まで行つて、あべこべに其處から大宮の方へ乗替へて出て行けば、誰も氣はつくものはあるまい。俄かにかう思ひついた玉子は、懐の財布に觸つて見た。其處には何ぞの時の用意にと思つて持つてゐた金が五圓ある筈だ。

「車里さん、武里まで行つて呉れませんか」

「行きませう」

かう言つて車夫は玉子を見た。しかし別に怪しいと思つたやうな様子もなかつた。で、賃金をきめて玉子は乗つた。玉子は頼んで幌を深くかけて貰つた。

町を通らずに、レール路に添つた近路を車夫は通つて行つた。車夫は四十位の堅さうな中老漢であつた。「汽車に乗るんなら、其處の町から乗る方が好かんべえがな」など、言つたが、「はア、さうか、武里に用があるんか、それぢや仕方かねえ」こんなことを言ひながら、今度は町の「上流半里位」のところにかゝつてゐる橋を渡つて行つた。

途中に村があつたり、小さな町があつたりして、此方に来れば、もう追手のかゝる心配はない。まさか逆に汽車に乗つて行つたとは思はないに相違ない。幼い玉子にそんな智恵が出たとは氣が附くまい。「始めから、さうすれば好かつた」など、玉子は車の上で思つた。

武里までは町を越して一里半位あつた。其處に着いた時には、日がもう平野に落ちて、寒いく風が吹いて来た。夕焼の空の中に遠い山が深い紫色になつて連なつて見えてゐたりした。玉子は村の入口で車を下

りた。「行くところまで行つて上げべい」と言ふのを達つて辭つて、五錢餘計に車賃を車夫にやつて、——急いで町の方へと歩いて行つた。一刻も早く、この車夫からも通れたいと言ふやうな氣分に玉子はなつてゐた。少し行つて振り返ると、車夫の姿はもう見えなかつた。玉子はほつとした。

火のちら／＼點いた村の通りを急いで通つて、路の角に遊んでゐる子供に停車場への路を聞いた。小さな停車場は村の外れにあつた。

停車場の入口には、葉の落ちた大きな柳の木があつて、助役だの改札だのゝゝる硝子窓の灯は明るく此方から見えてゐた。其處から出て来た驛夫は、夕暮の薄暗い空氣の中に白くつきりと出てゐる玉子の顔を覗くやうにして見た。玉子は明るい窓に顔を寄せて、

「下りはまだですか？」

「もうすぐです」かう窓の中の一人は言つた。

乗客は他の百姓が一人ゐるばかりであつた。切符を買ふと、改札がもうすぐ其處に出てゐた。玉子はやがてレールを越えて向ふ側に行つたが、コナトも無しに寒さうにして立つてゐるその姿は、長い間薄ボンヤリしたランプの下に見えてゐた。

やがて汽車は来た。もしや町の誰かが乗つてゐるやしないかと思つて、玉子は車室に入ると其まゝ、キツと四邊を見廻した。しかし幸ひにも其處には誰も知つてゐる顔はなかつた。玉子はすぐ傍に空いてゐた榻に腰をかけて、他から見えないやうに顔を窓の方に向けた。



汽車の揺ぐにつれて、大きな油壺の底はキラ／＼した。薄暗いランプの光線は、埃や煤煙の臭ひの漂つてゐる中に微かに震へて、桃割に結つた玉子の髪と、袖を合せて寒さうにしてゐる小さな後姿とをほんやり照した。

外は眞暗でもう何も見えなかつた。

二間しかない貧しい家に父母がしよんほり坐つてゐるさまが見えたり、お師匠に行くと言つて出かけたきり歸つて来ないので、澤屋で騒ぎ出して、彼方此方に追手を出したり何かしてゐるさまが玉子の眼に浮んだり消えたりした。お座敷に出てゐてそれを聞いて吃驚して歸つて来る姐さんの顔なども見えた。婆さんはさぞ自分の悪口を言つてゐるだらう。しかし、それよりも今度は歸つて行く家の方のことが段々心配になり出して来た。『だつて、無理に旦那を取らせやうとするんだもの、姐さんがわるいんだから仕方がない。家に歸つたら、さう言ふから好い。』かう自分で自分を辯解して見たが、二年の約束で高い金を借りて行つた身が今は心になつて来た。父親と母親との苦勞に瘦れた顔が小さな玉子の胸につかえた。

乗替をする大きな停車場では、玉子は一時間以上も寒い待合室で待つてゐなければならなかつた。お中が空いたので、鮎を一箱貸つて見たが、海苔巻を二箇食つたゞけで、あとは何うしても食ふ氣にはなれなかつた。鮎は冷くそして乾いてほそ／＼してゐた。

数多い客車やら貨車やらを連接して、凄じい煤煙を漲らせて、遠い處からやつて来た汽車に乗つてからは、玉子は窓の隅の方に小さく押されるやうになつて、冷たい窓の板に顔を當てゝゐた。押へても押へても涙が

溢れ出して来た。

乗替へた客室は客で一杯になつてゐた。大なるランプも今迄のとは違つて明るく四邊を照した。人達はいろいろなことを話して笑つたり何かしてゐた。果物を剥いて母親にわけて貰つてゐる小さな娘もあれば、丸髷に結つた奥さんらしい綺麗な人を伴つて長い旅をして来たといふやうな紳士もあつた。『もう、東京までいくつ停車場があるんです？』玉子の後の榻に背中合せになつて乗つてゐた年増の女はかう伴れの男に訊いた。

『かうと——もうあと五つだ』

『五つ、ぢや、もうぢきだね。』年増の女はあくびを飲み込むやうにして、『もうすつかり勞れて了つた。飽き飽きしたね』

『もうぢきだよ』

玉子は五つか六つの時に、父母に伴れられて汽車に乗つて遠い旅に行つたことなどを頭に浮べてゐた。其時分は父母もまだ今のやうに落魄してはゐなかつた。大きな鞆を持つたり、信玄袋を持つたりして長い旅をして行つた。母親の顔にも若々しい喜びの色が湛へられてあつた。玉子は其遠い町で三年ほど父母と一緒に暮した。妹はそこで生れた。『私ほど不仕合な者はない——』かう思つて玉子はそつと涙を襦袢の袖で拭いた。

明るい灯と賑やかな町とが、やがて汽車の兩側に見え出して来た。上野はもう近かつた。乗客は皆な棚か



春 雨

ら靴を下して下りる支度を取懸つてゐた。汽車は賑やかな明るい都會の方へ絶えず進んで行つてゐた。大きなブラットフォムの雑逞はやがて其處にあつた。玉子は苦勞にやつれた父母の顔を絶えず胸に描きながら、多くの人達と一緒に明るい町の方へと出て行つた。

玉子は田舎に行かない前と同じやうにぶらぶら暮した。家の近所から毎朝學校に活潑に出かけて行く昔の友達を羨しいやうな心持で見たりした。自分もあゝいふ風に白いリボンでもかけて女學校へ行きたいとも思つた。しかし、去年學校をさがつてからは、教科書などは皆な縁側の隅の押入の奥深く藏ひ込んで了つた。それに女學校に入るやうな餘裕を持つた身分でもなかつた。

逃げて來た田舎との話は、いろ／＼にこんがらかつて容易に簡單には纏まらなかつた。中に入る人では要領を得ないので、後にはわざ／＼母親が出懸けて行つたりした。土地でかなり流行つただけに、澤屋では玉子を手放すことを惜んで、何うにかして、もう一度出て呉れるやうにと何遍もくりかへして言ひ込んで來た。旦那を無理に取らせるやうなことはこれから決してさせないからなどとも言つた。しかし今度のこと懲々してゐる母親は「もう、こんなことはさせない。お前が好きで、言ふことを聞かなかつたばかりにこんな目に逢つた。もう二度と再びお前の言ふことなんか聞くもんぢやない」と言つた。貧しい中で、母親は田舎へ借金を返すことに苦心しなければならなかつた。それに、愈玉子が歸つて行かないときまると、田舎の方では、段々無理なことを言ひ出して來た。母親は自分の里の兄の許に行つて頼んで見たり、里の母に話



して一緒に心配して貰つたりした。里の祖母さんは「困つたねえ」と言ひながら、それでも自分の貯へて置いた金を出して呉れた。

その夜、突然歸つて行つた時のことを玉子はをり／＼眼の前に浮べて見た。母親は其時通に面した三疊の室でひとりで靜に裁縫をしてゐた。「母さん、母さん」と表から玉子は呼んだ。「咲ちやんぢやないか——」かう言つて吃驚したやうに母親は立つて来て雨戸を明けた。外には玉子が悄然として立つてゐた。

玉子は旦那を取ることを姐さんから勧められた話を成べく大袈裟に誇張して母親に話した。途々玉子が心配して来たほど母親は強い小言も言はなかつた。「だから、私があれば言つたぢやないか」かう言つて母親は唯困つた様な顔をした。

「福ちやん、もう寝たのね」玉子はかう言つて八疊の方へ行つて見た。今年七つになる幼ない妹は、から子に結つてリボンをかけた房々した髪を此方に見せて、可愛い顔をしてスヤ／＼寝てゐた。

「お父さんは？」  
「いつもの通りさ、角に行つてまた油でも賣つてゐるんだらう」

母親はこんなことを言つて、長火鉢の前で煙草を一服二服ふかした。急に心配になり出して来たといふ風に見えた。母親の眼の前には自分等の通つて来た路が歴々と見え出して来た。神戸から歸つて来た時分には、まだ好かつたが、段々困つて、三年前まで住んでゐたすぐ前の家にもゐられなくなつて、この狭い家に移轉して来たことなどを母親は考へた。玉子の三歳になつた頃、とても將來の見込はないと言ふので、親類相談

して、暫く里に歸つてゐたことがあつた。その時、父親は玉子に逢ひたいと言つては、よく其處へやつて来た。ついその情に絆されて母親は父親とまた一緒になることになつた。その時里の母親は、「お前行くならよく考へてお行きよ。段々子供が可愛くなるばかりだから」と眞面目な顔をして言つた。あの小さかつた娘が、今またかういふ苦勞をかけるかと思ふと、母親は長大息をつかすには居られなかつた。

これから何うなつて行くんだらうと母親は考へた。十四になるこの玉子と、本屋に丁稚奉公に行つてゐる十二になる定雄と、つい去年ある機械場の丁稚になつて行つた宗太郎と、末のお福と、かう大勢の子供を抱へて、居食同様に其日／＼を送つて行く惨めな生活のことを考へると、母親はかうしてじつとしてはゐられないやうな氣がした。「父さんさへしつかりしてゐて呉れれば——」かう言つていつも繰返した愚痴も、う遠い昔になつた。江戸子氣質で、喧嘩早くつて、それでゐて飽きつほい父親は、横町の本宅を離れてから、いろ／＼なことを計畫しては、すぐ失敗して、また別の職業を始めた。呉服物の行商のやうなことは、それでも先祖から大きくやつてゐたゞけに、かなり長く續いたけれども、それも終には大きな貸倒れになつて、元金も子もすつかり、それにつき込んで了ふやうになつた。呉服物の澤山置いてある一間で、父親が夜遅くまで算盤をはじいてゐると、母親が機嫌のわるい顔をして、何かぐ／＼言つてゐるやうな光景を總領の玉子だけはよく覺えて知つてゐた。「お前さん、それだから仕方がないんだよ」かう母親は常に言つた。其時には母親の顔には神経のピリ／＼したやうな表情が漲り渡つて、裁縫をしてゐる物尺を疊に投げつけたり何かした。幼心にもそれが怖いやうな悲しいやうな氣がして、玉子はいつもよく泣いた。「この兒は泣蟲だよ」か



う母親に叱られたことを玉子は今でもはつきりと覚えてゐた。

いろ／＼に計畫した商賣の失敗の爲めに、宅を畳む時に残して持つて来た僅かな財産も段々少くなつて行つてゐた。「土田には商賣をさせては駄目だ」親類の人達もやがてはこんなことを言ふやうになつて来た。會社の事務員に世話する人があつて、父母に伴れられて遠い處に玉子が行つたのは、それから暫し経つてからのことであつた。その遠い町では、外國人がよく通を歩いて行つた。玉子が表で遊んでゐると「可愛い、可愛い……」などと、指して笑つて通つて行つた。わざ／＼傍に寄つて来て、頬の處をちよいと撫で、行く背の高い外國人などもあつた。そこでは玉子は海といふものを毎日のやうに見た。ボウーといふ汽船の笛の音が夜中に聞えた。

玉子の毎日通つて行つた小學校は、崖の下のやうな處にあつた。その廣い庭で、五六人の友達とお手玉を取つたり何かした時のことは、今でも繪の様になつてはつきりと玉子の眼に残つてゐた。幼い弟と父母と伴れ立つて、遠くひろ／＼と海の見える公園に行つた歸途には、そのちき傍の料理屋で午飯を楽しく食つて、それから少し来たところの青いペンキ塗の大きな家に入つて行つて寫眞を撮つた。其時「嬢ちゃんも眞中の方が好いでせう」と言つて、母親の傍に立つてゐる玉子をそのまゝ眞中に伴れて来た。その寫眞屋の莞爾した顔は不思議にも玉子の記憶にいつまでも残つてゐた。「さうよ、覚えてゐますよ、愛嬌のある莞爾した、薄い口髭のある——」寫眞箱の中からその寫眞を出して見る時には、玉子はいつもさう言つて其時分のことを思つた。其特別に父親と母親とだけで寫した寫眞も矢張その寫眞箱の中に入つてゐた。母親はお召の着物に

帯揚なんかをして、笑を含んでその左の方に立つてゐた。父親は會社の事務員と言ふよりは、堅氣の大店の商人といふやうな扮装をして、角帯をしつかり結んで、椅子に腰をかけて少し横向になつてゐた。「あの時お前が定雄と何か悪戯をしてゐたもんだから、それが氣になつてそつちを向いたんですよ、」父親は笑ひながら、いつもこんなことを玉子に言つてきかせた。母親は若くつて美しかった。

田舎の方の話は、一月も経つてから漸く纏つた。里の祖母はその金を拵へるために、持つてゐた家屋を一軒賣つたりなどした。「お前が強情なばかりに飛んでもない眼に逢つた」言ふまいと思ひながら、ついさうした愚痴が母親の口から出た。

「宗太郎を御覽な、あんな小さいのに、好く辛棒してゐるぢやないか」  
こんなことをも母親は言つた。

玉子は肩身の狭いやうな心持を始めて覺えながら、幼い妹を負つて町の通の方へ出て行つた。何うかすると、母親と父親とは物言ひを始めた。平生はやさしい落附いた靜かな氣分で、口を利くにも丁寧な物の言ひ方をする父親が、さう言ふ時にかぎつて、別の人かと思はれるやうな荒々しい言葉やら素振やらを見せた。折角昨日買つて来た片時も傍を離さないやうにしてゐた盆栽を庭に放りつけたりなどした。母親の強い烈しい聲が勝手元の方から聞えて来た。

玉子は世にもあられないやうな心持がした。田舎に行かない以前にも、それを見てゐるのが辛さに他所に出る決心をしたのだが、今は一層辛さと悲しさとが深く胸につき上げて来た。焦々して不愉快な濁つたや



うな空氣が時には二日も三日も續いた。「何も知らない罪のない子供を他人の中に出して置いて、親が遊んでゐるッてことがありませんか」などと、母親は言つた。「母さん、母さん、後生だから黙つてゐて頂戴よ。」玉子はかう言つて母親の袖を引いた。

縁側の隅の方で、午後の寒い日影を帯びながら、末の妹を遊ばせてゐる玉子の眼には、いつか涙が滴れさうになつた。それに、田舎から歸ると間もなく、玉子は女になるといふものを初めて見た。玉子は母親に知らないやうに、そつと井戸端に行つて、鹽に水を汲んで、汚れたものを洗つたりなどした。桃割に結つた小づくりな姿がはつきりと長い間井戸端に見えてゐると、其處に手桶を抱えて來た裏の小母さんが、「啖ちやん、また行くんですか」などと、訊いた。

母親が大勢の子供のことを常に頭に浮べて考へてゐると同じやうに、玉子も矢張弟妹のことを考へた。「宗ちやんは、今頃は何うしてゐるだらう。寒いから風邪でもひきやしないか。」かう思ふと、此間まで裏の天王山に行つて活潑に遊んでゐた幼い弟のことがすぐ思ひ出された。悪戯が烈しいので、近所からよく苦情を持込まれるやうな子で、母親は、「また、宗が悪戯をしましたか、ほんとに仕方がないんですよ」などと、言つて詫びた。かと思ふと向ふの出口一つで、「宅の悪いが、お前さんの處の兒も随分悪戯だよ」かう母親は喧嘩腰の物を言ひ方をしたりした。小さいに似合はず棒を立て、遊んだり船を拵へて見たりすることが好きなので、「機械商にするに限る。宗ちやんは器用だから」などと、人々は勸めて呉れた。玉子は同胞が皆離れなくなつて行かなければならない様な生活を悲しく思つた。

「もう二度とさういふ眞似はさせない」と口癖の様に父母が言ふので、玉子も今度は其氣になつて、好きな三味線も弾かずに、多くは母親を手傳つて勝手元にあつた。しかし時々田舎のお座敷のことなどを思ひ出した。それに、町の通りに出やうとするところに、玉子と仲好しで同じやうに甲府あたりにお酌になつて行つた娘の宅があつた。それはしもたやで娘を藝者などにしなくつても好いやうな家だつた。そこで玉子は其娘と一緒によく三味線を弾いたものだ。「雪ちやん何うしてゐるだらう？」玉子は其前を通る度に、遠くに行つたその友達を思ひながら歩いた。



三

二月になつてからのある寒い夜であつた。玉子は母親と一緒に茶の間に坐つて紅いメリンスの襦袢の袖などを縫つてゐた。父親は町から歸つて来てすぐ奥の八疊に寝に行つたが、いつかもう高い躰を立てゝゐた。ランプの光線は狭い一間を暗くほんやりと照した。苦勞にやつれた繕はない母親の顔が、浮出すやうに見えてゐる向ふには、茶箆笥だの、茶道具だの、鬱金の袋に入れられた三味線だの、水天宮を祀つた小さなお宮だのが混雑と並んで見えてゐた。本宅を疊んだ時から、段々に賣拂つたり何かして、今ではもう澤山には残つてゐないが、それでもまだこの狭い家には置き切れないほどの道具が柵の上に載せられてあつたりした。昔の形見の立派な時計は黒臙色にピカ／＼光つて、再びこの家に春の來るのを待つやうに靜かに時を刻んでゐた。

「寒いね、母さん」

玉子は裁縫の手を留めて母親の方を見た。

「もうお寢よ、十一時ぢやないか」

「本當に寒くなつた……」獨語のやうに玉子は言つて、其儘長火鉢の傍に來て、鐵瓶を下して、残り少くな

つた火に炭を加へた。

「お、寒い」

顔を両手で押へて、火の上に寄せるやうにした。その時ふと表の雨戸の處で誰か歎けるやうな氣勢がした。母親は裁縫の手をとめて、ちよつと聞耳を立てるやうにしたが、

「お前、誰か泣いてるぢやないか」

かう言つて、急に思ひ當ることがあると言ふやうに急いで母親は立ち上つて、障子を明けて上り端のところへと出て行つた。

「誰だえ？」

「……………」

歎ける聲は急に高くなり出した。

「宗ぢやないか」

かう言つた母親は急いで表の雨戸の鍵を外した。思はず知らず立つて來た玉子の顔も白く上り端の處に見えてゐた。

「宗だよ、お前」

かう言つて母親は玉子と顔を見合した。

「そんなところに立つて泣いてゐる奴があるもんかねえ？」外に立つて入るにも入られずぶる／＼顔へてゐ



る小さい黒い影を内に引入れながら、叱るやうにして母親は言った。また一つ殖えて来た苦勞が一番先に母親の胸に込み上げて来た。

「何うしたんだえ、お前」

「……………だつて……………己は辛いんだもの……………己は……………己は……………」

歎けながら宗太郎は障子の隅に小さく坐つて居た。正月歸つて来た時には元氣が好かつた。主人から貰つたお年玉が何かで風を買つて、天王山に行つて、一日面白さうに遊んで歸つて行つた。あゝいふ風なら落附いてゐられさうだ。かう思つて母親は安心してゐたのであつた。

「それぢや、お前、矢張御主人に黙つて遁けて来たのかえ？、困つた奴ばかりだね。本當に性根のない碌でなしばかりだよ、ねえ。勤まらないなら勤まらないツて、何故母さんなり御主人なりに言はないんだえ」氣の勝つた母親は後にはビリ／＼した調子で言つた。

母親の言葉は、玉子の小さい胸にも轟くやうに聞えた。「母さん、堪忍してやつて下さい。まだ小さいんだから……………」かう言つた玉子の眼からは涙が滴れた。

「何うした、何うした、宗が歸つて来た？」

父親は頓興な聲をして、奥から眼をこすりながら起きて来た。

黙つて坐つた親子四人の上によがて寒い寒い夜が更けて行つた。ひとつ夜着に寝に行つた姉弟はしつかりと抱きついていつまでも歎けの音を禁めなかつた。

## 四

同じやうな月日は經つて行つたけれど、玉子に取つては一年は短い間ではなかつた。玉子の心は日増に複雑になつて、細かい影が段々細かい影を生むやうになつた。悲しい辛い腹立しいことに逢ふといつともすぐ眼の縁を赤くした玉子も、此頃は黙つて考へて、下唇を噛むやうな癖が出来て来た。

玉子の前には、廣い世間がひらけてゐた。裏の小母さん、角の菓子屋の小母さん、近所の若い娘などのよくお饒舌に集る小間物屋のお上さん、さういふ人達の話も少しは玉子にも解るやうになつて来た。「お咲ちゃんなんか心配することはありやしないよ——」かう言つて笑ひかける小母さん達の言葉も満更お世辭ばかりではないらしいと思はれた。小間物屋のお上さんから「惜しいもんだよ、お咲ちゃんなんか三味線も弾けるし踊らつて出来るんだし、今に、母さんに樂をさせることなんか譯はないから」など、言はれて、何故田舎にもう少し辛抱してゐなかつたらうなど、思つた。好意を持つた眼と悪意を持つた眼との區別なども解つて来た。「田舎にお酌に行つたらう」など、いふ侮蔑の眼を他から向らけられた時には、大きなお世話といふやうな顔をして、ブイと向ふに立つて行くことなども覺えた。自分の家の貧しいことが何よりも口惜しいといふことは、田舎に行かない前からも思つてゐたけれど、此頃では、それが一層強く強くなつて行つた。



さういふ時には、玉子は母親から聞いた横町の住宅の話などをよく持出した。

玉子の住んでゐる横町から少し出ると、横濱の方へ行く汽車の線路が通つてゐて、その向ふに細い／＼裏道があつた。それはある遊廓の裏のやうになつてゐるところで、下宿屋のやうな大きな二階屋の格子窓からは、白粉のはけた色の蒼白い女の顔が見えたりした。時には襟當の汚れた赤い蒲團が高い物干に干してあつたりなどした。「あゝいふ人さへある……あゝして親の爲めに身を賣つてゐる人さへある……」玉子はこんなことを考へて、さういふ生活に自分から進んで入つて行きたいとすら思つた。「何んなことでも親のためなら、家の爲めなら……」かう玉子は考へて、一夜眠らずにゐたことなどもあつた。暗い焦々した狭い宅にゐるよりも、矢張廣い世間の方へ出て行きたくもあつた。

その頃、小間物屋の店で取つてゐる新聞に、悲しい小説の續き物が載つてゐた。それには親の爲めに苦勞をする若い娘の心が書いてあつた。玉子はそれが讀みたいばかりに、夕方になるといつも小間物屋の店の方へと出かけて行つた。「小母さん、今日の新聞は？」かう言つて玉子はいつも入つて行つた。丁度店に客があつてお上さんの手が塞つてゐる時には、「小母さん、見せて下さい」かう言つて自分で上つて行つた。其處にゐる七つ位の女の兒に破つて棄てられて、折角のつゞきを見られないで失望して歸つて來ることなどもあつた。明るい店のランプの下で熱心に新聞をひろけながらお上さんの夕飯の間に店番をしてゐる玉子の姿は、いつも通つて行く人達の眼についた。「小母さん、明日は來られないかも知れないから、新聞を除つて置いて下さいな」かう言つて歸つて行つたりした。

「お咲ちゃんはそれでもよく新聞を讀むのねえ。感心ねえ。そんなに面白くつて？」かうお上さんが言ふと、「だつて、小母さん、それは可哀相なんですもの」玉子は娘の心を思ひやつて、眼に涙を浮べてゐた。新聞には自分のまだ知らない世間のことが澤山に澤山に書いてあつた。

「お前、一體何處へ行くんだい？」  
毎日夕方になると、驅出すやうに出かけて行くので、後には母親は不思議にして聞いた。「それなら好いけれど、お上さんが煩さがりやしないか」

可哀相なその續物の他にも、新聞には種々なことが書いてあつた。男が女と情死したり、女學生を伴れて男が逃げて行つたり、男に出歯庖丁で女が殺されたり、男と女と一緒にゐる事をして牢屋に入れられたりした。かと思ふと、立派な人にひかされて、榮華を極めてゐる新橋の藝者のことを書いてある次に、貧しい家から、何々夫人と言われる迄飛離れた立身をした女のことなどが出てゐた。ダイヤモンドの指環、金鑽の時計、何百圓したといふ帯、馬車、花環——眼も彩にチラ／＼するやうなはなやかな世間が其處にあつた。玉子は眼眩しいやうな怖いやうな望みの多いやうな心持でいつも其處から歸つて來た。

「私なんか、そんな榮華は望まれない。何んなに貧乏な家でも構はないから、母さんや父さんの安心するやうなところに行つて、堅氣で暮さなけりやならない」こんなことを考へる時には、玉子の眼にはいつも涙が滴れさうになつた。くわつとして急に體が熱く／＼なつたりした。田舎に行つてゐた四ヶ月の経験が玉子の胸に蘇へつて來る様な時には、其處が女の榮華に行く途だといふ風に考へられて、姐さん達が各自に持つて



るる旦那の顔やら素振やらが眼に浮んだ。甲府に行つた仲の好い友達が羨ましく、「今晚は——」など、言つてお座敷に出て行く派手な姿が眼の前にちらついて見えた。幾夜か續いてお座敷の夢を玉子は見た。

氣のふさぐ時なんかには、三味線を出して、昔習つた常磐津をよく弾いた母親も、此頃では滅多に撥を取るやうなことをしなかつた。長押にかけた二挺の三味線には埃が一杯にたまつてゐた。玉子が弾かうとすると、「三味線なんかおよしよ。忘れてお了ひよ」など、母親は言つた。長屋の窓から三味線の音の微かに通に洩れて聞える時は、それは大抵母親の留守の時であつた。玉子は乗合などをよく弾いてゐた。

勝手元に出て、母親を手傳つて、煮焼をしたり洗物をしたりするのは左程苦には思はないけれど、細い綺麗な指の段々汚れてしみだらけになつて行くのが玉子には辛かつた。リスリンをそつと買つて来てつけて、手と手を引くり返して見てゐるやうな寒い朝もあつた。

おつくりをする道具にも玉子は以前のやうに親しんでは居られなかつた。小さい時から、お化粧をするところが好きで、朝日の當る椽側に鏡臺を持出して、長い間白粉をつけたり髪をいぢくり廻したりしてゐることが多かつた。「お前、いつまでいぢくり廻してゐるんだい」など、母親はよく叱つた。母親が結つて呉れた髪が氣に入らないで半日ぐづぐづ言つてゐることなども以前には度々あつた。しかし此頃では自分の氣に入るまで鏡の前に坐つてゐることなどは出来なかつた。三日も四日も壊れかけたまゝで髪櫛を入れなければならぬ桃割を玉子は悲しい心持で鏡に寫した。

ある日父親は毎日出かけて行く役場からブン／＼怒つて歸つて來た。「俺はもうあんな役場やめて來た。人

を馬鹿にしてやがる」

母親が聞いても、譯は話さずに、父親は唯怒つてゐた。「あんな役場なんか誰が行つてやるもんか。人を馬鹿にするのも好い加減にしろ」相手が眼の前にでもゐるやうな口の利き方をして、父親は額に青筋を立て、ひどく激昂してゐた。

「父さん、そんなに怒つてゐても、見てお出で、明日の朝はまたのこ／＼出かけて行くから」母親はこんなことを言つてゐるが、翌朝になつても父親には出かけるやうな様子は見えなかつた。「お前さん本當なの？ 役場をやめたつて言ふのは——」母親はかう言つて父親の顔を凝と見た。

「何もあんなけちな所に出てゐなくつても、他にいくらも好い處がありますから大夫丈です」父親は昨日とは打つて變つて厭に落附いた調子で笑つてゐた。

町の役場に周旋する人があつて二年ほど前から父親は勤めてゐた。税の方などを取扱つてゐたのであつた。しかし、薄給ではあるし、盆栽を買つたり好きな甘い物を食べたり、江戸ツ子氣質の物惜みをするのが大嫌ひで、他人の爲めに財布をはたくのを何とも思はなかつたりするので、家計の足しにはいくらもならないやうなものであつた。「お前さん、今月はもう五圓入れて呉れなけりや困るぢやないか」かう母親が言ふと、「そんなこと言つたつて、もうお金なんかありやしませんよ」なぞといつて笑つて取合はないやうな父親であつた。それに、役場の同僚の爲めに、高利を借りる保証人になつて酷い目に逢はされたことも一度や二度ではなかつた。「お前さん、もう役場なんかやめてお呉れよ。本當に馬鹿々々しい。手ぶらで遊んでゐるて貰ふ方が



いくら好いか知れやしない」母親は困つて後にはこんなことを言つた。しかし、勤めてゐれば、何んの彼のことでも、其日其日をまぎれて送つて行くことが出来た。父親の身の廻りのことだけでも不自由な思ひをせずに済んだ。それがいよ／＼やめたとなると、重荷はまた一家の生計の上に加はつて行つた。

母親の不機嫌な顔は玉子の心を暗くした。父親が長い日を平氣で盆栽などをいぢくつて暮してゐるのを見るのも辛かつた。逃て歸つて來た宗太郎は「まあ、それぢや俺の宅にでも來てゐろ」と言つて母方の叔父が一時伴れて行つて呉れたが、弟達の前に對しても、かうして自分ばかり遊んでゐられないやうな氣が段々玉子の胸に濃くなつて行つた。藝者には母さんが何うしてもして呉れないから、何處か堅氣の奉公口をさがさうと思つて、玉子は獨りで小間物屋のお上さんや菓子屋の小母さんなどに頼んで見た。自分でも二つ三つ町の通りの桂庵に出かけて行つて、何處か好いお邸か何處かで見習ひ奉公に行くやうなところはなかつたか。唯の奉公ではお邸でも何でも一月働いていくらにもなりはしませんよ」などと言つた。その時玉子よりぐつと容色の悪いあんな女かと思はれるやうな十六七の娘が自分で進んで妾奉公の口を探しに來てゐた。玉子が頼んで歸りかけると「お前さん、一體、何處？家は？」など、氣味悪く玉子の顔を眺めながら婆さんは言つた。

堅氣の奉公なら見習の爲めに出しても好いといふやうな口振を母親は見せた。かうして皆なして遊んで食つてゐても仕方がなかつた。一人でも口を減したいといふ母親の考へであつた。しかしさうした奉公では、

親に樂をさせることなどはとても望めなかつた。玉子は近所にゐる手を鞍だらけにして使ひ小走りに出て行く家婢達の慘めな生活に其身を置いて考へた。知つてゐる裏の邸のお留さんといふ仲働は、朝は暗い中から起されて掃除をしたり子供の世話をしたりして働いてゐたが「咲ちやんなんかとても勤まりやしませんよ。それは忙しいんだから。お化粧してゐるひまなんかありませんから。私なんか鏡を棚の上に置いて、ひまを見てちよい／＼するんですけど、それでさへ、奥さまが何とか彼とか喧しく言ふんですもの。とても駄目ですよ」など、言つて聞かせた。

何處か好い處の小間使ならと言ふので、父親は彼方此方に行つて聞いて見て呉れた。時には大店の商人の家が却て氣風に合つて好いかも知れないなど、も言つて、わざ／＼日本橋の方の大きな桂庵に行つて頼んでも見た。しかし、いざとなると、此方で二の足を踏むやうな處でなければ、厭な意味のかくれてゐるやうな處が多かつた。玉子は後には氣を腐らして鬱ぎ勝に月日を送つた。

父親の勤口の方も矢張拂々しく運ばなかつた。月給は少くとも樂な處と云ふやうな父親の望み方は、到底忙しい當世風の勤口には向かなかつた。父親は午後になると、いつも手拭に石鹼箱をくるんで湯から歸つて來て、母親の顔色が面白くないと見ると、「ちよつと、其處まで」など、言つてすぐまた出かけた。

「咲ちやんるますか」

ある日かう表から聲をかけたのは、通の小間物屋の上さんであつた。母親が其處に顔を出すと、「ちよつとこの咲ちやんを貸して頂きたいんですが——」上さんはかう軽く挨拶しながら言つた。母親はまた母親で、



「いつも喉が上つて、お邪魔ばかりして、さぞお喧しう御座いませうに……」など、言つて、「喉や」と後の方を振り返るやうにして呼んだ。玉子は勝手の方にゐた。

玉子が顔を窓の處に出すと、上さんはかねて言つて置いたことを知らせるやうな眼配をして、「ちや、ちよつと遊びに来て頂戴ね」

「え、すぐ」

かう玉子は言つたが、小さい胸は俄に躍つた。「今度、従妹が來たら、是非一度逢つて話を聞いて御覽よ。來たら知らせるからね」かう上さんは此間も言つた。上さんの従妹といふ人は、ある土地で長い間藝者をしてゐて、今では旦那から金を出して貰つて、抱妓を二人も置いて藝者屋を始めてゐた。

「従妹は去年藝者の方を廢業したけれど、矢張長くるた土地なもんだから、お茶屋さんや何かに懇意で、抱妓はよく賣れますよ。私なんぞが行つて見てゐても、よく口がかつて來るんで羨ましい位だよ。」などと上

さんは話した。「田舎なんかとは、そりや比べものになりやしないよ、喉ちやん」なども言つた。上さんはその従妹を中心にして、玉子の心をそゝるやうなことを澤山に話して聞かせた。

その人が今小間物屋に來てゐると言ふことは、上さんの眼配せで玉子にはすぐわかつた。玉子は銘仙の新しい着物に着換へて、「何にもそんなに改まつておつくりなんかしないでも好いちやないか」と母親の言ふにも頓着せずに、鏡臺に向つて永い間髪を直したり白粉をつけたりしてから出かけて行つた。小刻みな駒下駄の音は、いつもと違つて、元氣よく通に聞えた。

「小母さん、先程は失禮」かう挨拶して玉子は店から上つた。店と奥とを劃つた硝子障子の間から上さんの顔がちらと見えて、その奥にその従妹の姐さんが坐つてゐた。「此方にお出なさいよ」かう上さんに言はれて、玉子はきまりわるさうにして入つて行つたが、明るい處から來たので暫しは何も見えなかつた。

「好い子だねえ」

かういふ聲を玉子は先づ耳にした。

段々四邊が見え出して來た頃には、結城の縞の着物に鼠かゝつた羽織を着て、黒緋子とお召の腹合の帯をしめて、指環を三つも四つも兩方の指にはめた三十近い意氣な年増の姐さんが其處に坐つてゐるのを玉子は見た。早口で物を言ふ癖があつて、何か言ふ時にはちよつと片頬を少し笑ませた。眉のところと口のあたり

に溢れるばかりの愛嬌があつた。

「あの光るのがダイヤだよ」

玉子はこんなことを思ひながら、右の方の指にはめてゐる煌々した指環を見た。

上さんと其人とは従妹同志以上の親しい口の利き方をした。藝者屋を出してゐる土地の話だの、お茶屋の上さんの話だの、お客の話だのをその姐さんがすると、上さんは店の商賣の不景氣なことだの、何處かの工場へ勤めてゐる自分の亭主の話だのを何の彼のと持出して話した。「お前さんなんか仕合せだよ、御覽な、私なんかこんなにして働いてゐるんだよ。髪なんか丸で箒のやうだよ」かう言つて上さんは壊れかけた丸髻に觸つて見たりした。其處に、店にお客が來て上さんは立つて行つた。



『田舎に行てゐたんですってね』かうその姐さんの言ひ出したのを切っかけに、玉子は種々田舎のお座敷のことなどを話した。『祝儀が五十錢よりも少いことなどあるんですか』などと、その姐さんはさも吃驚したやうに言つた。其處に店から入つて来た上さんは、『肥料臭い人ばかり相手にしてゐるんだもの、田舎ぢや仕方ありやしない。それもね、前橋とか長野とか言ふ處ならまだ好いけれど……あんな處ぢや仕方がないよ。何故あんな處に咲ちやん行く氣になつたんだらう？』

『でも小母さん、大變に好い處のやうに言はれたんですもの』玉子は氣耻しいやうな氣がして顔を赧くした。『咲ちやん氣の毒だけでも、ちよつと角まで行つてお鮎を言つて来て頂戴な』かう上さんから頼まれて、其處にゐた女の兒をつれて出かけて行つたが、やがて歸つて来た玉子は、奥に行くのが何だかきまりがわるいやうな氣がし出した。上さんとあの姐さんと、何か自分のことを噂してゐたに相違ない。あんな子は駄目だなどと、言つてゐたかも知れない。かう思つて玉子は失望した。私なんか、とてもあんな好い姐さんの家の抱妓にはなれやしないなどと、思ひながら、店で女の兒の相手になつて、繪のある雑誌などを玉子は見てゐた。『咲ちやん、咲ちやん』かう呼ばれて再び奥に行つた時には、上さんは好きな酒を爛德利に入れて銅壺に浸けたりなどしてゐた。『さつき肴屋がお前さんの好きな蟹を置いて行つたから、それを煮て上げるよ。秋蟹だから旨いよ』なども言つてゐた。自分のことは何もそんなに言はなかつたらしいので、玉子は安心して其處に坐つた。

鮎が来る時分には、その姐さんの顔もほつと赤くなつてゐた。『私はこれで此頃強くなつたんだよ』などと、

云つて、盃を唇に當て、旨さうにして飲んでゐた。上さんに盃をさゝれた玉子は、『私、飲めないの』など、云つた。やがて三味線が取出された。一つ二つ上さんの弾いた後をその姐さんが常磐津を弾いた。玉子も後には無理やりに撥を取らせられた。



五

明けて十六になつた年の二月に、玉子はその姐さんの家から抱妓になつて出る事になつた。去年の秋に小間物屋で逢つてから、姐さんは何うしてもあの子を抱妓に置きたいと何遍も何遍も言つて来た。三味線もあの位出来ればまあ何うにか、うにか間に合ふし、容色は萬人に勝れたといふほどではないが、あれより悪くつて立派に流行つてゐる妓達も澤山ある。それに、あの冴えた氣の利いた明るい調子が好い。あれなら屹度賣れる。賣れなくも私の腕で賣つて見せる。かうその姐さんが言つてゐると小間物屋の上さんは玉子に話した。「堅氣の奉公なんかしたつてつまらないよ。さうする方が好いよ、咲ちやん」かう言つて上さんは度々勧めた。

「私が行つて、お母さんに話して上げやう」

小間物屋の上さんはわざ／＼出かけて行つて、玉子の母親に逢つて呉れた。初めの時には、母親はきつぱりと斷つて置いて、あとで玉子をその傍に呼びつけた。

「お咲、お前は一體何ういふ氣だえ？まだあれだけで懲りないのかえ？お前の了見を聞かしてお呉れ」かう言つた母親の聲は眞面目であつた。

「母さん、何うか堪忍して下さい。堅氣の奉公をするにしても、私の勤まりさうな處は何處にもありやしないんですから……。今度はもう屹度父さんや母さんに迷惑をかけるやうなことはしませんから、何うか、もう一度其處にやつて下さい」玉子はその時一生懸命になつて、さうした意味の言葉を切れ／＼に言つた。母親は唯黙つてゐた。

母親も迷つてゐるやうに見えた。強ひて留めやうともしなかつた。結局はお互に考へて見るといふやうな形になつたまゝで、一日は一日と經つて行つた。小間物屋の方へ出かけて行く玉子を引留めるやうに母親の仕向けることなどもあつた。「お前、小間物屋の娘のやうだね」なども言つた。とても母親が許して呉れさうにもないので、つまらなさうな顔をして、妹に當つたり何かしてゐる時には、玉子の心は暗い生活の底に落ちて行くやうに悲しくさびしかつた。「それほど當人が望むんなら、思ふやうにさせて了ふ方が好いちやないか」かう父親はのんきなことを言つた。

寒いさびしい年の暮はさうした何方つかずの氣分の中で過ぎた。ごまめ、數の子、鮎の昆布巻、何んなに困つてもそれだけは小さくしたくないと母親の言つたお供餅は、赤い大きな蝦と橙とを載せて、茶箆筒の傍の處に見事に飾り立て、あつた。正月はそれでも賑やかに暮した。母方の叔父さん達がやつて来て、お秀お秀と母の名を呼んで、酒を飲んで行つたりした。小さい方の叔父さんは「折角當人がさう望んでゐる氣を折いてもいけないから、思ひ切つて、さうさせて見るのも好いだらうよ。今度は二度目だし、それに、大きくなつてゐるから、この前のやうなことはないだらう」かう言つて玉子の味方をした。叔父さん達は堅



氣の奉公などのとても玉子に出来ないといふことをよく知つてゐた。玉子が妹と一緒に家の前で大きな羽子板で羽根をつけて遊んでなどゐると、通りすがりの人は皆な振り返つて見て行つた。

十六日には、本屋に行つてゐる定雄が宿下りで遊びにやつて来た。他人の中にも春丈は伸びて大きくなつてゐた。

「お前、十四になるんだね、早いもんだね」かう玉子が言ふと、「姉さんだつて十六になるんぢやないか」かう言ふ弟の言葉に皆な笑はずには居られなかつた。切餅の焼ける匂ひだの香ばしい海苔の匂ひなどが一間に楽しく漂ひ渡つた。丁度其處へ小間物屋の上さんがまたやつて来た。それでは出すことにしやうときまつたのは、定雄が一日遊んで歸つて行つた後であつた。

さうきまつたなら一刻も早い方が好い、二月から出るやうにしませうと先方からは話を急いで来た。前のこともあるから成だけ多い金で體を縛ることはやめにしませう。身のまはりの支度金だけでもと此方で言ふのを、それでは餘り話にならないからとのことで、小間物屋の上さんが中へ入つて、相應の金を持つて来て、それで證文を入れることにした。

着物は皆な先方持ち、着の身着まゝで行つても好いだけけれど、さうも行かないと言ふので、家にあるもので入用なものは皆な持つて行かせるし、他に新しいのを二三枚母親が見立て、買つて来て呉れた。で、お召の派手な模様だの、不斷着の銘仙の羽織の縞柄などのあたりに散らばつて見えてゐる一間で、母親は毎夜遅くまで針を運ばせた。

種々な話を持つて母親が始めてその姐さんを濠端近い家に訪ねた時には、姐さんは喜んで迎へて何彼と款待して呉れた。下の六疊が藝者達のゐる處で、其處からは三十近い年増の看板借りの人が此方へ出て来て丁寧にあ挨拶をした。丁度その時五目の師匠が来てゐて、若い抱妓達は、聲を張り上げて唄を唄つたり三味線を弾いたりしてゐた。二階が姐さんの居間になつてゐるらしかつた。

「本當に何にもまだわからないんですから、何うか十分に仰しやつて戴きませんと……」かう頼んで歸つて来た母親の眼には涙があつた。母親は娘の行末のことなどを考へながら、濠端の路を山の下で電車の停留場の方へと歩いて行つた。其處には料理屋だの待合などが澤山に軒を並べてゐた。

「もう二度と家に逃げて来るやうなことはさせない。今度こそは家からはすつかり離れて他人の中に入るのだから」かう言つて母親は種々なものを拵へては御馳走をして呉れた。二十日正月には玉子の氣に入るやうにお汁粉をつくつて呉れたりした。一日は父親が川崎の大師から穴守の方へと伴れて行つた。さうされ、ばされる程玉子は悲しくなつて涙が出た。田舎に行つた時にはまだ知らなかつたやうな別離の辛さを染々と身に覺えた。

明日行くといふ夜は、神棚に燈明がついて、玉子の膳には心ばかりのお頭附きの魚が載せられた。「お前の心祝ひだよ」かう母親に言はれると、玉子の小さい體はわく／＼震へた。嬉しいやうな悲しいやうな情ないやうな心持で胸が一杯になつて箸も碌々取れなかつた。あくる日は種々世話になつた小間物屋の上さんに暇乞をして、母親に伴れられて家を出た。おとなしく上り端の處に父親と並んで見送りに出てゐた妹の方へ



は、玉子（たまご）は出かけてからもう一度戻つて行つて頭（かぶり）を撫（な）でた。「おとなしくしてお出（い）でよ。おさんまたすぐ来るからね」

それは晴（は）れた寒い日（ひ）で、通（とお）の大きな邸（やしき）の門（かど）の處（ところ）には、碧（あざ）い空（そら）を地（ぢ）に梅（うめ）が白（しろ）くくつきりと咲（さ）いてゐた。姐（あね）さんの家（うち）の方（ほう）では、お弘（ひろ）めをする支度（しだく）がもうちやんと出来（でき）てゐた。姐（あね）さんの元（もと）の名（な）の雪子（ゆきこ）にちなんで、其處（そこ）の藝者（げいしや）は大抵（たいてい）皆（みな）な雪（ゆき）の字（じ）をつけてゐた。雪子（ゆきこ）、小雪（こゆき）、雪助（ゆきすけ）——玉子（たまご）は雪江（ゆきえ）と名乗（な）つて出（い）でることになつてゐた。その名（な）の入（い）つた手拭（てぬぐ）なども、う出来（でき）て來（き）てゐた。

近所（きんじよ）の湯（ゆ）に入（い）つて來（き）て、鏡臺（きやうだい）に向（む）つて丁寧（ていねい）にお化粧（けいざう）をして、さていよくお弘（ひろ）に出（い）でかける支度（しだく）に取りかゝつた。姐（あね）さんと雪子（ゆきこ）とが何（なん）の彼（か）の世話（せわ）を焼（や）いて呉（く）れた。それはお古（ふる）ではあるけれど今（いま）までに身（み）につけたことのないやうな立派（りっぱ）な衣裳（いしやう）であつた。で、キウと帯（おび）を緊（き）めて、襦（じゆ）を取（と）つて、すつきりと立（た）つた其姿（そのすがた）を大きな鏡（かがみ）に寫（うつ）した時（とき）には、玉子（たまご）は自分（じぶん）ながら一本（ほん）の立派（りっぱ）な藝者（げいしや）になつたやうな氣（き）がして嬉（うれ）しかつた。やがて箱屋（はこや）につれられて、土地（とち）の料理屋（れうりや）やら待合（まちあひ）やら藝者屋（げいしやや）やらを一軒（いっけん）廻（ま）つて行く玉子（たまご）の姿（すがた）は、午後（ごご）の晴（は）れた町（まち）の空（そら）氣（な）の中に浮（う）き出（い）でるやうにくつきりと見（み）えてゐた。

## 六

お弘（ひろ）めから歸（かへ）つて來（き）ると、雪子（ゆきこ）の出（い）でゐる待合（まちあひ）から電話（でんわ）がかゝつて來（き）た。「今日は私（わたし）一番（いっばん）先に聘（よ）んで上げるよ」かう雪子（ゆきこ）が先程（さきほど）言（い）つてゐたのを思（おも）ひ出（い）して、玉子（たまご）は嬉（うれ）しく出（い）でかけて行（い）つた。

田舎（いんか）で經驗（けいけん）したのは丸（まる）で違（ちが）つてゐる場所（ばしょ）の不慣（ふな）れも氣（き）にはなつたが、兎（う）に角（かく）一本（ほん）の藝者（げいしや）になつたと言（い）ふ嬉（うれ）しさの方が先（さき）に立（た）つて、思（おも）つたほどきまりのわるい思（おも）ひもせず玉子（たまご）はお座敷（ざしき）に入（い）つて行くことが出来（でき）た。お客（きやく）は肥（あ）つた頭（あたま）の少し禿（は）けた四十格好（しじゅうかくこう）の人（ひと）で「好（こ）い妓（ぎ）だ。今（いま）に大（おほ）に發展（はつてん）しやうな妓（ぎ）だね。」など、言（い）つて笑（わら）つた。「いくつだえ？」なども聞（き）いた。

雪子（ゆきこ）の他（ほか）に、他（ほか）の若（わか）い藝者（げいしや）が二人（ふたり）ほど其處（そこ）に坐（すわ）つてゐた。玉子（たまご）はその人達（ひとたち）から顔（かほ）だの扮装（ばんざう）だのをじろくくと見（み）られるのがきまりがわるかつた。それにその藝者達（げいしやたち）が、ねて知（し）つてゐる仲（なか）だと思（おも）ひ、近く（ちかく）にある劇場（げきやう）に出（い）でゐる役者（やくしや）の話（はなし）などを何（なん）の彼（か）のと面白（おもしろ）さうに話（はな）した。お客（きやく）に冷（ひや）かされて、「あら、さうぢやなくつてよ。まさか私（わたし）でも……」など、若（わか）い方（ほう）の一人（ひとり）は言（い）つた。

玉子（たまご）はその人達（ひとたち）に何（なん）か話（はなし）しかけて懇意（こんい）になりたいと思（おも）つたけれど、何（なん）ういふことを言（い）ひ出（い）して好（こ）いのか、何（なん）ういふ口の利（き）き方（かた）をして好（こ）いのか、それがちよつとわからないので黙（だま）つて手持無沙汰（てもぶさた）にして坐（すわ）つてゐた。



お銚子の代りを下の帳場へ二度も三度も取りに行つた。お客の廁に入つてゐる間には、帯の間から鏡を出して、そつと顔を映して見た。肥つた、人の好きさうな、莞爾した其處の女中は、「今日お弘をしたの？雪江さんって言ふの？またかけて上げるよ」など、親切に言つて呉れた。

其席では、若い方の一人が「柳」といふのを踊つた。踊の巧いのにも感心したが、雪子の三味線の冴えてゐるのにも心を惹かされた。玉子は羨ましいやうな心持でそれを見た。

一時間ほど其處にゐて、今度は通の奥になつてゐる小料理屋の方へと玉子は出かけて行つた。それは姐さんの旦那が義理でかけて呉れたお約束の座敷であつた。その旦那は、兜町の方へ手を出したり何かしてゐる商人で、中背で男振の好い唄の上手な人であつた。先程、お弘に出かける前に、丁度二階から下りて来て、「好い妓だ」など、言つて玉子をほめた。かと思ふと、「しかし大變だね、かういふ處から大きい姐さんになつて行くのは、」なども言つた。お約束のお座敷には、姐さんも家の二人の抱妓も皆な行つてゐた。それにその料理屋の女將は、姐さんとは深い懇意の仲であつた。水入らずだけに、座敷は面白い遠慮のない氣分で話されて、平生は謹んで成たけ酒をやめるやうにしてゐる姐さんの顔まで赤く／＼なつた。後には土地で名高い大きな藝者屋から、綺麗な酌が三人までもやつて来て、賑かに踊をどつたり何かした。

皆なして家に歸つて来る途中で、「ちよつと、皆な旦那と一緒に歸つてゐてお呉れよ。私はちよつと此妓を伴れて頼んで来る家が二三軒あるから、」かう言つて姐さんは玉子を伴れてある家からある家へと入つて行つた。姐さんはかなり酔つてゐた。「さつき見たらう。好い妓ぢやないかえ。最良にしてお呉れよ」ある家で

はこんなことを言つた。姐さんと一緒に長い間この土地に出てゐたある待合の女將は、「いゝともね。今日はお座敷にしてやるよ。遊んでお出でよ」など、言つた。その女將は酒に酔つてゐた。

帳場のところに坐つてゐると、姐さんは帯の格好を直して呉れたり、襟を引張り出すやうにして呉れたりした。「本當に好い妓をさがしたね。丁度好いよ、この位が」など、其家の女將は言つた。姐さんは姐さんで、「本當にまだ何にも知らないんだから、おほこなんだから……でも好いわねえ、この位の中が。今に苦勞を覚えるんだよ」こんなことを言ふかと思ふと、「私達だつて、一度はかう言ふ時があつたんだからね……。本當に今でも綺麗な子供なんか見ると、もう一度あゝいふ年になりたいと思ふよ」姐さんはこんなことを言つたりした。

植込の緑葉の中に灯影のチラ／＼するやうな家が多かつた。門から入つた處に籠行燈のついてゐる家などもあつた。室といふ室が皆な綺麗に掃除してあつて、床の間には水仙などが生けてあつた。二階にも下にも客があるらしく、三味線の音が盛にして、笑ひ興する聲が賑かに其處から洩れて聞えて来たかと思ふと、電鈴の鳴る音につれて、女中は忙しさにバタ／＼と廊下を通つて二階へと上つて行つた。一方では、電話機の把手をぐる／＼廻して、「あなた検番ですか、三筋さん、お座敷」など、いふ聲が聞えた。

「もう一時間ほどすると貰へますから、待つて、貰つて下さいな。よう御座んすね。……さう、困るわねえ。だつて、私もう少しさつき電話がかゝつて来たばかりなんですもの。何とか言つて待たして置いて頂戴よ。ね、よう御座んすね……。それからね。あの話、何うなつて？、あゝさう、それなら好いけども……。ちや



左様なら」

かういふ電話が聞えたと思ふと、酒に酔つた二十三四の丸顔の綺麗な藝者が着物の裾をだらしく引摺るやうにして、帳場の方へと入つて来た。何うしたの？と言ふ眼色をお上がすると「これよ……」と小指を出して見せて「まア、姐さん、今日お弘めした妓？」と言つて、其處に坐つて居る玉子の方を見た。その藝者の指にはめたダイヤの指環が玉子の眼にきら／＼と光つて見えた。

「雪江ちゃんツて言ふの？」玉子の挨拶するのを見て、「何うぞ何分——」とちやかすやうな口の利方をした。「静ちゃん、相變らず元氣ね」

かう姐さんが笑ひながら言ふと、

「あたいなんか駄目よ」かう言つて、其處にあつた敷島の袋から一本抜いて火をつけて、それを中指と人差指との間に挟んで、すば／＼吸ひながら、すうと其處から出て行つて了つた。廊下で女中と何か話してゐる聲が暫しの間聞えてゐた。

其處に肥つた女中がやつて来て、「今お客様にお座敷にして貰ふやうに頼んで上げましたから、ちよつと顔を出してお出なさい」と言つて呉れた。玉子は喜んで禮を言つて其方へと行つた。

一時間ほどして、玉子は帳場に来て、お上さんに挨拶して、家の方へと歸つて行つた。其處から家はいくちもなかつた。家では抱妓の小雪といふのが六疊の處にゐて顔を出して迎へて呉れた。雪子も、う一人の方の抱妓もまだお座敷から歸つてゐなかつた。

婆やに手傳つて貰つて、着物を脱いだり疊んだりしてゐると、軽い足音がして二階から姐さんが下りて来た。「あそこでお座敷にして呉れたから、四つした譯だわねえ。好い方だともね……。今に面白いやうに賣らせて見せるよ」姐さんは機嫌の好い調子でこんなことを言つて、「勝本ツて言ふ家はあれで中々流行る家だからね」お客にも好いのが来る處だよ。それにお上さんがしつかりしてゐるからね」二階には旦那が酒を飲んでゐた。姐さんはやがてまた二階に上つて行つた。爪弾か何かの三味線の音が微にした。

十一時過ぎになつてから口がかゝつて来て小雪はまた出かけて行つた。少しすると、姐さんは下りて来て「何處から」など、婆やに聞いているが、火鉢のところにはつねんとさびしさうに坐つてゐる玉子の方を見て、「もうお寝よ、今に流行るやうになると、早くから寝てなんかなるられないけれど……、今日は疲れたらう。お弘の日はイヤに氣が張つてゐるもんだから」など、笑ひながら言つた。勝手元の方に向いては、「婆や、二階の支度をして呉れよ」

姐さんはもう不斷着に着改へて、捧箱のお召の前懸などをかけて、仇つほい風をしてゐた。いくらか酔さめの氣味で、顔にはまだほんのりと紅く残つてゐるけれど、「お、寒い」など、言つて、両手を頬に當てて顔を火の上に寄せた。機嫌の好い顔色で、微笑を含んで玉子の方を飽かずに見てゐた。

婆やが二階に上ると引違ひに、銘仙のどてらか何かを引かけた旦那は、莞爾しながら下の方へと下りて来た。廁に入つてゐる時間はかなり長かつたが、聽て手を洗ふ氣勢がして、今度は姐さんのゐるところの後の障子を明けて此方へと入つて来た。「此處にお坐りな」かう姐さんが言つて席を譲らうとすると「なアに此方



「で好い」かう言つて旦那は今まで婆やの坐つてゐた方へと行つて坐つた。矢張赤く酔つた顔を莞爾させて、王子の方を頻りに見てゐた。

「これを上げませう」

姐さんは傍にあつた緋縮緬の大きな座蒲團を取つてやつた。

「好い子でせう？」姐さんは王子の方を見ながら旦那に向つて、「これで、お座敷馴がしさへすれば、立派な好い妓になるよ。私があれば大騒ぎをしたのも無理がないでせう」小間物屋で逢つた時とは丸で違つたやうな、あの姐さんがこんな様子をするかと思はれるやうな甘たる口の利き方をして、火鉢の上に翳してゐる旦那の手に自分の小さい白い手を合はせたりなどした。仇つほい眼色をして旦那の顔を飽かず覗くやうにして見てゐた。自分でついだ茶碗の茶を半分旦那に飲ませたりした。

婆やが二階の支度をすませて下りて来ると、「お行火の火も入れて？」と訊いて見て、「ちや、もうおやすみなさいよ」

「うむ」

など、旦那は言つてゐるが、もう一度茶碗に茶をついで飲んでから、すつと立つて靜かに二階へと昇つて行つた。

姐さんは猶暫らく其處に坐つて、婆やを相手に、檢番から持つて来た御祝儀の話だの、雪子も今夜は泊りだらうといふ話だの、お茶屋の上さんの噂だのを長々と饒舌つてゐるが、「本當にもうお寢よ」かう玉子に言

つて、「婆や、蒲團はあれを出しておやりよ」。

姐さんが二階に上ると、賑やかな笑聲がまた一しきり聞えてゐるが、玉子の寢道具を婆やが出して呉れる時分には、それも、うばつたり絶えて、裏通を行く夜更の汁粉屋の賣聲が際立つて四邊に聞えて来た。

玉子は六疊の隅の方に蒲團を敷いて、壁の方に顔を向けて海老のやうに足を曲げて小さくなつて寢た。壁の向ふは丁度二階に上る階梯のところになつてゐた。玉子はいろ／＼な光景を心に繰返した。思ひがけない世間が玉子の前に展けられて来たやうな氣がした。雪子さんは泊つて来る。小雪といふあの妓はあんなに遅くなつてから、出かけて行く。もう一人の雪助といふ人は何うしたんだらう。かう考へると、それからそれへといろ／＼なことを思ひ出されて、何うしても眠られない。それにしても、母さんは何うしてゐるだらう、もう寢たらうかなど、考へると、今度は狭い自分の家だの父母のことだの宗太郎のことだのが際限なく眼の前に浮んで来た。小さい妹がさびしさうに一人で寢てゐるさまなども思ひ出された。涙はいつか玉子の胸にこみ上げて来た。ふと氣が附くと、二階からは、細々した話聲が聞えて、つゞいて微に笑ふ聲がした。

うつら／＼してゐる中に、つい寢込んで了つたと見えて、一時過ぎに音高く格子を明けて雪助が歸つて来たのも玉子は知らずにゐた。眼を覺すと、朝日が窓から差込んで、通を人が歩いてゐた。

「私、ちつとも知りませんでしたよ」起きてから玉子がかう雪助に言つた。何うも抱妓達の使ふやうな言葉がきまりがわるくつて玉子にはまだ言へなかつた。

「あら、姐さん、虚言よ、そんなことなんかないわ。それは虚言よ」などと、抱妓は軽い調子で言つた。



藝者達のゐる室と座敷と長火鉢のある茶の間とは、抱妓達が毎朝掃除することになつてゐた。雪助といふ妓は、三味線は上手だが、容色はそんなに好い方ではなかつた。體もわるく肥つてゐた。黒褌子の襟のかつた半纏などを着て、バケツの水を汲んで来て、玉子の掃除をするあとから、縁側の拭掃除をテキパキとした。玉子は白い手拭を髪の上に見せて、赤い袴をかけて、茶の間の障子を軽くバタ／＼と掃いた。猫が縁側の目當に丸くなつてゐると、その向ふの庭にそろ／＼咲き初めた沈丁花が白く、つきりと見えてゐて、隣り待合の栽込の松の緑が蔽ひかぶさるやうに此方に靡いて来てゐた。

掃除のすんだ時分、二階からどてら姿で下りて来た旦那が、婆やの汲んで持つて来た金盥の傍で、長い間草楊子をつかつてゐるのが此方から見えた。金盥からは湯氣が微に白く揚つてゐた。稍暫くしてから、寢着姿の姐さんが下りて来て、「小雪ちゃんまだ歸つて来ない？ 雪ちゃんも……」こんなことを言つて、充血して赤くなつた眼を丸くして、長火鉢の傍に行つて、引寄せるやうにして長煙管を取つたが、立膝をしたまゝで煙草を一服二服ふかした。

で、旦那と姐さんとは朝からまたさし向ひで二杯始めてゐるが、それを他所に雪助は勝手の方から茶碗とお櫃とを抱えて来て、藝者達のゐる暗い室で、小さい餉臺の足を起した。婆やが漬物を入れた井を持つて来ると、

「婆や、買つて置いて呉れて？」

かう雪助が訊いた。

「買つて置きましたよ」わざと押つけるやうに婆やは言つて、苞から小皿に移した納豆を其處に持つて来た。

「よくお前さん飽きないね」

「だって、私、納豆がなくなつちや朝の御飯が何うしてもおいしく食べられないんだもの」

雪助はこんなことを言つたが、姐さんのゐる方へ行つて、「お先に頂戴しますよ。御免なさい」と挨拶して餉臺に向つた。玉子も箸を取る前に其方へ行つて挨拶をした。

飯だけは炊き立てだが、味噌汁も何もなかつた。玉子は朝毎の暖かい家の味噌汁のことなどを考へながら、漬物だけで飯を済ませなければならなかつた。「明日は私も納豆を買つて置いて貰はうかしら」など、思ひながら、玉子は飯の後の湯を飲んだ。

旦那の歸つて行つたのは、もうかれは十一時に近かつた。小雪さんが十時前に歸つて来て、「雪子姐さん、検番にゐてよ。」など、言つてゐるが、その雪子もやがて歸つて来た。四邊が急に賑やかになつて来た。近處の芝居に出てゐる役者の噂などが雪子の口から出たりなどした。「また春の屋のお上さんから見物を頼まれちやつた！」なども言つた。旦那が歸ると、雪子と小雪とは、行火をして、「少し寝かしてね。寝いのよ」と言つて、小搔卷を押し入から出した。姐さんは用事があると言つて出かけて行つた。

玉子は手持無沙汰にしてゐた。「何うなつて行くんだらう」考へると心細くもなつて来た。昨夜「早く好いのをおつけよ。さうしなくつちやお座敷が出来やしないよ」と言つた待合のお上の言葉なども思ひ出された。



昔深川で藝者をしたといふ年寄の師匠は、雪子姐さんに一中節などを教へて行つた。一人の方の中年の五目の師匠は、抱妓達を相手にして、清元だの長唄だのを弾いたり泣いたりした。抱妓が三味線を取る時には、ヤアとか何とか聲をかけて膝を拍いて拍子を取つた。さういふ人達は多くは町の裏の露次の中に住んでゐて、午後から藝者屋を一軒毎に廻つて行つてその日を暮らした。髪結さんにはお鶴さんといふ肥つた脂切つた三十位の人が来た。亭主運のない星で、今までに三人持つて、二番目には子供まであつたが、皆な道樂で、折角貯めた金を使つては出て行つた。『もう男には懲々』元結をキリ、と齒で咬へて緊めながら、そんなことを言つて最後に出て行つた亭主の話などをした。『お鶴さんの根は固くつて氣持が悪い。』など、雪子は言つた。『島田はお留さんが上手だから、あそこに行つて結つて見て御覽よ、雪江さん』雪助はかう言つてある日一緒にその髪結の家に玉子を伴れて行つてやつた。そこには近所から藝者が大勢來てゐた。格子窓の處に鏡臺を並べて、何かべちやく、饒舌りながらすき手に髪をすいて貰つてゐるものもあれば、出來上つた髪を一生懸命に更に髪櫛で梳いてゐるものなどもあつた。玉子の行つてゐる時には、丁度其處にその土地で名高い綺麗な若い妓が來てゐた。新聞などによく出されてゐる顔は一目見たゞけですぐそれと解つた。指環なども澤

山にはめてゐた。『春ちゃん、今日は何處？築地？』などと、髪結さんに訊かれて、『え』などと、髪結ある片頬を笑ませてゐた。玉子は其處にゐる間、片時もその藝者から眼を離さなかつた。羨望と憧憬とに玉子の心は燃えた。約束ばかりのお座敷をしてゐるといふ話や、土地よりも新橋とか柳橋とか他所の一流待合やお茶屋へ出て行く方が多いといふ話や、其他いろいろ好ましい羨ましい話を澤山に澤山に聞いてゐるので、一層羨ましいやうな悲しいやうな妬ましいやうな心持がした。自分の身装の汚いのも振返られて、何となく肩身が狭いやうな氣もした。家は違ふがこれも矢張り綺麗なお酌が、その藝者と何かいろくな話をしてゐるのも羨ましかつた。それは昨夜のお座敷の話が何かで、『あのお客さん知らん顔をしてゐるんですもの、私、吹出しさうになつちやつたわ。……それなのに、姐さんてば、澄してゐるんですもの』など、言つて笑つた。その藝者も思出して笑つてゐた。

それにさういふお座敷は皆な其土地で一流のお茶屋なり待合なりであつた。蜂龍、稻垣、春の屋、住吉、春光亭など、いふ家であつた。蜂龍などから口のかゝつて來るのは、玉子のゐる内では、殆どないと言つても好い位稀であつた。雪子姐さんでさへ、さういふ處からかゝつて來ると、『不思議ねえ、誰がゝけてよこしたんだらう。』など、言つて出かけた。

『あゝいふところは面倒臭いわねえ。居心があんまり好くないわ』など、言ふのを玉子はよく聞いた。お座敷で難がしいものを立派に踊つて見せたり三味線を姐さん達より上手に弾いて見せたりする同じ年位の若い妓を見ると、玉子はじつとして其處に坐つてゐられないやうな氣耻しさを覺えた。何故遊んでゐないで、も



う少し稽古をしなかつたらう？ 無理に母さんに頼んでも稽古にやつて貰へば好かつた。玉子はかう思つて徒らに過ぎて行つた年月を悔んだ。田舎の姐さんの三味線の調子の高いのを上手だと思つた愚かさなども段解つて来た。お座敷では、玉子は小さくなつて姐さん達の騒ぐのを唯見てゐた。

髪結から雪助と一緒に歸りながら、「あの人も、よく新聞に出るのは？ 綺麗ねえ」かう玉子が言ふと、「でも評判ほどでは無いでせう。矢張、看板がよくなくつちや駄目よ」などと雪助は言つた。

容色の好い小雪の方は、いつもお茶を挽いたことはない位に賣れたが、雪助は二晩位動かすにゐることが度々あつた。ならし一つといふ譯には何うしても行かなかつた。で、潮先になると、氣にして、檢番までわざわざ札を見に出かけて行つて、「皆な出てるのよ、葛屋のあの子さへ出てるのに、何うして私にはかゝつて来ないでせう」などとこぼした。賣れない日の續いた抱妓ほどみじめなものではなかつた。厭な眼色で姐さんに睨まれたり、不斷なら言はれなくつてもすむあらを取立て、言はれたりした。當て、言ふわけであるまいが、「小雪ちゃんをよく賣れるね」などと、言はれると、切火の音をさせて元氣よく出て行く人が憎かつた。雪助は「何うして私、こんなに肥るんでせう。イヤになつちまうわ」などと、言ひながらいつも鏡を出しては見てゐた。あんな家と言はれるやうな小待合から時間すぎにかゝつて来ても、雪助は喜んで出かけて行くやうな妓であつた。

玉子はしかしこの雪助と一番先に仲好になつた。毒のない隔てを置かない心持が、世間をまだ多く知らない無邪氣な玉子の心とびたりと合つた。小まちやくれて、イヤにお世辭を言つて、姐さんに取入ららとする

51

小雪に對する反抗の念もこの二つの心を結び附けるに十分であつた。雪助のまだ小さい時分に父親の方は何處に行つたか分らなくなつてゐたが、母親は川に近いある土地のお茶屋の女中頭をしてゐた。それに祖母さんがこの近所ゐる。雪助が若いに似合はず三味線に長けてゐるのは、元下谷で藝者をしてゐたその祖母さんに小さい時分から育てられたからで、その祖母さんは、今でも露路の中で六疊の間借をして、安い月謝で若い妓に三味線を教へてゐた。元はよく出て藝者屋を廻つて歩いたのだが、此頃では、年を取つて、腰が曲つて、家の中を歩くのも大儀のやうになつてゐた。雪助はよく其處に小使を貰ひに行つた。玉子が一緒に作れられて行つた時には、「この間やつたのをもう使つた？ 困るねえ」などと、言ひながら、腰を曲けて立つて、古箏筒の小抽斗の鍵をぢやら／＼させながら、そこから銀貨を二つほど出して呉れた。雪助はそれで見つ豆だのお汁粉だのを買つて食つた。ある日姐さんからちよつと言はれたことを玉子が話すと、「それは仕方がないわよ。何んな人？ 見たことがあつて？」などと、雪助は訊いた。玉子はある待合の奥の一間で他の藝者達と一緒に見たある客のことを思ひ出してゐた。何でも少佐とか中佐とか言ふ軍人で、脊の大きい、鬚の濃い、軍帽をかぶつた跡のはつきりと額のところに見えてゐるやうな人であつた。年は四十四五位であつたが、玉子の眼には、もう餘程お爺さんの様に見えた。戯談を言つてゐるのかしらと始めは思つてゐた。其處のお上か何とか彼とか言ふのも本當に聞いて好いのかわるいのかちよつと判斷のつかないやうに玉子は思はれた。それが段々本當らしくなつて来た時には、玉子の體はわく／＼震へた。何うしやうかと思つた。泣きたいやうな氣もした。「だつて稼業だからね、お前さん。それがイヤぢや藝者なんかしてゐられやしないよ。藝者ッ



て言ふものはね、好い旦那がつかないや仕方がないもんだから……。雪助のやうになつても困るぢやないか。お前さんの腕一つで、あのお客が何んなにお金を積んで呉れるやうになるか知れないんだから」こんなことをも姐さんは小聲で含めるやうに言つたりした。それは丁度戦争が始まつて、號外賣の聲が喧しく町から町へと響き渡つて聞えるやうな時であつた。ある晩、其處から口がかゝつて来て怖々ながら出かけて行くと、奥の座敷にその客が赤い顔をして二三人の藝者と一緒に坐つてゐた。

一度は承知したやうな顔を見せて、こつそり裏から抜けて歸つて來たりなどしたけれど、何うしても姐さんや其家の女將の勧めに従はなければならぬといふことが段々玉子にも飲込めて來た。玉子は涙を溜めて壁の方に行つて立つてゐたりした。さういふ時には、何より先に家の方のことが眼の前に見えて來て、二度と父母に田舎から歸つて行つた時のやうな思ひをさせるのに忍びないやうな心持がした。鬚の濃い怖い顔と、父母の顔と、姐さんの顔とが一つになつて玉子の頭の中を廻轉した。

姐さんはなだめたり賺したりおどしたりした。こんなに酷いことを言ふ姐さんだつたのかしらと思ふやうな時には、玉子は體を震はして下唇を咬んだ。だつて、雪江さん、それは無理だわ。藝者になつちや仕方がないよ」雪助は同情して顔を寄せるやうにして小聲で言つて呉れた。「この子は、また泣いてゐるのかねえ、變な子ね」かう雪子に言はれるのも辛かつた。

芝居、役者、指環、帯、さういふものもすぐ眼の前に並べられるやうに言はれた。玉子は幾度か思ひ返してはすぐまたあとに戻つて行つた。「仕方がないわ、藝者より他に何にも私はなれないんだから」かう思つた

時には、あちこちの柱庵に口を頼んで歩き廻つた時のことなどが思ひ出されて、涙が瀧津瀬のやうに溢れて來た。「仕方がないわ、仕方がないわ」玉子はかう繰返した。

その夜のことは、後になつてまでも、はつきりと玉子の胸に刻まれてゐるやうなものであつた。それは初めて逢つた時から五六日位経つてからのことで、「氣にさへ入れば、末長く面倒を見て呉れるツて言ふんだから……。若い好い男が持ちたけりや、一度先づさうして置いて他にいくらも何うにでもなるんだから——」かう言はれて、玉子は漸く心をきめて、姐さんのいふなりになることにした。その時その奥の間には、その客が唯一人でほつねんとしてゐた。初て逢つた時のやうに他の藝者が大勢來てゐなかつた。それがいくらか玉子の心を落附かせた。玉子は顔を赧くして餉臺のところの小さくなつて坐つてゐた。

玉子は何方かと言へば、早く體の發達したやうな子であつた。母親が吃驚するやうなことを十二三の頃から言つてゐた。「この子は本當に始末にいけないね。滅多なことなんか言へないよ。田舎に行く前には、母親はよくこんなことを言つて笑つたものだ。田舎に行つてからも、さういふことは、解らずなりに澤山見たり聞いたりして來た。多いお客の中には、面白がつてわざといろんなものを持つて來て見せたものなどもあつた。それが不思議にも、女になると同時に、さういふことを玉子はばつたり口にしなくなつた。そんなことを考へるのが何だか悲しいやうでもあり情ないやうでもあり腹立しいやうでもあつた。その癖、「私のやうなものでも誰かお嫁にして呉れる人はあるのかしらん」など、思つて、獨りで小さな胸を痛めることなどもあつた。さういふ風にして玉子は今日までやつて來た。



その夜、玉子は姐さんの旦那のことだの、家にゐる抱妓のことだのをすがる唯一の力のやうにして絶えず頭に浮べてゐた。さういふ人達の通つて行く路は、矢張玉子も通つて行かなければならないのであつた。玉子は生活の波の其身の上に蔽ひ冠つて来るやうなを感じた。丁度、其時、號外賣の聲がまたすさまじく町を通つて行つた。

玉子は長襦袢姿で廊下へ出て、

「姐さんすみませんが、後生ですから、號外を一枚買つて頂戴な」

かう其處を通つて行く女中に聲をかけた。

その軍人は何處か濠端に近い大きな役所に勤めてゐる人で、「おい、貴様、何うした？」といふやうな荒つほい口の利き方をした。號外は何んな號外でも屹度買はせて熱心に讀んだ。「いよく、我輩の世の中になつて来たぞ」など、得意さうに言つた。「貴方もお出かけになるでせうね？」と女將が聞くと、「何に、己は内なる方だから、急には出かけるやうなことはないがな、しかし長い中には、これでも一度や二度は行くだらうよ」かう言つて聲高く笑つた。鬚が濃く、色が黒く、顔が歪んで、何處に一つ好い處があるではないのに、女將は「好いお客様だらう、あれで豪い方なんだよ。そら、何うかすると、金の紐見たいなものを胸のところに澤山つけた軍人がゐるだらう。あゝいふ人なんだよ。戦争のことを種々先に立つて考へる人なんだよ。大事にしなくつてはいけませんよ」など、言つた。

そればかりなら好いのに、其處の女將は玉子を前に置いて、「好い妓だつたでせう。おとなしくつて、やさ

しくつて、素直で——」など、遠慮なしに客に言ふので、終には其處に居た、まれずに、顔を眞赤にして玉子は向ふの方へと出て行つた。廊下の處に立つてゐた時には「雪江さん？何にしてるの？」など、肥つた女中は聲をかけて行つた。ある女中からはじろくくと顔を見られた。

強い烈しい體がわく／＼震へるやうな感じを玉子は経験した。濃い痛い鬚が體中に蘇へつて、熱でもあるやうにくわつと熱くなつて來たりした。家に歸ると、姐さんは始めは變な眼色をして、人の體をさがすやうにして見てゐるが、やがてそれと解ると、急に莞爾し出して、「其處にお菓子の貰つたのがあるからお上り」など、言つた。

家の人達はしかし何も言はなかつた。變な眼色をするものさへもなかつた。當り前のことだといふやうな顔をしてゐた。それが玉子の心を落附かせた。あくる日髪結から歸つて來ると、其處にいつも出入の吳服屋が來てゐて、種々な反物を並べさせて姐さんは見てゐるが、「雪江さん、何れが好い？」と言つて、錦仙の不斷羽織の柄の好いのを二三反其處に出した。「さうね、この中では、私、これが一番好き」かう言つて中で一番柄の粗いのを玉子を選ぶと、「罪がないね。こつちの方が高いのだよ、ぐつと好いのよ」其處につけてある小さな札を引くり返して見せて、「何うせお前さんに上げるんだから何方でもすきな方が好いけれど、こつちにおしよ、この高い方に……。これだつて地味ぢやないよ。立つて御覽」かう言つて袖のところに當て、見て「さうね、似合ふわね」



玉子はその反物を手に取つて見た。それは牡丹色が、つた矢絰であつた。その他に、「これはお小遣ひにおしよ」と言つて姐さんは五圓札を一枚呉れた。

其處の待合の女將は、それから打解けた調子で、種々なことを言つて玉子に教へた。

「お前さん、小さくなつてゐては駄目ですよ。思ひきり甘へておやりよ。この間、あのお客の歸る時、お前さん、お近中にとか何とか言つて、言はない？イヤな人ね。さう言はなくつては駄目だよ。よく氣をつけるやうにすると、好いことが澤山にあるんだから。お客の氣に入るも入らないも、皆なお前さんの腕だから」こんなことを言つて、何かそのお客の言つたらしいことを笑ひながら玉子にほめかしたりなどした。其處でも玉子は顔を赤らめなければならなかつた。

その客に玉子の聘ばれたのは僅に五度ぐらゐであつた。段々其客の方から遠退いて行つた。「何うも面白くも可笑しくもない妓だ。本當に手入らずだつたよ。まさかと思つたが本當だつたよ。あれでも困るなア」など、その客が言つてゐたといふことだつた。姐さんや女將さんの言つたことは逸早く雪のやうに解けて流れて行つて了つたのであつた。それを聞いた時には、流石に玉子も赫とした。一時の玩具にされたといふことが口惜しかつた。取つてかへしのつかない眼に逢つたといふやうな心持もした。かうして無邪氣では居られないといふ覺醒が強い力で起つて來た。

その同じ待合で、その客が他の若い妓と戯れてキヤツク、騒いでゐるのを見たのは、それから少し經つてからのことであつた。其時には、玉子には他の待合でもう新しい客が出來てゐたけれども、それでも玉子は口惜しいやうな氣がした。廊下でばつたり出逢つて「何うしたえ？此頃は」かう聲をかけられた時には、わざと知らん顔をして挨拶もせず二階に登つて行つた。「何うせ賣物ですから」と言つてやりたかつた。帳場に來ては「お上さん、あのお客に今そこで逢つちやたのよ。誰？」なぞとわざと平氣な顔をして訊いた。

不思議にも新しい世界が玉子の眼の前に展げて來た。それは今まで眼の前に見えて居りながら遂にわからなかつたやうなものであつた。今まではおほろけに一膜つゝんだやうな世界であつた。それがすっかり鮮かに見え出して來た。

壁のかけに行つて泣いてなんか居られない。のんきなことを言つて笑つてなんかは猶更居られない。あの時姐さんやお上さんに笑はれたり怒られたりしたのは無理はない。かういふ風に玉子は考へ出して來た。姐さんと旦那との關係、その旦那のある姐さんが、藝者でゐる時分からの仲で或役者に大騒ぎをしてゐるといふ噂も滿更虚言ではないといふやうなことも段々玉子に飲み込めて來た。うつかりしてはゐられないと玉子は思つた。

商人のやうな角帯を緊めた爺さんや、お役人らしい鹿爪らしい顔をした洋服姿の男や、戯談をすることのすきな頭の禿けた醫者や、さういふ人達に玉子はやがて彼方此方の座敷で逢ふやうになつた。

「この子は本當にまだおほこなんですから……、何にも知らないんですから、無理をしては駄目ですよ」何處の家の女將も玉子を前に置いて笑ひながらかう客に言つて聞かせた。



「昨夜のお客、何んな人？矢張、お爺ちやん？」

何うかすると、雪助はかう笑ひながら訊いたりした。「私なんかいくら遅く歸つて来てもおきまりの御祝儀ですもの、仕方がないわよ。雪江さんなんかとは違ふんだもの。それはさうと、姐さんこの頃矢張お小づかひ呉れて？呉れない？何とか言つてお貰ひなさいよ。姐さんとお上ばかり儲けてゐるのよ」など、言つて聞かせることがあつたかと思ふと、「昨夜おかしかつたわ。小雪の奴ね、散々雪子姐さんに油を取られてゐたわよ。何でも雪子姐さんのお客から、知らん顔をしてお小遣を貰つてゐたんですつて。それも春月でよ。それが知れて大變だつたわ。姐さんにも怒られてゐたわ。好い氣味だつてよ」など、雪助は玉子に言つた。

玉子はそれでもかなりに賣れた。「今に段々融通の利く妓になるよ。調子が好いからね。イヤな顔をしなから好いよ。でも、あの時は可哀相だつたよ。泣きさうな顔をしてゐたよ」其處の女將が笑ひながらかう姐さんに言ふやうになる時分には、玉子もかなりその土地の事情に詳しくなつてゐた。女將は勿論だが、女中達にも愛想を言つたり、機嫌の好い顔を見せたり、僅かなものでも好いから時には何か贈り物をしたりしなければならぬといふことなども分つて来た。時々手の裏をかへしたやうに變つて行く女中達の顔色やら細かい氣分、しも飲込めて来た。

藝者といふものがわかつて来た時分には、多い藝者の中に自分はどんな位置を占めてゐるかといふことも知れて来た。それからそれへと聞く種々な話、好い旦那に立派な引祝をして貰つた妓もあれば、借金に首が廻らなくなつて一度逃出してそしてすぐ捉つて伴れて來られた妓もある。男と身を嫁した妓もあれば、下廻

りの役者に夢中になつて、お客から金を引出す算段ばかりしてゐる妓などもある。玉子のゐる内のす、近所に、お腹が大きくなつて一時廢業して引込んでゐた中姐さんがゐるが、其處に來る旦那とある晩つかみ合ひの喧嘩をして、揚句の果は、ちらし髪で跣足のまゝ飛出して、濠に身を投げたりした。その時は大騒ぎだつた。玉子は怖いやうな氣がしながら、濠端から人に負はれて全身濡れて死んだやうになつて歸つて來たその姐さんを見た。「男の嫉妬つてそれは怖いものよ。」其時内の姐さんの言つた言葉は、後になつて、玉子の頭に刻まれたやうにはつきりと残つてゐた。

かと思ふと、雪助は、「だつて好いわ。さういふ嫉妬をされて見たいわよ」など、言つた。雪助は常に若いお客の話を玉子にして聞かせた。「お爺ちやんなんか振つておやりよ。お爺ちやんにかぎつてしつこいわねえ。駄目よ、お前さんなんか。もつと若いお客を持つやうにおなりよ。昨夜のお客はそれはすいたらしい好い男よ。學生よ。學生はさつぱりして、好いわ」かう言つてチウと口を鳴らして見せたりなどした。近所の二階に間借をしてゐる雪助の馴染の學生上がりの男の許に一緒に出かけ行つた時には、其處で皆なしてお鮎なんか取つて食べた。歸りには坂のところにある豊川稻荷にお参りをして、おみくじを二人して引いて見た。凶が出たと言ふので、雪助はイヤにふさいで、「お前さんの吉ね、憎らしいわ」など、言つて破つて棄たした。丁度その時戦争に出かけて行く兵隊が長い列をつくつて通つてゐて、何うしても向ふ側には行けないので、大勢の人達と一緒に長い間其處に立つて待つてゐた。大きな國旗が路を挟んで交叉してあつたりした。萬歳！など、頓狂な聲を立てる者もあつた。



玉子は其處此處で戦地に發つて行くやうな人達の宴會を見た。近頃にないやうな活氣がその土地にも漲つてゐて、日が暮れると、何處のお茶屋でも待合でも、賑かな三味線の音が湧くやうに聞えた。藝者が襦袢を取つて闇の中を縫つて歩いて行くのが椽のやうに其處にも此處にも見えた。「三百五十米、打てツと言ふ間に水烟」など、いふ唄が流行つて、軍歌が悲壯な調子で唄はれたりなどした。明後日發つて行くといふ若い好い男の中尉に、唯一度逢つた、けで別れを告げるのは玉子には辛かつた。「本當に凱旋していらつしやいよ。忘れちやいやですよ」かう言つて玉子は彈丸除のお守を男の手に渡した。

八

ある日の午後、お稽古から歸つて來て茶の間にゐると、小雪が、「雪江さん、お前さん、誰れか來てよ」  
「誰れ？ 私に？」  
かう言つて立上つて、上り端から格子の外を玉子は覗いて見た。其處には誰れもゐなかつた。

「誰？ 誰もゐないぢやないの？ 何うしたの？」  
「來ててよ、先きから、其處の前のとこをまご／＼して、よ。」

「何とか言つたの？」

小雪は藝者達のゐる室の高窓の障子を明けて見て、「先きから來てたのよ、其處を行つたり來たりしてゐるから、誰かと思つたのよ。小僧さん見たいな人よ。雪江ッていふ人は此處にゐますかッて訊いてたわ」

玉子は俄に胸の躍るのを覺えた。「さう？」「宗太郎か誰か來たんぢやないか」と思ひながら、いくらかきまりがわるいやうな困つたやうな氣がした。其處にあつた駒下駄を突かけて格子を明けて外に出て見た。しかし通りにはそれらしい姿も見えなかつた。

「何うしたんだらう？」と思つたが、ふと氣が附いて、其處の二三間先の細い小路の處に行つて覗いて見る



と、丁稚姿の宗太郎が果してきまりがわるさうにして其處に立つてゐた。姉の顔を見ると、なつかしさうにして此方へ寄つて來た。

「何うしたの？」

「何うもしやしねえ、姉さん、此處にゐるツて言ふから來て見たんだい。」

宗太郎は叔父の家に半年ほどゐたが、悪戯で、やんちやんで、叔父の子をいぢめて仕方がなかつた。負はされた子を柱に縛つて逃げて來たりした。それに、何うしても機械をやりたいと言ふので、つい此間、此處からそれほど遠くないある工場へ世話する人があつて年季を入れることになつたことは、此間ちよつと家に行つた時に聞いた。今度は辛抱して呉れ、ば好いがなど、母親は言つてゐた。

「お前、また何うかしたんぢやないの？」

「何うもしやしねえ。ちよつと、琴平さまの處まで使に來たから、姉さん何うしてゐるかと思つて逢ひに來たんだえ」

「さう？それなら好いけれど……」玉子は安心して「ちよつとお待ちよ。……少しは遊んで行つても怒られやしないのかえ？なら、お待ち」かう言つて家に入つて行つた玉子は、姐さんにちよつと話して、一二時間ひまを貰つて、やがて羽織を引かけて出て來た。

「お前、今日は御馳走して上げるから、何でも食へたいものをさうお言ひ」

「何にも食ひたいものなんかないや」

「今日はおとなしいね。本當にお言ひよ。今日は姉さんお小遣持つてゐるから」

こんなことを言ひながら、姉弟は通を何處へ行くともなく歩いて行つた。「俺は餘程、歸つて了はうかと思つたんだ。だつて姉さんのゐるところはあの家に違ひないと思つたけど、誰も出て來ないんだもの。それに、あそこをぶら／＼してゐると、人がイヤに見やがるんだもの。餘程、歸らうと思つちやつた——」こんなことを宗太郎は言つた。

「家には行かないかえ、此頃？」

「此間、行つた。」

「母さん、丈夫かえ」

「うむ」

「今度の内は何うだえ？好いかえ」

「うむ、今度は入店だから好いや——」

かうして餘念なく話して歩いて行く二人を路行く人達は振返つて見て行つた。ある大きな藝妓屋では、綺麗につくつた若い妓が袂を取つて出かけやうとしてゐた。山の櫻が綠葉の間からチラ／＼白く見えるやうな麗かなのどかな春の日であつた。

「本當に何が食へたい？」

「何にも食ひたくなんかないや」



「鰻？」

「鰻なんかイヤだア」

「天ぶら？」

「天ぶらも食ひたくないやい」

「ちや、何か食べたいものをさうお言ひよ。一時間位、私も遊んで行つて好いんだから」

宗太郎は莞爾してゐた。二人はいかにも嬉しさうにして歩いてゐた。馬車が来て通つて行つたりした。

「定ちやん、何うしてゐたらうね？」

「此間、近所まで使ひに来たつて、家に寄つて行つたつて母さん言つてた」

「さう？」玉子は嬉しさうに弟の顔を見て「でも、よく来て呉れたね。今度はおとなしく辛抱してつとめて呉れなくちや困るよ。……今に、皆な大きくなつて、母さんや父さんに樂をさせて上げなくつちやならないんだから、お前だつてもう大きくなつたんだし——」

「大丈夫だい？」

「今度は大丈夫かい。それに、機械の方は好いんだらう？今度の戦争で？」

「うん、その代り、忙しくなつて、皆な困つてらア」

「今に好くなつて、澤山姉さんにも樂をさせて呉れるねえ。定ちやんもおとなしいけど、あの子は弱いからね。姉さんは、宗ばかりを頼りにしてゐるんだよ。」弟の方を見て、「福ちやん、おとなしくしてたかえ。」

「うん」

「此頃は何うしてだか福ちやんの夢ばかり見るのよ。昨夜も見た。母さんと私と福ちやんと三人して歩いてゐる處なの、あの町の通りか何かよ。福ちやんが繪の本か何か買つて呉れつて、本屋の前で立つて歩かないで困つてゐるところよ。學校に毎日行つてゐるかえ？」

「此間も、己が行つてゐた時に歸つて來てゐた。手だの顔だのを眞黒にして歸つて來てた——」

「さうかえ、今度、その中、姉さんも一度行つて見やう」

なつかしさうにして玉子は言つたが、ふと、「それちやお蕎麥でも食べやうか」

「うむ、蕎麥なら食つても好いや」

「お前は蕎麥が好きね……。蕎麥屋なら、あそこに旨しいお蕎麥屋があるよ」

玉子はかう言つて、丁度突當つて曲らうとするところを左に細い横町を入つて行つた。ざるそばといふ招牌の出てる普通の町の通にある蕎麥屋とは違つた構へで、門から入るところに松が靡いて、踏石が敷いてあつた。取附の室には客がゐるので、二人は離れの方へ行つた。

かうして弟を御馳走するといふことは、玉子には非常に嬉しいやうに見えた。母さんもかういふ處に一度伴れて來て御馳走してやつたら何んなに喜ぶだらうなど、思ふと、玉子は何だか自由に出來ない身が悲しいやうになつて來た。羽織も着ずに、汚れた襦袢を着て、髪の毛をのばしてゐる弟も慘めに可哀相に見えた。

「何を食べるの？」



「何んでも好い」

「此處は天ぶらが旨しいよ。蝦の鬼がらもあとで食べるね。」

「うむ」

其處に、背の低い、十二三の、これも不仕合な境遇から奉公に来てゐる色の白い女の子がお誂へを聞きに來た。「天ぶら二つ」といふ金きり聲がやがて高く聞えた。

「お前、たんとお食べよ」

天ぶらに鬼がらを食つた後で、玉子はかう弟に言つた。弟は他に鴨なんばんを一つ食つた。取附の室にゐた二人連れは客はやがて勘定をすまして歸つて行つたが、出て行く時此方を覗くやうにして見て行つた。それは静かで麗でさぞ花見に人が出てゐるだらうと思はれるやうな日であつた。「ひまがあると、淺草あたりまで行つて見たいんだけど……お前だつて、そんなに遊んではゐられないね」玉子はこんなことを言つて溜息をついて、

「お前もう澤山？」

で、玉子は此間姐さんから貰つたお小遣ひで買つた新しい小さな紙入を帯の間から出したが「お前、お小遣ひにおし」かう言つて其處から一圓札を宗太郎に遣つた。

「お錢なんか入らない」

「いゝから。藏つてお置きよ。何か好きなものを買つてお上がりよ」

玉子は無理に弟にそれを藏はせて、ちよつと言つて電話を借りに行つた。

「もしく、貴方吉村、お氣の毒ですが、宅の雪助さんと呼んで頂戴な」かう言つて暫く立つてゐるた雪助さん、私何處からもかゝつて來なかつたでせうね。……さう……私、ちよいとね、弟の處迄行つて來たいんですがね。一時間位すると歸つて來ますがね。ちよいと姐さんに訊いて見て頂戴な」また暫く立つてゐて、「さう行つても好いッて？え、成だけ早く歸つて來てよ。ぢや左様なら」かう言つて戻つて來て、「お前の處まで姉さん送つて行つて上げるよ」

ある通りの小間物屋の店では、玉子は弟を待たせて置いて、弟の着る薄いメリヤスのシャツを買つてやつたりなどした。濠端から乗つた電車がある四辻で乗替へて、公園の傍のやうなところを通つて、弟の奉公してゐる工場のある處へ來たのは、もうかれこれ五時に近い頃であつた。其處は電車のレールの兩方から交叉して來てゐるやうなところで、其處等に澤山ある工場の煙突からは、煤煙が黒く黄く白く地を這ふやうに靡いて、機械の雑音と汽笛と電車の唸りとが一つになつて暴風のやうに四邊に轟き渡つて聞えた。戦争が始まらない以前と比べて、玉子は其處に驚くべき凄じい活躍と煤煙とを見た。

電車を下りると、宗太郎はちよくと急いで歩いて行つた。呼吸の塞るやうな煤煙の中に、小さな事務所見たやうなものがあつて、その向ふの工場からは汚ない労働服を着た職工がぞろぞろと出て來た。それは多くは髪を髭のやうにして體中を油で黒光にさせて居るやうな人達であつた。さういふ人達の中に入つて行かなければならない幼い弟を玉子は可哀相に思はずにはゐられなかつた。



「姉さん、左様なら」

かう言つて、弟は工場の傍の小さな入口からさつさと入つて行つて了つた。玉子は悲しいやうな痛ましいやうな気がして、その弟の入つて行つた入口を暫しの間見てゐたが、出たり入つたりする汚い職工達にじろじろ見られるので、玉子はやがて思ひ切つて其處から出て来た。「私なんか、私なんかもツと苦勞したツて仕方がない——」かう思ふと涙が胸にこみ上げて來さうになつた。

電車を待つてゐる間、父母の方に行く電車は何臺となく通つて行つた。染々母親に逢ひたいとは思つたが、さう自由にはならない自分の體を思ひかへして、やがて玉子は此方の方の電車に乗つた。家に着いた時には急いで歸つて來ても、もう灯が點いてゐた。「雪江さん、さつきからお座敷がかゝてゐるのよ」顔を見ると雪助はいきなりかう玉子に言つた。それは玉子の嫌ひなしつこい年寄の商人のお客であつた。かけて來た待合ですぐ知れた。玉子は急いで着物を着改へなければならなかつた。

九

姐さん達の顔も彼方此方の座敷で段々多く知るやうになつた。かけて呉れるお茶屋や待合の数も殖えて行つた。大きな宴會の席で、名のあるお酌や若い妓が得意で踊をおどつたり三味線を弾いたりするのを黙つて隅の方に小さくなつて坐つてゐる辛さも次第に覺えて來た。誰も彼も皆な綺麗な扮装をしてゐた。指環なども澤山にはめてゐた。

ある名高いお茶屋に行つた時には、土地で聞えた大きな藝者屋の抱妓が大勢來てゐて、自分などは取附く端もないやうに扱はれた。客にも立派な人達が多かつた。何處かの華族の若様だといふ色の白い品のある若い人は、一本になつたばかりの綺麗な妓と廊下に立つて睦まじさうに何か話してゐた。玉子は自分達の逢ふ人達とさういふ人達とを比べて考へずには居られなかつた。つい此間、色のわるく白い解らない言葉をお客の座敷に夜遅く雪助と一緒に行つた時の慘めさを玉子は思ひ出した。世の中には仕合せな人が澤山にあつた。自分などは何うなつて行くのだらう、何ういふ風にしたら自分などもさういふ仕合せの上になることが出来るのだらう。かう考へると玉子はいつも心細くなつた。行く道は幾條もあるけれど、始め出かけた路は、矢張其路で長く直直に續いて行かなければならぬやうなものであつた。



「何でも一生懸命に掛がなくなつては駄目よ。私なんか色戀どころではないわ。一座敷でも餘計にして、着物でも殖やすやうにするより他に仕方がないわよ」かう隣のわけの妓の言つた言葉などを玉子は思ひ出したりした。それに引かへて、仕合せが天から降つて来たやうな妓などもあつた。ある待合の女將は「何が何だかわからなくなるよ。あの妓、あの西洋人に出るのは厭だ厭だッて仕方がなかつたのよ。それが何うでせう。今ぢや大したもんよ。麻布のあそこに行つて御覽よ。それは大きな立派な西洋づくりよ。それで、ダイヤでも何んでも、欲しいもの次第だからね。それに、本國にも奥さんが無いんだつて……。あの妓の家なんか、それは見てゐる中に、丸で變つて、あの汚いお袋が絹物か何かでブラ／＼してゐるんだからね」などと、話したかと思ふと、ある中年の妓は、段々男を手繰り寄せて、他のお座敷には出ないといふ約束で、別物を月澤山に貰つて、愈々お目出度引かされるといふ段取になつたが、ふとしたことから彼方此方にお客を澤山に持つてゐるといふことが先方にわかつて、貴様のやうな奴にはもう二度と逢はない、逢ひたくないといふ電話が掛つて来て、すつかり運を取り逃がして了つた。「本當の奥さんにするつもりだつたんですよ。船の方か何かに出てゐる人で、立派な旦那でしたよ。あの旦那なら、それは仕合せだつたのに……。運といふものはわからないものよ。今ぢや、あの妓、あんな男と一緒になつて、懽めなもんぢやないか」かうある姐さんが話した。もう一人の方の姐さんは「けども、かういふ稼業をしてるちや運なんか當にしてはゐられやしないよ。ちつとは面白い真似でもしなけりやアとてもやりきれないものね。私なんか、そこに行くつと、悟つたもんだよ。何うせなるやうにしきやならないよ。面白いとをするだけ得だよ」などと、言つた。内の姐さんは

また姐さんで、「でも、一度は運が向いて来るもんだよ。雪江さんなんかだつて、二十五迄の中には、屹度好い運が向いて来るよ。だから其時は旨く捕へて逃がさないやうにするんだね。それに豊川様は不思議ね。豊川様を信心すると屹度運が開けて来るよ。私なんか彼處へお参りに行つた明る月から、今の旦那にお目にかかる様になつたんだから……。だけど、若いお客は駄目ね。何うしても、年を取つたお客でなけりや！」

それが玉子にはよく解らなかつた。年を取つたお客でなければ、何故駄目なんだらうなどと、思つた。雪助に話すと、「姐さん、あんなことを言ふのよ。お爺ちやんなんか厭なこつた。矢張若い人が好いわよ」かう雪助は笑ひながら言つた。大學生だと言ふすいたらしいお客があつて、それが二三次来てあとはばつたり來なくなつた時には、玉子は何だかつまらないやうな氣がして二三日ふさいで暮した。「あの方何うして？」などと其處の待合の女將に訊いても、それは何うにもならないやうなものであつた。帳場に行つて、女中に座敷を聞いて、襖を明けて入つて行く時の最初の好奇心と言つたやうなものも段々薄くなつて行つた。客は笑つたり騒いだり戯談を言つたり大きな聲を振上げて節も何もない唄を平氣で唄つたりした。一騒ぎ騒いだ後のお座敷に玉子はよく聘ばれて行つた。

意地のわるい姐さん達は「何處の妓？あゝさう？あその妓かえ」などと、言つて尻目にかけた。折角出かけて行つて、一時間とゐないで歸つて来るやうなことも度々あつた。さういふ時には、自分と同じやうな妓が二人も三人も行つてゐて、「あなたもう明いたの？私もよ……」こんなことを言つて、さつさと歸り支度をした。「あの姐さんも随分ね。あんな立派な姐さんでさへあゝなんだから……。私なんか仕方がないわよ」な



ど、笑つた。

玉子は自分のお客の座敷の時には、よく頼んで雪助だの隣のお酌だのを聘んでやつた。雪助は三味線を上手に弾いた。お酌は可愛い子で、玉子の姿を見ると、「ちよいと、雪江さん」など、人なつこいやうな呼び方をした。両親には小さい時にわかれたやうな不仕合な子で、家にゐる時には姐さんに叱られてよく眼の縁を赤くしてゐたりなどした。「私の岡惚れの子なんだから、聘んで下さいね」かう言つて玉子はよくお客に頼んでやつた。

内の姐さんの旦那は、一週間目位には屹度やつて来ては泊つて行つた。其時には、旦那はお座敷にして呉れたり、お小遣を呉れたりした。「何うだえ？流行るかえ？さうかえ？それは好いねえ！大分馴れて面白くなつて来たらう」こんなことを言ふかと思ふと、「もう情人が出来ても好い時分だね」などと笑ひながら言つた。何うかすると、夜遅くやつて来て、姐さんがゐないで困つて了ふことなどもあつた。ある夜などは、何うしても姐さんの行方が知れなかつた。雪子姐さんが歸つて来て、心當りを訊いて見ても矢張わからなかつた。玉子は丁度其時お座敷がかゝつて来て、あとはよく知らなかつたけれど、終には旦那が怒つたり何かして大變だつたといふ話であつた。「でもね、姐さんの顔さへ見りやすく機嫌が治るんだから不思議ね。……旦那の方が惚れてゐるのね」後で雪助はこんなことを言つて笑つた。それに、旦那は隣のを借りてよく電話をかけてよこした。何うかすると、その電話を抱妓達が取次いだか、時には都合のわるいやうなことを言つて姐さんに怒られたり何かするので皆なそれを厭がつてゐた。玉子も二三遍へまな電話のかけ方をして姐さんに怒

られた。「好い旦那なのに……姐さん何うしたんだらう？」こんなことを思つた玉子には、姐さんの心持なにかまだ十分によく飲込めてはゐなかつた。玉子に取つては、面白いやうでもあり怖いやうでもあり悲しいやうでもありあさましいやうでもある世間であつた。戦争の號外はそれからそれへとつゞいて出た。戦争の話で持切つたやうな座敷もあれば、株か何かの話で夢中になつてゐるやうな席もあつた。其中で、ある男がある女を追ひ廻して出歯庖丁で殺した話などを玉子は聞いた。

玉突の兄さんは「雪江さん、雪江さん」と言つて可愛がつて呉れた。通りの角に、玉突場があつて、其處に大勢種々な人達がやつて来た。近所の息子連は、夕方には屹度其處に集まつて来て賑やかに騒いで行つた。新松葉の梅龍といふ玉好きの藝者が、二三人の客といつても騒いで玉を突いてゐるのが硝子戸の灯の中に透して見えてゐたりした。鰻屋の兄さん、小間物屋の敬ちゃん、漆器商の定さんなどといふ人達がゐる。町の奥の方にある新聞に出てゐる人は、雪子姐さんの許へよくたづねて来て、時には雑誌記者をしてゐる友達の爲めだと言つて、土地の藝者の寫眞を集めて借りて行つたりした。艶種なども面白がつて聞いて行つた。蝦蟇仙人に似てゐる顔をして、咽喉をつかへさせたやうな笑ひ方をするので、雪助は「今日また蝦蟇さんが来てねえ」など、言つてはよく笑つた。お客になつて玉子を聘んで呉れたのは、角の梅本といふ待合であつたが、それから逢ふ度に、雑誌だの本だのを持つて来て呉れた。「私本を讀むのが大好き、此間、「己が罪」ツていふ小説を讀んで泣いちやつたわ。面白いわねえ」など、玉子は言つた。玉子は内に配達されて来る艶種の多い新聞の小説を毎朝一番先に讀むのが例だつた。「面白いのよ、あの小説は」杯と言つた。後には、その記者は



自分の書いた本などを持って来て呉れた。それに、玉子の讀み耽つてゐる新聞の小説の作者の話をして呉れたのも矢張其人であつた。「さうですか、此の近所にいらつしやるんですか？ さう？ 柏家の園江さんの人？ 本當でせうか。園江さんなら私二三度逢つて知つてゐるわ。私もお目にかゝりたいわねえ。貴方知つてゐらつしやるなら、是非一度お目にかゝらせて頂戴よ」など、玉子は言つた。しかしその新聞記者は容易にその作者を伴れて来ては呉れなかつた。

戀女房であつた細君の死んでから急にお茶屋や待合に出入するやうになつた人は、豊川稻荷の方に行く町の通りの洋物店の息子であつた。一度逢つた時から藤屋の静子といふ妓にひどく打込んで、毎日のやうにお茶屋や待合に出かけて行つたが、様子が何うも尋常ではないと言ふので、後には静子が身を躰すやうにして逃げて廻つてゐた。そのお客をある待合で知らん顔をして玉子につけた。玉子は少くとも知らずに三四度は逢つた。死んだ細君の話を何ぞと言つては持出して、聞いてゐても可哀相なやうな氣のする人であつた。「雪江さん、貴女は私の細君になつて下さる？ なつて下さいね。お照がゐなくなつてから淋しくつて仕方がない」など、言ふ時には、少し變だとは思つたけれど、別にこれと言つて變つたやうな處もなかつた。静子の時も矢張さうだつたさうだが、それがやがて玉子を捉まえて死んだ細君と同じやうな取扱ひ方をして來た。「お照、お照」など、玉子と呼んだ。後には玉子も無氣味になつて此方から遠退くやうにした。と、それから少し経つてから、矢張その待合で静子と一座をしたことがあつた。其時静子は「まあ私、本當に何うしやうかと思つた。一日に何遍彼方此方からかけて來るかわからないんですもの、怖いより何より氣味がわるくつ

て……。おや、さう？ 雪江さんも……イヤだわねえ。」と言つて笑つた。「可哀相な可哀相なんだけれども……」

イヤだわ。』かう言つた時には、静子は身の毛のよだつやうな素振をして見せた。今だにその息子は待合から待合へと相手をあさつてゐるといふ話であつた。玉子は何とも言はれないやうな厭なく、氣がした。

彼方此方で戦争があつて、賑やかな萬歳の聲と、國旗と、三味線の音と、號外賣のふれ聲との中に、うかうかと月日は経つて行くのであつた。中形の浴衣を着て濠端の夜風に吹かれたり、戦地から來ためづらしい活動寫眞をお客と見に行つたりした夏も過ぎた。初めは珍らしかつたお座敷も、中頃にはつまらなくなり、後には厭にさへなつて來た。一生懸命に拵いでも、姐さんの機嫌の好い顔と、着物が二三枚指環が一つ二つ殖えた位のもので、他に身の軽くなるやうなこともなかつた。父母に樂をさせるどころか、その顔を見に行くさへ容易でなかつた。一月に精々一度歸つて行くにしても、抱妓の身は夕方には早く歸つて來なければならなかつた。

それに、細かい男の心は玉子にはまだよくわからなかつた。それは約束したことが約束にならないやうなものでもあれば、捉へたものがすぐ指から滑つて脱けて行つて了ふやうなものであつた。あの人がと思ふやうなお客がフィと離れて行つて了ふやうなことはこの社會にはめづらしくなかつた。「お前さん、それは下手だよ」かう姐さんによく言はれたが、それでは何ういふ風にすれば好いのか、それが玉子にはまだ細かく飲み込めなかつた。騙されて指環を取られた時には、姐さんから注意されて、雪助と一緒に慌て、そのお客の下宿してゐる家に行つて見たりなどした。「お客を見損ふから駄目なんだよ。矢張、まだ苦勞が足りないんだね」



かう言つて姐さんは笑つた。

好い運の向いて来た人の話を聞く度に「私なんかとても駄目だ」かう思つて玉子はよく氣を腐らせてゐた。お座敷のかゝつて来るのを初めは樂みにも力にもしてゐた玉子が、此頃では「また、あそこからかゝつて来たよ。イヤだねえ」など、思つた。一騒ぎ騒いで姐さん達の挨拶して歸つて行つた後のさびしさ辛さがひしと身に染みるやうな夜も幾度かあつた。二階の階梯の上の廊下のところに立つてゐる時には、思はず深い深い溜息が出た。前の山の樹立の上には、丸い明るい月が靜かに上つて、欄干の處に悄然立つた玉子の姿が黒くくつきりと見せてゐた。

秋から冬にかけて、玉子には度々逢つてゐる客が二三人あつた。ある家では田舎の旦那といふやうな四十年輩の人が来た。ある家ではJといふ金釘鈕をつけた學生が来た。商人見たいな人達につれられてよく遣つて来る三十位の背の高い色の淺黒い人は、ある山手の陸軍の病院につとめてゐた。淺田さん淺田さんと呼ばれてゐた。

玉子の心は矢張若いJに偏つてゐた。その家からかゝると、いつも嬉々として出かけて行つた。しかしその病院に勤めてゐる人の方も満更には思つてゐなかつた。男振は好くないが、何處かさつぱりとしてゐた。「あんな奴よりもつと好いのがいくらもある」など、商人達の言ふのを聞流して熱心に心を寄せて来るのも玉子には嬉しかつた。それはその病院で會計の方をしてゐるやうな人で、戦争になつてから仕事が忙しくつて困るなど、言つてゐた。一緒に来る商人達には、醫者の機械を賣る肆の番頭だの、種々な材料を病院に納

める商人などが多かつた。何でも家は田舎の方にあつて、汽車に乗れば四時間位で行けるほどの距離であつた。田地なども多く持つてゐるやうなことも話してきかせた。「病院などにつとめてゐるのはイヤなんだけれど……家に歸つてゐれば旦那様ですましてゐられるんだけど、矢張東京が好いからな」なども言つた。それに此前に玉子が逃げて来た田舎は、丁度その田舎に行く道の途中に當つてゐた。その話を玉子がした時には、「さうかえ、あんな處にゐたのかえ。」かう其人は不思議にした。

Jの方に行つてゐて、そのお客のゐる待合から度々電話がかゝつて来て、終に行かれずに時間になつて了ふことなども稀にはあつた。田舎の年寄が離しさうで中々離さないのに困つたことなどもあつた。さういふ時には、玉子は朝早くまだ寝てゐるそのお客の室に行つて、「昨夜は親類に行つてゐたもんだからすみませんでした……」とか何とか言つて申譯をした。さうかうしてゐる中に、不思議にも男は今まで見せなかつた心を開いて見せて来た。男の心の俄かに此方に偏つて来るのを玉子は感じた。

「一體、何ういふことになつてゐるんだえ？」

かうそのお客は聞くやうになつた。

ある夜は何うしてか玉子の心が今までにないやうにそのお客の方に寄つて行つてゐるのを見た。多い男の中にゐて、それでゐて、男の情に餓ゑてゐるやうな境遇では、Jの何方つかすの微温い心持は玉子にはまだ物足らなかつた。此方から絶えず寄つて行くのを外して置いて、すっかり自分のものにしてさふといふやうな處か何處かにあるのを發見した時には、玉子は廊下のところに立つて悲しい辛い思に下唇を噛んだ。色



男ぶつたやうな厭なところも段々それと見え出して来た。玉子は幾度もそれとこれとを引較へて考へて見るやうな女になつてゐた。浅田の友達で矢張その病院につとめてゐる醫者から、浅田の田舎の家のことなどをさぐるやうにして聞く時分には、玉子の心も餘程其方の方へ開いて行つてゐた。「あの男の家はあれでも好いんだよ。田舎では立派なもんだよ。女房子はあるけれど、何うせ田舎に置くんだからね。それに、氣前の好い男で物がよくわかつてゐて、友達としても頼み甲斐のあるやうな男だよ」などと、その醫者は話して聞かせた。その夜は浅田は遅く一人でやつて来た。玉子が受けてゐた座敷をすまして其處に出かけて行つた時には、浅田はいつもの奥の六疊に餉臺を前にしてほつねんとして坐つてゐた。淋しさうな顔色をしてゐた。それをいろ／＼なだめたり何かしてゐる中に、急に心がびつたりと合つたやうに二人は染々とした。これまでも飛び／＼に話して置いた身の上話を今更のやうに玉子は持出して、筋道を立て、男に話して聞かせたりした。父母のことも話せば、弟達の話もした。父親の口が今だに何處にもなくつて、自分が此處に出た時の金も長い居食ひにもう大抵はなくなつたなど、いふ話もした。玉子の眼には涙がこぼれさうになつてゐた。やがて二人は顔を合せたり手を組み合せたりした。「本當に父さんがもう少しづつかりしてゐて呉れると苦勞はないんですけども……何處かに出る口があつても、矢張り家の足しにはならないやうな人ですものね。ですから出来れば矢張私が何うかしなければならぬですの」

染々とした聲で玉子は言つた。自分の持つた容色や腕や柔かな氣分や、色彩の鮮かな長襦袢や、ほの暗い靜かな一間の空氣や、さういふものが、なりに大きな幻影となつて男の體の中に働いて行つてゐるのを玉子は

此時ほど明かに意識したことはなかつた。待合の女將や内の女さん達の常に言つてゐる言葉なども思ひ出されてゐた。「一體、何ういふ風になつてゐるんだい。」やがて男はかう言つて考へるやうな顔をした。

「私なんかそりや軽いわ」

玉子はかう云つて、いろ／＼話をして、親元身受にすれば譯はないといふことまで話した。玉子は一年ゐた惨めな境遇から更に前にひらけて来る新しい世界と境遇とを想像した。「母さんに逢つて頂戴ね……母さん何んなに喜ぶかしれないわ」玉子は體を男の方に寄せゐるやうにした。

玉子はその話の氷のやうに解けて行くのを心配した。何うかして此話だけは取り留めたい。自分も仕合せな妓の一人になりたい。大して自分の好きな男といふではないけれど、身請そのものを藝者の唯一の仕合せやうに信じてゐる玉子には、もしこれの出来ない場合には、一生の運を取逃して了ふやうにさへ感じられた。それに一年ゐた社會から離れて別な社會に入つても行きたかつた。父母に樂をさせることも今よりはいくらか多く出来るやうにも思はれた。しかし何よりも玉子の心を動搖させたのは、傍にゐて自分のことを何の彼のと其男に言つて聞かせる御用商人の群であつた。「あんな妓なんか」とか「浅田君も物好きだ」とか「何うせ金を使ふのなら、もう少し好いのを」とか言ふ言葉は、絶えず玉子の耳に入つてゐた。男の口裏からもさういふ語氣がよく汲み取られた。「見ていらつしやい。屹度、身請させて見せて上げるから」といふやうな意氣地も強く盛に起つて来た。

その話は出来さうに見えたり壞れさうに見えたりした。「何うも、考へて見たけれど、部屋住の身分だから



ね」など、言はれた夜には、玉子はつまらなさうな顔をして歸つて来た。かと思ふと、自分がすっかり其男の心と體とを堅く握つてゐるやうに見える夜などもあつた。二階の一間で焦々して待つてゐるを承知しながら、成べく男に逢ふ時間を遅くしやうといふやうな餘裕を心に持った時には、玉子は何となく得意な氣がした。男はまた男で、「何もそななことに氣にしないたつて好いちやないか。僕さへ好けりや、他人は何と言つたつて好いんだから……」。大丈夫だよ、僕も十分なこととは出来ないけれど、言つたことはするよ」など、言つて玉子をなだめた。玉子は「J」の話をわざと大きく男に話して聞かせたりなどした。

で、少くとも其話は二月か三月續いた。何方つかすの中に二月が来て、去年の弘めをした日もやがてやつて来た。玉子は自分ながら自分の心持の段々まかせて行つたのに氣が附かすには居られるかつた。玉子はおづおづしたやうな心で一軒毎に襦袢を取つて挨拶した時のことなどを思ひ出してゐた。戦争が彼方此方で勝つて町が國旗と萬歳の聲で埋められるやうな日も度々あつた。男は其時分濠洲の病院から郊外の分院の方へ勤めることになつてゐて、戦地から傷病兵が澤山に来て忙しくつて困るなど、よく玉子に話してきかせた。

それはある日曜日であつた。玉子は大きな丸鬘に結つて、車に乗つて、町の裏から野の方へと出て行く路を通つてゐた。晴れた午後の日影の暖かい野には、カーキ色の汚れた軍服を着た傷病兵が其處此處に點點として歩いてゐて、それが繪か何ぞのやうに此方からくつきりと見えた。幾棟となく連つたペンキ塗の洋館の向ふには、テントやバラックなども見えてゐた。

玉子は教へられたやうに、門の前で車を下りて、門番に男の名を言つて、小使につれられて、ある小さな

扉の中から汚い應接間のやうな處へ先づ入つて行つた。約束して置いた通り男は宿直で其處にゐた。顔を見せて、ちよいと、言つてすぐ出て行つたが、今度は玉子は傍の細い廊下から男の事務を取つてゐる一間の方へとつれられて行つた。書類や帳簿の一杯に載せられてある卓が二脚も三脚も置いてあるやうな室で、壁には男の軍帽と短剣とが、けてあるのを玉子は見た。男は莞爾しながらやがて椅子を持つて来て女に勧めた。「いつでも此處で仕事をしてゐるの?」こんなことを言つて、めづらしさうに玉子は四邊を眺はした。「此處に大勢ゐるの?」かう玉子が聞くと、「三人ゐるんだよ。今日は日曜だから皆な早く歸つて了つたけれど」かう言つた浅田はベルを鳴らして小使を呼んだ。年を取つた人の好さうな小使は、別に怪しみもせず、丁寧に挨拶をして、赤く濁つた茶を其處に置いて行つた。

「奥さんと思つてるのね」

玉子は得意さうに笑つて見せて、「よく似合ふでせう」

「うむ」など、言つて、浅田は根の高い形の好い玉子の丸鬘を見た。

「これからもう始終、鬘に結へるから嬉しいわ」こんなことを言つた玉子の胸には、昨夜の不意の嬉しい出来事が歴々と浮んで来てゐた。思ひもかけず出かけて行つた待合に、雪助と他の藝者とが二人ゐて、近所の芝居に出てゐる色の白いやさしい口の利き方をする役者が三人ほど来てゐた。その芝居には玉子も度々出かけて行つて、誰が好いのか好いのかかねてよく噂してゐた。中でも女形をする丈の高い役者は、殊に玉子の氣に入つてゐた。玉子は皆なに冷かされたり調戲はれたりして、體中が熱くほてつて來たりした。一座は



遅くまで賑やかに花を引いた。それは他の座敷では見ることの出来ないやうなやわらかな暖かい楽しい気分分、勝つたり負けたり笑つたりする間に、男の呼吸と女の呼吸とは、温かく氣味わるく一間の中に混り合つた。鮮かな着物の色彩が四邊にチラ／＼したりした。玉子は一時過になつてから雑魚寝をした時のさまなどを頭に浮べた。

『此間はいろ／＼難有う御座いました。』

『イヤ』

一時間ほど前に、矢張この室に淺田をたづねて来た一人の御用商人があつた。その商人の置いて行つた紙包は、そのまゝその大きな卓の抽斗に入れられてあつた。やがて淺田はその一部を其處から出して女に渡した。

『ちや、これだけやつて置くよ』

『何うも難有う』

かう玉子は禮を言つて受取つて、『家の方へは何時行つて下さるの？此間、母さんがお目にかゝつてから大變に喜んでゐるのよ。父さんも喜んでゐたわ……。本當に安心したつて言つてゐてよ。此間はまた難有う。妹まで何か戴いたつて』

『何アに』

『ちや、今月ね。何でも、あの向ふの處に好い家があつたつて父さん言つてゐてよ。二階があるのよ。八圓

位だつて言つてゐたわ』

『其内一緒に行つて見やう』

『何時行きませう？』

『さア』と言つて、淺田は少し途切れて、『二三日の中また彼處に行くよ』

『さうらう』

玉子は卓の前に行つて書類や帳簿をいぢつて見たりなどした。「もう何うせ、藝者をやめるんだから、一度位さういふ思ひをしたつて好いわ。今日歸つたら電話をかけてやらう」かう腹の中で思ひながら、「今日は何うしても出られないの？」

『今日は宿直だから』

『さうらう』

残念さうに言つて、『さびしさうね。こんな處に一人でちやさびしいわね。それで一體何處に泊るの？』四邊を眺めて『そこに寝るところがあるの？さう？』立上つて、『好いわよ、見せたつて、』かう言つて玉子は立つて向ふの方に行つた。室の隅の小さな扉を明けると、そこに五疊の間があつて、雑多したもの、中に寢道具などが積みかさねてあつた。

やがて其處から戻つて来た玉子は、『さびしさうね、私、来て上げませうか』かう言つて面白さうに笑つた。



+

二階からは富士が手に取るやうに見えた。廣くあたりが見渡されるといふやうなところで、松の生えてる寺の墓地の向ふには、混雑した工場の煙突の煙が見えたり、小さな橋の架つた汚い堀割が見えたりした。扇の形のやうに其處から二筋にわかれて行つてゐる汽車のルールもそれと明かに指さされた。  
「好い見晴らしだね」

こんなことを言つて、長い間欄干のところ立つてゐた母親は、  
「向ふに黒く、見えるのは、何だえあ？ れは？」

「あれは汽車ですよ。段々あれが此方へやつて来るんですよ」

其處に並んで立つてゐた玉子はかう言つて其方を見た。

「さうかえ、あれが汽車かえ」

「見て、御覽なさい……。そら、段々近くなつて来るから」かう玉子が言つてゐる中にも、その汽車は次第に此方へくと近くなつて來てゐた。一目に見渡された長い線路に、始めは點のやうに見えてゐたのが、段段玩弄箱位の大きさになつて、やがては、斜に靡く白い煙がはつきりと見え出して來た。

「汽車だね、矢張」

かう母親は言つて、「何處等になるだらうね？ 彼處は？」

「さうね、大井の少しこつちの方でせうね。……向ふが妙華園だから」

「妙華園が見えるのかえ？」

「それ、其處がさうですよ」かう言つて玉子は指した。そこには低い丘のやうなものが見えてゐた。

「あそこになるかえ」

「さうでせう、ほら……そこに踏切を越えて行くんだから」こんなことを二人して言つてゐる中に、汽車はもうそこにやつて來て、地響きをさせてその下を通つて行つた。

「この汽車の地響きさへないと申分はないところなんだけれども……。だけどそんなに十分なことを言へないわねえ。これでも結構よ。」

「結構ともね」

四五日前に、玉子は淺田と來て、愈この家を借ることになつた。親元身請の金の外に、玉子の父母にも淺田は妙からぬ金を渡した。新しい箆笥、新しい長火鉢、新しい寢道具、何處を見ても新しいものばかりであつた。二つあるものはと言つて、玉子の家から運んで來たものも少しはあつたが、大抵は新しく買入れたものが多かつた。表の荒物屋からは、手桶だの、洗桶だの、柄杓だのを小僧が運んで來た。それは建てたばかりでまだ誰も入つたものはないといふやうな家であつた。横町を入つて、それからまた



少し奥に入つて行かなければならぬ位置にあるその貸家は、長い間人の目に留まるやうなことはなかつた。出来てから三月近くもかし家札が斜に貼られたまゝになつてゐた。

奥に入つて行かうとする處にある二三軒の人達は、綺麗にお化粧をして、根の高い形の意氣な丸髷に結つた若い細君を不思議さうに見た。何ういふ人だらうなど、言つて噂した。軍服姿の主人を見た人は、「御祝儀をすませたばかりの若夫婦ですよ。何うもさうらしいですよ」など、言つた。すると上さんは、「けれどもね、おつくりの仕方が普通ぢやないと思ひますよ。それに、口の利き方なんかでも、今まで娘でゐた人ではありませんよ。この間、移轉した日にちよつと来て呉れましたけれど、それは落附いたもんですよ。それに、旦那様が年を取りすぎてゐますね」などと、評判した。

近所の桂庵から伴れて来た下女は、十六か七で、色の白い、ほつてりした子であつた。赤い帯揚などをした。名をりんと呼ばれてゐた。「りんや、りんや」かう玉子の訝えた調子で呼ぶ聲が其處から聞えた。

母親は妹を伴れて毎日のやうに其處にやつて来た。幼い妹は見晴しの好い二階をめぐらしたが、來るとすぐいつも階級を登つて行つた。その六疊には、大きな一貫張の机が置いてあつて、浅田が役所から待つて来た野の入つた洋紙などがその上に載せられてあつた。餘り長く下りて來ないのを氣にして、母親が行つて見ると、妹はその机に向つて、姉さんに買つて貰つた雑誌の繪などを熱心に見てゐた。

「福ちゃん、福ちゃん、下りてお出で。好い物を上げるから」  
下からかう玉子が呼んだ。

兎に角に娘がかういふ新しい家を持つたといふことは、母親に取つては此上ない喜悅であつた。浅田には女房子がある。部屋住の身の上でもある。それに、段々聞いて見ると、財産家と言つてもさう大した財産家でもないやうだ。今度のことにしても、御用商人あたりから金を餘程融通させたやうな處もある。戦争中で、人手が足りないので、割合に好い役を勤めてはゐるけれども、主計と云へば、軍人でもさう大した好い處ではない。それに、玉子が別に深く浅田を思ひ込んでゐるといふ譯でもないのを母親はよく知つてゐる。何うせ長くは續きはしまいといふやうに母親は見えてゐるが、それでも毎月の手當は貰ふし、かうして毎日のやうに娘の顔を見に來られるのが嬉しかつた。「母さん、また、明日來てお呉れ、正午前にね」などと、玉子が言ふと、「でも、餘り留守に來て親子で勝手なことをしてゐるやうに思はれるのもイヤだから」などと、母親は言つた。浅田は黙つて、むつゝりして、始終何か物を考へてゐるやうな人だつた。

「母さん、まア好いでせう。今少し遊んでお出でなさい」浅田はいくらか田舎訛のある言葉で母親に言つた。りんは下町生れで、髪などを綺麗にして置くことの好きなやうな子であつた。玉子は氣をつけて自分の持つてゐる流行の半襟を遣つたり、時々多分のお小遣をやつたりするので、りんは喜んでよく働いた。何うかすると、旦那の留守に、一人で三味線を出して、「梅の春」なんかを弾いたりなどして遊んだ。「お前、その位弾けるのを投つて置くのは惜しいよ。ひまの時には浚つて上げるから、もうすこし稽古をおしよ。りんは容色好だから、何んな運でも向いて來るよ」玉子は一塵世間を見て來たやうな口の利き方をした。

四時、遅くも五時には浅田は役所の方から歸つて來た。靴の音がして、格子戸がぐらりと明くと、玉子は



いつも其處に出て迎へた。其時は玉子はいつでも眼の立たないほどの薄化粧をして、丸髷の髪を綺麗にしてい、鬢を長く後に見せてゐた。着物なども注意して成るべく同のを着ないやうにしてゐた。三時過になると、いつもきまつて、「りんや、金盥にお湯を取つてお呉れな」かう言つて、玉子は鏡臺を明るい障子のところに持ち出して化粧を始めた。近所の錢湯に出かけて行つた時には、襟のところに眞白にして、ほんのりした色艶の好い顔をして歸つて來てゐた。ある日、束髪に結つたのが淺田の氣に入つて、「矢張、さういふ方が細君らしく見えるね」と言つたので、玉子はそれから束髪を續けて結つた。

「一度、この髪で寫眞を撮つて置きたいわねえ」こんなことを言つて、玉子は自分で鏡にうつして見たりした。額は廣いが、何方かと言へば小柄な顔のつくりは、庇の大きい束髪とよく映つた。

毎日午ごろには、近所の肴屋の若い衆がきまつて番臺をかついで「今日は——」とか何とか言つて、威勢よく入つて來た。しかし魚の種類はまだよく飲み込めない玉子には、何を買つて好いかちよつとわからなかつた。「仕方がないから、まだ刺身でも取つてお置きよ」かう玉子はりんに言つた。淺田はまた淺田で、「これ誰がつくつたんだい。りんかえ？ 鹹くつて食へないぢやないか」など、口を歪めるやうに言つた。それでも玉子は、何うかすると、物々しく赤い袴などをかけて、臺所へ出て働いてゐた。さういふ時には、きまつて甘たるい玉子焼などが夕飯の膳に上つた。

長火鉢のところで、メリンスの大きな座蒲團を敷いて、淺田はいつも晩酌の顔を赤くしてゐた。「何か聞かせないかえ」

かう言ふと玉子は長押から三味線を下して、面白い流行唄などを弾いた。長唄を弾いて見せる時には、「ア、よい」など、言つて男は聲をかけた。楽しさうに莞爾してゐる淺田の顔は、四邊に際立つて見えてゐた。仕事の多い時には、淺田は夕飯を食ふとすぐ、二階に上つて、机に向つて、せつせと野の入つた洋紙に數字を書き入れてゐた。「面倒なものね」傍から玉子がこんなことを言ふと、「厄介で仕方がない。明日までにやつて持つて行かなければならぬんだから」など、言つて頻りにペンを走らせた。一週間に一度づつ、宿直の日があつて、その時は玉子の家から大抵父親なり母親なりがとまりに來ることになつてゐた。

「また宿直が來た。此間泊つたばかりだと思ふのに——」など、言つて、その日はつまらなさうな顔をして淺田は出かけて行つた。一夜でも女を一人残して置くのが氣になるといふやうな風が此頃段々歴々と見えて來てゐた。引いてから、一週間ほど経つた時、Jから手紙が玉子の許に來たことがあつた。それを運わるく淺田に受取られた。手紙には、別に變なことも書いてなかつたけれど、引いてから玉子がJの許に電話をかけたといふことを、淺田は不愉快に思はずには居られなかつた。だつて、それは仕方がないわよ。矢張、稼業をしてゐれば、お客ですもの。別に、何にも言つたわけぢやないのよ。かうして引くことになりましたからッてお禮の電話をかけたばかりなんですもの。ちつとも可怪しいことなんかありやしないわ」其時玉子はかう言つて淺田の顔を見て、「向ふでも、何にも言ひはしませんよ。さうか、それはお目出度かつたつて言つて呉れたばかりだわ。ちつとも可怪しいことはありやしない。手紙の文句でもわかるぢやないの」



「いよ、いよ、わかつたよ」浅田はその時打消すやうに早口で言った。

宿直の翌日は、浅田はいつも何物をか探すやうな眼色をして家中を見廻した。母親が父親が泊つて呉れた時には、いくらか安心してゐる様な風であつたが、それでもいろいろと留守中の話などを根掘り葉掘り聞いた。やらないでも好い小遣ひをりんにやつたりなどした。

さういふ素振を男から見せられた時に限つて、玉子は病院から金を貰つて歸つて来た日のことを思ひ出した。電話をかけると、その女形の役者がすぐ其處に出て来て、やさしい聲で、「え、行きますよ」など、言つた。女の言ふなりに何處までもなつてゐるといふやうなやさしい男の氣分が玉子の胸に染々と印象されて残つてゐた。「素人になつちやまさかそんなことは出来ないから」かう思つて一緒に過した一夜のさまは、今でも明かに玉子の眼の前にあつた。

「私、これでも氣分は堅い方なんですから」玉子はそんなことを浅田に言つた。

御用商人の群はよく其處を訪ねて来た。それは「あんな妓を浅田君も物好きな」など、言つたやうな人達であつた。しかしその時はそんなことを夢にも言つたことがないといふやうな顔をして、玉子の氣に入りさうなお召の反物を土産に持つて来たりなどした。「奥さん、奥さん」かう言つては機嫌を取つた。麗らかな日に二階を明け放して、近所の料理屋から旨さうなものを二品三品取寄せて、酒を出したりする時には、玉子は下から三味線を持つて行つて弾いた。「本當に奥さんらしくなりましたね。庇髪がよく似合ひますよ。ねえ、浅田君」その中の一人はかう笑ひながら玉子の方を見て言つた。

さういふ人達は、大抵何か相談する用事を持つて来た。「さう無理ばかり言つても困りますな」かう浅田が厳しい顔をして言つてゐる時などもあつた。かと思ふと、向ふの方から高く出で、「でも浅田君、さうして頂かなければ、私達も商賣になりませんから……」。此間のこともありますし、……いや、その方は好いですがども」など、言つた。浅田が困つたやうな顔をしてゐるやうなことも度々あつた。

「僕は成だけさうして上げたいと思つてゐるけれど、さうばかりも行かないこともあるからね、そこはお互に察し合つて貰はなければ」浅田はこんなことを言つて強ひて笑つた顔を見せた。

「何うも弱つて了ふ。あゝいふ奴は、儲けることばかり考へてゐるんだから……」客の歸つた後で、浅田はかう玉子にこぼした。浅田とさういふ人達と何ういふ關係になつてゐるかと言ふことは、玉子にはまだ詳しくわからなかつたけれど、お互に金を儲ける算段をしてゐるといふことだけは前からよく飲み込めてゐた。その中の一人が、夜突然やつて来て、二階でちよつと話して、急いで歸つた後に、金が澤山置いてあるのを玉子が見たことなどもあつた。浅田は、「お喉、此處に置いてあつた書付を知らないか」などと訊いた。

「此頃は浅田君、ちつとも彼方へ出かけて行かないですツてね。餘り現金ですよ。あそこの女將がこぼしてゐましたよ。偶には好いでせう。奥さんだつてそんなことはよく知つてゐるんだから、ねえ、奥さん」などと玉子を前に置いて、酔つた其中の一人が言つたりした。三人で一緒に来た時には、「今夜は、ちよつと浅田君を借りて行きますよ。なアに遅くなりやしません。ちぎ返してよこしますからね」と言つて、もう好い加減に酔つた浅田を伴れて出かけて行つた。



『今日は誰？艶香さん？』歸つて来た淺田を捉えて、玉子は笑ひながらこんなことを言つて、『貴郎、私かまだあそこにいる時分から艶香さんを聘んでるたちやありませんか。あの人寫眞屋さんか何か？情夫ですよ。その他にも二人位あるわ。あの人、前によし町にゐるたんですけどもね。手くせか何かかわるくつて、其處にゐられなくなつて、此方に來たんですつて。評判のわるい妓よ』

『ちやんと知つてますよ。……』かうは言ふものゝ、玉子は嫉妬をやくほど淺田を思つてはゐなかつた。かう思へば、男は喜ぶ位に唯心得てゐるばかりであつた。

『相惚れか何かでかうして世離れて暮してゐるなら面白だらうけれど……』こんなことをある日ふと考へたことがあつたのを、玉子はまた思ひ出してゐた。色の白い男だのJだのがそれからそれへと考へられた。玉子の前には、矢張りまだ知らない世間の面白いことが澤山に澤山にあつた。

ちよつと家へまでと言つて出かけて行つた玉子は、午時分になつても歸つて來なかつた。『お午飯は家ですまして入らつしやるだらう』かう思つて、りんは漬物などを出して、獨りでさびしく午飯をすました。其處へ此間玉子が頼んで置いた三毛猫の子を近所のしもたやの上さんが届けて來て呉れた。『さう？奥さんお留守？それぢや、置いて行きますからね。お歸りになつたら、よろしく言つて下さい』かう言つて歸つて行つた。それは生れてまだ二十日位しか経たない小さな可愛い三毛猫であつた。にやア〜鳴いてりんの後を追つた。

『何ッてまア可愛い猫だらう』など、思つて、りんは勝手の洗ひ物をすましてから、それを膝の上に抱いてやつたりした。にやア〜と小猫は頻りに鳴いた。

ふと、足音がして格子戸が明いたと思ふと、りんは其處にマントの下に緋の羽織を着た書生風の二十一二の青年と一緒に玉子が入つて來るのを見た。

『めづらしい人に逢つたのよ』玉子はかう言つて上つて來て、『おや、何うしたの？猫が來たの？さう？お上さんが持つて來て呉れた？氣の毒だつたわねえ。好い三毛猫ね』すぐ抱いて頬の處に猫の頭を附けて見て、『好い可愛い猫ね。此間から欲しくつて〜仕方がなかつたよ』かう後から入つて來て、『まア、此方にお入んなさいよ、誰もゐないのよ』

りんに向つては、『めづらしいこともあるものね。家から歸らうと思つて出かけて來るのが何うしても似てゐるのよ。一緒に小學校にゐた人よ。』半ば青年の方に話しかけて、  
『此方へ來てるたんですか？さう？一昨年から？私、ちつとも知らなかつたもんだから。母さんと御一緒？さう？本當に久し振ね。いつ逢つたきりでせう。私はまだ田舎に行かない前だから。もう五六年になるわね。本當にめづらしいわね』

りんはいかにも嬉しさにしてゐる玉子を見た。『それから、ちよつとでも好いからツて、無理に來て頂いたんだよ』など、玉子は言つて、『私もお客様もまだお午飯前なんだから、氣の毒だけでも、あそこへ行つて、鰻か何かさう言つて來てお呉れな』



玉子は座蒲團を侷めたり、火鉢に炭を加いたりなどした。りんは綺麗な男らしい肌味のない青年を見た。かういふ處に突然につれられて入つて来て好いのかわるいのかといふやうな躊躇もいくらかその態度に見えてゐた。何か言はれて顔を赤くした。「丸で見ちがへるやうになつて了つたんだわね」こんなことを言つて飽かずに玉子は青年の方を見て「何方もお變りがないの？」

「難有う——父に死なれて、一時困つたけれど、何うやらかうやらしてゐます」

「妹さんも大きくなつたでせうね。家の福ちゃんよりは一つか二つ上ね」

「さうです。もう十歳になりますよ」

「さうですかね、もう……」かう言つて、ちよつと考へて「此頃は？學校は？」

「三田に行つてゐるんです」

「さうですか。三田ですか。清さんも三田に行つてゐるぢやないんですか」

「杉山君は去年よしました。……今、遊んでゐるでせう」

「さう」と玉子はまた青年の方を見て、

「私の話誰かに訊いて？さう？きいちやんそんなこと言つてゐましたか？もう駄目ね、私なんか——。でも仕方がないわ。不仕合に生れて來たんだから」

「そんなことはありませんよ」

青年はかう言つて笑ひを顔に見せて、「そして此處にはいつ來たんです？」

「つひ、此間來たばかりだよ。ひどい家でせう。でもね、これでも二階はちよつと見晴しが好いのよ。」にやアにやア鳴いてゐる猫を頬に押當て、「よく鳴くのねえ。何をそんなに鳴くんです？兄弟にわかれて、他人の家に來たから悲しいんですか。」

こんなことを言つて、玉子は後の茶籠筒の中から煎餅を一枚出してやつた。小猫は始め匂ひをかいでから小さな齒の音を立て、食つた。

ハはと板にゐた時分の話を飽かずに話した。青年の方は三級も四級も上であつたけれど、その家の隣に玉子の友達がるたので、小さい時分からお互によく知り合つてゐた。それは大きな寺の隣にあるやうな小學校で、その廣場では、女の生徒達が女教師の唱歌につれてよく「聴よ、聴よ、聴さんよ」など、言つて踊つた。友達と一緒に青年の家に遊びに行つて、立派な座敷で繪本などを見せて貰つてゐる處へ、品の好い青年の母親が出來て、めづらしい菓子紙に包んで呉れたことなどもあつた。急に、父親が死んで、田舎に行くことになつた時には、幼心にも玉子は何となくさびしいやうな氣がした。二人は其時分の大勢の友達のことなどを話した。「さうあの人はもう子供が出來たの？早いわねえ」など、言つて笑つた。

「でも、母様さんと二人きりでは、保さんは氣樂だわねえ」

玉子はかう言つて、「ぢや、毎日此處から學校に通つてゐらつしやるの？」

りんが歸つて來た時には、二人は欠張面白さうに餘念なく話してゐた。茶だの菓子だのが其處に出てゐた。青年は何方かと言へば、口數の少い方で、思ひ切つたやうな玉子の言葉に卷かれるやうにをりく顔を赧く



した。「え、え」など、黙頭もくとういてちよつと笑つて見せるところに言ふに言はれない無邪氣むじやぎなさつぱりした愛嬌あいせうがあるのをりんは見た。しかし青年には、かういふ處ところに長居ながるをしてはといふ遠慮えんりよがあつて、何なんとなく落附おちついて坐つてゐられないといふやうなところがあつた。「い、わよ、今、何か來ますから、もう少し遊あそんでゐらつしやいよ」かう玉子は幾度いくたびもとどめた。

「ちよつと、二階にかいに上つて御覽ごらんなさいな。それは好い景色よ」こんなことを言つて、やがて玉子は青年を二階にかいにつれて行つた。りんはかなりに長い間二階にかいから下りて來ない二人ふたりを見た。何か面白おもしろさうに話して笑つてゐる聲こゑなども聞えて來た。丁度ちやうど、其時そのとき、郵便いんびんが來たので、それを受取りにりんが女關めくわんに出てるると、「りんや、何なんあに？誰たれが來たの？」といふ玉子の聲こゑが二階にかいから聞えて來た。

「重信いづみですよ」

「さう、持つて來て御覽ごらん」

りんが上つて行つた時には、青年は欄干らんかんの前に立つて、ひろくと見渡みわたされたあたりの景色などを見てゐた。富士ふじがよく見えてゐた。玉子は郵便いんびんを受取つて、裏うらをかへして見て、それを淺田あさだの机つくえの上に置いた。二人ふたりは猶暫なほしばらくく二階にかいにゐた。

やがて出來て來た鰻井うなぎを二人ふたりは長火鉢ながひの傍そばで食つた。「此處こゝ等の鰻うなぎは不味まずくつて食べられないわねえ。保さん、今度こんど、いつか一緒に何處どこかに何か食たべに行きませうか。保さん、芝居しほは嫌きらひ、きらひぢやないわねえ。今度こんど、何處どこかに本當ほんたうに行きませうよ」こんなことを玉子は言つたりした。やがて一時間じつかんほどして青年の歸かへつ

て行くのを女關めくわんまで見送つて出て行つた玉子は、つまらなさうな顔かほをして、溜息ためいきをついて、長火鉢ながひの傍そばに來て坐つた。猫ねこがにやアにやアと鳴ないてゐた。



終點で電車を下りて、橋を渡つて、大きな貸座敷などの並んだ道を少し行くと、其處に家の方に曲つて行く細い近路があつた。其處を淺田と玉子とは夜遅くよく並んで歩いて歸つて來た。長い梅雨が晴れて、氣候が段々暑くなり出した時分には、夜の町の灯に引かれるやうにして、寄席だの芝居だの活動寫真だのに二人は出かけて行つた。名高い女義太夫の再勤をわざわざ遠くまで聞きに行つたことなどもあつた。三度に一度は母親も一緒に伴れられて行つたりした。「何年振りであの上手な三味線を聞いたらう？」などと、母親は喜んでゐた。

玉子は淺田の此頃何か頻りに煩悶してゐるのに氣が附いてゐた。金廻りなども初のやうではなくなつて來てゐた。持つて來るといふ金を三日も四日も後らせるやうなことも少なくなかつた。それに、こつそり女を圍つて置くといふことが田舎の方へも知れて行つたらしかつた。何でもそれは田舎の友達だと言つて淺田が伴つて來て二階で酒を飲ませた肥つた男の口から洩れて行つたに相違なかつた。「ちよつと國に行つて來る」かう言つて淺田は土曜から日曜にかけて田舎の方へ出懸けて行つた。

女房子の話も淺田は時々少しづつ、は話して聞かせた。五歳位になる女の兒の寫真を出して見せながら、「こ

れがゐるからまだ好いんだよ。落附いてゐるんだよ」など、淺田は言つた。それは何でも温和い亭主孝行の働きの細君らしかつた。淺田が隠して隠して文庫の底に藏つて置いた寫真では、玉子はいかにも田舎者らしいかつぶくの大きな不器量な三十女を見た。じみなお召に舊式の縞珍の帯をしめて、恰好のわるい丸髷に結つてゐた。口がイヤに大きかつた。しかし、淺田の話では、その細君の里は、土地でもきこえた金持で、田地などは淺田の家よりも餘程多いといふことだつた。「まだ親父が生きてゐるから自由にならないけれど、自分の代になれば、こればかりの金、何でもないんだがな」など、淺田は常に言つた。

此頃では、御用商人の群の一人に勧められて、内所で何か始めてゐるらしかつた。わざわざ田舎まで行つて持つて來た金を、一日二日で何處かにやつて了ふやうなことなどもあつた。「兜町の方へでも行つてゐるんぢやないかえ」かう母親は心配して聞いた。

夏の夜の明るい灯の中から、ある夜遅く二人は家の方へと歸つて來た。例の路を曲つて、此方へとやつて來たが、通にはまだひやかしの客がそろそろ通つて格子先を二軒づつ、のぞいて行くものなども澤山にあつた。賑やかな太鼓や三味線の音なども聞えてゐた。しかし横町に入ると、流星にしんとして、星が銀のやうに空に煌いて、夜は更けたといふことがそれと知られた。

「お前あの役者知つてるのかえ？」

かう淺田が訊くと、

「え、一二度お座敷で逢つたことがあるわ。旨いでせう。あれで、女形では中々上手な方よ。あの一枝が旨



「かつたぢやないの？」玉子は少しはしやぐやうな調子で、「ちよつと、あの連中ではあの位に出来るのではないわねえ……。え、あつちにある時には、よくあそこにある芝居に出てたんですよ。静子ッて言ふ妓があつたでせう。あの人が大騒ぎをしてるのよ」

「今でも矢張さうかえ？」

「さうでせう屹度。私もあの人のお座敷で一緒に逢つたんだから」

浅田と一緒に伴れ立つて、その土地の芝居にその役者の顔を見に行くことは、まさか玉子には出来なかつたけれど、その役者が他の一座に雜つて遠い離れた劇場に出てるといふことを新聞で見た時には、玉子の心は躍らすには居られなかつた。「それは面白い狂言らしいわ。行つて見ませうよ」かう言つて浅田を説いた。「ちつとも此頃何處にも伴れて行つて呉れないわよ。遠くつたつて大丈夫よ。電車があるもの」など、も言つた。何の彼のと引張り出すやうにして、玉子は浅田を伴れて行つた。

その役者を舞臺の上に見ることは、玉子には此上ない得意であつた。綺麗なお嬢さんに扮した姿は、玉子の體をぞくぞくさせた。其聲だ。やさしい其聲だ。玉子は其夜の歡樂を眼の前に浮べて見た。この大勢の觀客も、傍にゐる浅田もさういふことは夢にも知らないのだ。かう玉子は思つたりした。と、秘密といふもの興味が玉子の胸に漲るやうに押寄せて來た。「旨いわねえ、あの役者」かう浅田に言つて聞かせる玉子の聲は、何處となく上調子になつてゐた。

しかしまさか樂屋にまで入つて行く勇氣は玉子にはなかつた。「藝者をしてゐればそんな事はわけはない

のだけれど……」こんな風に思ひながら、せめては自分の來てゐることだけでも何うかして知らせたいと思つて、幕間には樂屋に近い通り路の方へ行つて見たりした。何處かの藝者らしい女のすん／＼樂屋に入つて行くのが羨ましかつた。處が三幕目の時だつたか、運よく玉子はそこでその役者にはつたり出會した。「雪江さん、來てるの？まア久し振ね。」かう言つてその役者は莞爾した。「さうなの？一緒に來てるの？何處にゐるの？」など、訊いた。玉子の體はまたぞく／＼震へた。

それからはその役者の眼は舞臺から絶えず自分の方を見てゐるやうに玉子には思はれて仕方がなかつた。

「藝者をしてさへるれば——」そんなことを何遍くりかへして思つたか知れなかつた。ところが、四幕目の幕間には、今度はその役者が玉子のゐる席へとやつて來て、浅田の方を見ないやうにじろ／＼見ながら、丁寧に挨拶をして、五分間位其處に一緒に坐つてゐた。狂言の話などをもして行つた。玉子は浅田に言つて祝儀をやつて貰つたりした。

歸る前には、玉子は初め逢つた處で再びその役者に逢つた。「ぢやまたね」本當に久し振でしたね」など、言つて別れて來た。浅田に伴れられて歸つて來るのが玉子には辛かつた。體が急にほてつて來たりした。

浅田に寄添うやうにして歩きながら、

「本當に上手だつたわね。あの役者……聲が好いわね。それは靜子ッていふ藝者は夢中なのよ。」闇に浅田の手を握つて、

「誰だつて惚れずにはゐられないやうな役者だわね」



「澤山あるんだらう。あゝいふ人には？」

「それはあるわねえ。藝ばかりではないわよ。矢張り、女形をする役者は、何處かやさしい處があるわ。心持がいつか女見たいになつてゐるのね」

「中幕に出た時もよかつた」

「さうね、あの時も好かつたわ。」不思議にも玉子の體は男こひしやといふやうな情に燃えてゐた。玉子はまた浅田の手を闇に握りながら、「捨てちやいやですよ」

堅く手を合せながら、二人は黙つて家の方へと歩いて行つた。小刻みな玉子の足音はしんとした夜の空氣の中に際立つて聞えてゐた。星は煌々と美しく空に光つてゐた。

「りんは居眠りでもしてゐますよ、屹度……」こんなことを言つた玉子の胸には、今度はマントを着た幼馴染の青年の姿が見えてゐた。

玉子はそれまでも二三度保に逢つてゐた。保の母親をも知つてゐるので、別に變な顔もされずに、お鮎の御馳走などになつて歸つて來た。「お咲ちやんですつてね、丸で見違へるやうになりましたね」かう言つて凝と母親から顔を見られた時には、玉子は自分の身の上が耻しくなつて、サツと顔を赧くした。母親のぬない留守に訪ねて行つた時には、玉子は保をさそひ出して、レールを越えて、妙華園の方へ行つた。二人並んで行くのが何となく玉子には嬉しかつた。それは六月頃の晴れた日で、玉子のさしたクリーム色の蝙蝠傘には、午後の日影が美しく照つた。その時紅と白の薔薇の小さな鉢植を其處から二人で買つて來て、白の方を

保が持つて行つた。家に歸つてから、玉子は「綺麗でせう」など、言つて浅田に見せたりしたが、枯らすまいと思つて、人知れず何れほど注意したか知れなかつた。朝に晩に、玉子は忘れずに水をかけてやつた。その次に保に逢つた時には、「此方も枯れないでゐるはねえ、私のもまだよく咲いてゐますよ」など、言つて喜んだ。併し二人の間は何うにもなるやうなものではなかつた。宿直の夜など、玉子はひとり保のことを考へて溜息を吐いた。

玉子は自分でも自分の心持がわからないやうな氣がして歩いた。それはいろ／＼な男の方に心が偏つてゐて、それでゐてしつかりと攫んだものゝないやうな心持であつた。浅田も惚れてこそはるないが、決して厭とは思はなかつた。浅田の田舎の方では自分のことを何の彼のとわく／＼言つてゐるといふことが耳に入る度に、不思議にも浅田の方に自分の心が偏つて漲つて行つてゐるのを玉子は見た。

手を握つて歩きながら、思はず知らず溜息が出た。

「何うしたんだえ？」

「何でもないのでよ。今、ちよつと考へたことがあつたのよ」かう言つて浅田の手を堅く握りしめて、「だって、かうしていつまでも一緒にゐられるか何うかと思ふと、心細くなるんですもの」

「大丈夫だよ」

浅田はかう言つて、手を握りかへすやうにした。

「だって、貴方は奥さんがゐるし、……何うせ私なんか何うにもならないんですもの、今日の芝居のあの一



枝の通りよ」

「何アに、誰が何ッて言ッたッて、僕さへしつかりしてゐりや好いちやないか」  
 「それが出来ないのよ」

玉子は何うして好いかわからないやうな心持で、急にヒステリックに頬を傳つて落ちて来る涙を拭いた。果してりんは長火鉢の處で假睡をしてゐた。格子戸の開く音におどろいて出て迎へた眠むさうな顔を見て、  
 「矢張、話して来た通りね」かう言つて玉子はちよつと笑つて見せたが、すぐまた遺瀨ないやうな辛いやうなやきもきするやうな心持に落ちて行つた。

土産の菓子などを其處にひろけて茶を淹れたりなどしてゐたが、やがて、  
 「寝ませうよ、もう」

かう言つて玉子は浅田を促して二階に行つた。

それは蒸暑い夜であつた。わざと一枚明けて置いた雨戸からも風は少しも入つて来なかつた。玉子の頭には種々な男の顔が混雑と通つて行つた。一緒にゐる浅田の呼吸は保の呼吸のやうに思はれた。玉子は灯を消さなければ眠られないやうな習慣になつてゐた。

「保さん」かう唇の中で呼んで見たりした。下ではりんの雨戸を繰る音が靜かに聞えた。

十二

「りんや、お前、何處に捨て、来たの！」

「あの向の通りに、藥屋があるでせう。あそこの傍の廣場の處に置いて来ました」

「誰もゐなかつたかえ？」

「え、」

りんはかう言つたが、でも、鳴くんですもの、困つて了ひましたよ。何でも廣場の傍の處でした。何處の宅だか、勝手の灯が明るく向ふに見えてゐましたよ」

「可哀相ね」

玉子はほろりとした。

それは浅田の手元が段々わるくなつて家にやる月々の手當も生計向の方も十分に出来なくなつて来たといふ頃のことであつた。小猫は腹をわるくしてよく疎忽をした。背を高くして苦さうにしてゐると思ふと、忽ち白い丸いものを座敷の縁側だのに吐した。「何うかしたんだねえ。何かわるいものを食つたんぢやないか。」など、言つて、玉子は自分の飲んでゐる牛乳の残りを飲ませたりなどした。鶏卵などもやつた。家の母親



は「そんなものを食べさせては猶いけないうちやないかえ。」と言つたが「でも、腸がわるいんだから」かう言つて玉子は柔かな肴などまで食はせてやつた。處が腹の方もまだ治らない中に、今度は猫の全身に細かい腫物が澤山に出来て、毛がバラ／＼と抜けるやうになつて来た。其處にも此處にも毛が抜けて落ちてゐた。小猫は見るが中に痩せ細つて、苦しうに縁側の隅などに丸くなつて寝てゐることなどが多くなつた。玉子は可哀相に思つて、よく膝の上などに抱いたり何かしてやつたが、今度はそれが玉子の手や足にかぶれて来た。「まア、イヤだ。痒い／＼と思つたら、三毛のがうつたんだよ」それから玉子は寄つて来る猫を突放すやうにした。「猫に、それが出来ちやもうお了ひですよ。猫のお醫者にかけてツて治りやしませんよ」など、教へて呉れる人などもあつた。母親は「一體お前がいろんなものを食べさせるからわるいんだよ。……捨てておしまひよ。汚なくつて仕方がない」など、言つた。淺田は此頃自暴のやうになつて、一日も二日も家を明けることなどがよくあつたが、歸つて来ては「まだこんな猫を置くのかえ、汚なくつて仕方がないぢやないか。それまた吐いた」かう言つて顔をしかめた。終には玉子もあきらめて、ある夜りんを捨てて行かせた。りんが愈抱いて出て行く時には「近くぢや歸つて来るから駄目だよ」など、玉子は言つた。「可哀相だね」

玉子は小猫のことを考へながらその夜を過した。あんな汚い猫は、何處でも拾つて呉るところがないに違ひない。野良猫になつても生きてゐられ、ばよいけれど、あの病氣ではとても生きてゐられやしない。かう思ふと、溝の中に死んでゐる猫の惨めな姿などが玉子の眼の前に歴々と見えて来た。保の初めて尋ねて来た時に偶然に家に届けてあつた小猫の運命は、矢張自分の運命のやうに思はれて、玉子は悲しくて涙を拭いた。この小猫と保と一緒にして、玉子は何んなに人知れず可愛がつてゐたか知れなかつた。「しかしもう駄目よ、……私なんか何せ駄目よ」かう思つて、玉子にはやアにやア鳴きながら彼方此方を迷つてゐる猫のことを考へた。

りんの言つた明るい勝手元の灯などが見えたりした。「何故捨てる氣になつたらう。死ぬまで家に置いてやれば好かつた。死ぬまで家に置いて死んだら自分で地を掘つて埋けてやれば好かつた。私は薄情だ……」涙が漲るやうに胸につき上げて来た。

その翌日も玉子は一日猫のことが氣になつて仕方がなかつた。夕方には、何うしてももう一度さがし出して伴れて来て、死ぬものなら自分の手で死なせなければ心持がわるいやうな氣になり出した。「二三日此方、玉子はわるく神経が昂つて、心が動揺して、自分でも自分の心持がわからないやうになつてゐた。「あの通の薬屋だつたね」

かうりんに訊いてふらくくと玉子が出かけた時は、夜になつてからもうかなり経つてゐた。まだ歸つて来ない淺田のことなどは念頭に置いてゐなかつた。夜風がさびしく袖を吹いた。ある屋敷の垣つゞきの草地では、虫が靜かに啼いてゐた。

その通の薬屋には、四十五六の人の好き／＼な主人らしい男が新聞を見て坐つてゐた。八百屋には葡萄だの水蜜桃だのが綺麗に灯に輝いて並んでゐた。



廣場はしんとしてゐた。晝間子供の遊び散した棒だの紙片だのが其處に白く見えてゐるばかりであつた。

りんの言つた灯のついた勝手元も其處にあつた。  
玉子は暫らくほんやりと立つてゐたが、引かへして、藥屋の前に来て、「まことに變なことをお訊ねいたしますけれど、此處等に三毛の小猫がまごころしてをりは致しはせんでしたらうか。……家の猫が昨日からゝなかりましたんですが、此邊で見つて言ふものが御座いましたんですが……」

「さう言へば、その猫でせう、昨夜、にやアにやア言つてゐましたよ」

主人はちよつと途切れて、「たしかにさうでせう。お宅のですか。お待ちなさい」かう言つて奥に入つて行つて、何か頻りに話してゐたが、やがて出て来て、「昨夜は鳴いてゐましたけれど、今朝はもうゐなかつたさうですよ。何うしたらう、あの猫ッて子供達が言つてゐたさうですよ。……誰か拾つて行つたか、それとも何處かにまぎれて行つたかしたんですね……。さうですか、お氣の毒ですね。今度來たら、家においてあげますから」丁寧な主人は、玉子の惻れた風を見て、同情したやうな言葉をかけて呉れた。

玉子はそれから廣場の向ふの方に行つて建具屋の店で見つて見た。「知りませんな」其處に仕事をしてゐた若者は、じろくくと玉子の方を見ながら言つた。奥から丁度出て來たもう一人の若者は、「何だ？ 猫だ？ 知らねえな、此頃は猫なんか一つも見かけたことアねえ」ぶつきら棒に言つて、其處に坐つてすぐ仕事に取りかかつた。酒屋では、まだ宵の口なのに、小僧がこくりく居眠をしてゐた。入つて行つて訊かうとすると、「は、何を上げます？」かう狼狽して眼を摩りながら飛起きたが、「猫？ 猫なんか知りません」何だ馬鹿々々

しいといふやうな調子で投げるやうに小僧は言つた。

何處にまぐれて行つたらうと思ふと、玉子は可哀相で可哀相で仕方がなかつた。こんな遠くの方に來る譯はないと思はれるやうなところまで行つて訊いた。

「昨日、まぐれて來たのはさうぢやないか。いや、あれア、三毛ぢやねえやな、黒だ、どら猫だ」など、職人風の男は言つた。「知りませんな……」忙しい世の中に猫がさがして歩いてゐる人もあると言つたやうな調子で、ある家の上さんは言つた。

何うしても探し出さなければ氣がすまないやうな心持が玉子にはしてゐた。自分で捨てさせたゞけに一層さういふ心持を深く感じた。不思議なほど心が猫に向つて偏つて行つてゐた。

「何らしたら好いだらう」氣が附くと、こんなことを考へて玉子は暗い溝の傍の處に立つてゐた。



浅田の金廻りは益々悪くなつて、終には家を畳まなければならぬやうになつた。國の方からは、叔父に當る人が度々出かけて来て、今やめなければ勘當するといふ父親の言葉をも傳へて来た。玉子の母親はわざわざ出かけて行つてその叔父に逢つたりなどした。病院の方も首尾がわるく、不正なことが上官に知れたりなどした、幸ひその上官が浅田を引立て、呉れた人なので、公然ならずには濟むは濟んだが、以前のやうにもう融通は利かなくなつて来た。御用商人の一人に勧められて始めてたことも一月か二月の中にすっかり駄目になつて了つた。

「勘當されるなら、されても好い」浅田は自暴になつてこんなことを言つた。それと共に、浅田の心は強く執念く玉子の方へ絡み着いて來てゐるのを母親は見取つた。困つたものだとは思つたけれど、堅氣だけに、餘りに薄情なことも母親には言はれなかつた。兎に角、半年なり一年なり世話になつた人だと思つた。それに先が財産家であり、女房子もあり、實子でありするので、此際世話をすればといふ慾もいくらかは手傳つて、母親は段々浅田の力になるやうな態度を示して來た。「餘りひどい叔父さんの言草だ。お咲とぐるになつて私が騙してゝもゐるやうな口ぶりだつたけれど、私は今でこそかう落魄れてゐても、これでも昔は老婢の

娘なんですから」など、母親は浅田に言つた。それと共に母親は一方玉子の心を探ぐることに注意してゐた。浅田を満更悪くは思つてはゐないが、さうかと言つて、何處までも浅田について行かうといふ決心も玉子にはないらしかつた。母親は玉子の心の中に段々目覺めて來るあるもの、あるのを見落すやうなことはなかつた。「お前、何うかしたのね。イヤに此頃はよくしてゐることがあるよ。何か心配してゐることでもあるのかえ？」母親がこんなことを言つて訊くと、「だって、母さん、つまらないんだもの、何だか悲しくつて涙なんぞばかり出るんだもの、何うしたんでせう、一体、私は？此頃は？」かう言つて玉子は母親の顔を見た。また時には「浅田だつて、可哀相よ。あれでも私の爲めに、あんなになつたんですもの」「こんなことを言ふかと思ふと」「でも、いつまでかうしてても仕方がないわねえ。……私なんか、本當に不都合よ。何うせ、本當にしんから力になつて呉れる人なんかいないんだから。こつちでいくら思つたつて駄目なんだから」かう言つてヒステリックに涙を袖に拭いたりなどした。

十月の末には、浅田はもう其家にはゐられなくなつて来た。お咲と一緒に何處か間借でもしやうなど、言つてゐた。何うしても玉子は放さないといふやうな腹で浅田はゐた。「此頃それや嫉妬がひどくなつたのよ。私がかよつとでもゐないと大騒なのよ」かう玉子は母親に話して聞かせた。

「間借をする位なら、當分、宅へ來てゐたら、何うです？宅は狭いけれど……」かう母親はある時浅田に言つた。浅田も始めは幾分か躊躇してゐたけれど、婚の様に親切に取扱つて呉れる母親の言葉は嬉しかつた。「田舎の女房や子供なんか何うでも好い。お咲さへるれば、こんな風にまで心がつき詰めて行つてゐた。玉



子にも別に異議はなかつた。ぐすく／＼に浅田は母親の言葉に従つて行つた。

一緒に暮すならもう少し広い家に引越さうかなど、いふ話しもちよつと出たが、長く先を見てゐない母親は、無駄だと言つてすぐそれを否定した。で、どうせ狭い玉子の家は、やがて新しい簞笥や道具などで一杯になつた。二人は奥の六疊の座敷に住むことになつた。

毎朝軍服を着て出かけて行つて、四時過にはきまつて格子戸を明けて浅田は歸つて来た。時には頭が痛いと言つて玉子が搔卷をかぶつて寝てゐることもあれば、面白くなさうな顔をして黙つて母親が裁縫をしてゐることなどもあつた。晴々とした二階で過したやうな楽しい気分は其處では最早味ふことは出来なくなつた。晩酌も好加減で切上げなければならなかつた。もうおよしなさいよ。酒なんかありやしないわ。かう玉子は言つた。

俸給だけでは何うにもならないやうな生活であつた。父親は矢張まだ遊んでゐた。機械工場に行つてゐる宗太郎だの、本屋に勤めてゐる定雄などのやつて来る時には、狭い家の中は坐つてもゐられないやうに混雑した。さういふ時には、浅田はブイと立つて獨りで外の方へ出懸けて行つた。

「困るねえ」とも何とも母親は言つたことはないけれど、さういふ暗い不愉快な気分は、常に家中に漂つてゐた。冴えた玉子の頭には殊にそれが鋭く反射した。何うかしなければならぬといふことが玉子の頭の中を絶えず往來した。時には浅田の箱がすつかり剥けて了つたやうに玉子に見えることなどもあつた。さうかと思ふと、餘りに冷淡な母親の態度に反抗して男の方に偏つて行くやうな心持も起つて來てゐた。玉子は絶

えず焦々して暮した。それに、浅田と一緒になつてから、母親と玉子との間には、不思議にも今までにないやうな黙闘も起つて來てゐた。父母のことや、家のことや、兄弟のことなどを心配してゐた二三年前の玉子とは、丸で心持が違つて來てゐた。

母親の持設けてゐた田舎の方からの話は二月経つても三月経つても何とも言つて來なかつた。田舎者は本當に氣が長いからね。義理も人情もわかりやしないだからね。そんなものを相手になんかしてゐられやしないよ。こんなことを言ふかと思ふと、「第一お上さんがだまつてゐるのが氣が知れないねえ。亭主を人の家にあづけて置いて、よく黙つてのんきにしてゐられるんだね。餘程、何うかしてゐるんだね」など、母親は言つた。それに、浅田はその月々の俸給をさへ、すつかりは母親に渡さないやうになつて來た。生計向きの方も段々困つて來た。

「何うかしないけりや仕方がないわよ」かう言つては玉子はよく浅田に相談を持ちかけて行つた。それに引かへて、浅田はもう一度間借でもして二人で一緒に暮したいといふやうな希望を絶えず玉子に洩らしてゐた。「ぢや、貴方、家の方の手當を何うかして下さる？それが出来れば好いけれど、とても今はそれは出来ないでせう」かう玉子に言はれると、「お前は薄情だ、僕のことなんかちつとも思つてゐては呉やしないんだ。さういふ了見なら、それで好い」浅田はかう言つてすこし暗い顔をして見せた。

「だつて、生計が困るんぢや仕方がないわよ。さう言ふと、また、お金のことばかり言ふやうに言ふけれど、實際さうなんだから、仕方がないわよ。貴方にもちやんと分つてゐるぢやありませんか。……」かう言つて



玉子は考へて、「私、いつそもう一度、何處からか出やうかしら？」

これまでも玉子は二度も三度もそれを持出した。その時には、浅田は、「勝手にしろ」とか何とかきまつて言つたが、すぐ折れて、「その位なら、僕は心配はしはしない」と言つて深く思ひに洗むやうな顔色をした。男に伴いて何處までも行くことの出来ない玉子の心が浅田には物足らなかつた。何ぞと言つては、「お前は薄情だ、薄情だ」と浅田は言つた。

浅田の玉子に對する疑惑は、女に離れ難いといふ心につれて益強く熾になつて行つた。金の切目が縁の切目といふやうな心持に一家は段々落ちて行つた。金のことを言ひ出すと、浅田も玉子も母親さへも一緒に腹を立てた。ある日などは、ちよつとしたことから玉子と母親とが物言ひを始め、鏡臺に向つて結びかけてゐた髪を玉子は自分で無茶苦茶に壊したりなどした。「本當に、お前は親不孝になつたよ。もとのお喉ぢやなくなつて了つたよ。これも皆な男のお陰だよ」など、言はれる時には、浅田はじつとして聞いてはゐられなかつた。何うかすると、浅田は懊惱する心を新宿の方へと運んで行つた。

二月三月もまたかうした空氣の中に過ぎて行つた。玉子の十八の春は来て、梅が咲いたり花が散つたりした。「貴方、お小遣を少し頂戴、貴方だつて、好きなことをして無駄なお金をつかつてゐるぢやありませんか。さうく、母さんから貰つてゐられやしませんからね」玉子はかう指性に言つて、なけなしの金を浅田の財布から出させるやうなことも度々あつた。長押にかけてある浅田の軍服と軍帽、それを見るのも此頃は玉子には厭になつて來てゐた。「本當に何うかしなければや？」母親も後には浅田を同居させた自分の慾を後悔した。

「私、出るわ、私が出さへすれば好んだから。私がるなけりや、浅田だつて、いつまで此處にかうしてゐやしないでせうから」ある日かう玉子と母親と言つてゐる處に、丁度好く最初に玉子が遁けて來た田舎の澤屋の親類の人が遊びに來てゐた。「行くつもりなら話して見ませう。あそこも二三年前とは餘程好くなつたさうですから」など、言つて、其日は歸つて行つたが、二三日してからまたやつて來て、「向ふでも喜んでゐました。行くなら、何彼なしに、賣れても賣れなくつても、月三十圓のきめで來て呉れと言ふんです。それは、何うせ長くは駄目でせうけれど、二月三月遊びに行つて來るつもりで行つて見たら何うです？」その人はかう言つて勧めた。「さうするわ。私、いつまでかうしてゐたつて、衣服がなくなるばかりですもの」かう決心したやうに玉子は言つた。

玉子は浅田に向つて言つた。「さうぢやないのよ。貴方には私の心持なんかちつともわからないんだから。私も困るし、東京では事が面倒になるから、田舎に行つてかせいで來るツて言つてゐるんですよ。それも長い事ぢやないのよ。いけなけりやすぐ一月でもよして來るわよ。お金を澤山借て行くツていふ譯ぢやないんだから、體が縛られて行くんぢやないんだから……。さうして二人して稼げば、ちつとは生計が樂になるぢやないの」

切れるの別れるのと言ふのではないといふことを玉子は繰返して話した。此頃にはいほどの情を見せて浅田の機嫌を取つたりなどした。兩方で思つてゐる心は、ちよつと位離れてゐたとて、さう變るものではない、といふ程度をも見せた。「私、これでしんは堅いんですから」かう言はれると、浅田はそれでも厭だとは



ことが出来なかつた。かと思ふと、浅田と二人きりでゐる時には、「行く決心はして見たけれど、またお客の前に出なけりやならないと思ふとつくづく厭になるわよ」と悲しさうにして、「好いわ、田舎は東京の様でないから好いわ。節操を守らうと思へば、いくらでも守られるんですから。貴方も浮氣をしてはイヤですよ」玉子は染々した調子でこんなことを言つた。

五月の初めに、玉子は愈田舎の方へ行くことになつた。その一日前には、玉子はこつそり保を誘ひ出して一緒に海岸の方を散歩した。

十四

藻の花の白く咲いてゐる川の縁の料理店へ玉子は再び襦を取つて入つて行く身となつた。「玉ちゃんがまあ好い藝者になつたつちや、三四年見ないとあゝも違ふもんかねえ、俺ア、別な人かと思つた」通りの店屋の上さん達は、かう眼を睨るやうにしてその後姿を見送つた。賣れたにも賣れないにも、今までにこんなに賣れた妓はないといふほどであつた。澤屋の小梅——新しくつけた名よりも、玉ちゃん、玉ちゃんと彼方此方からかけてよこした。

停車場に出てる車夫、休憩所の上さん夫婦、鹽煎餅などを店で賣つてゐる婆さん、詰襟の服を着た停車場の助役、さういふ人達は四年前と少しも變らない顔をして、同じやうに其處に住んでゐた。醬油の出来る利根川縁の田舎町の方へ行く乗合馬車は、其時分と少しも變らずに、汽車の着く度に下りて来る旅客を載せて、喇叭を長く鳴らして、半は茅葺半は瓦葺の田舎町をガラ／＼と通つて行つた。

橋を渡つた處の料理店の上さんの死んだあとには、色の生白い女中上りのやうな若い女が帳場に坐つてゐるかと思ふと、銀行の前には依然として自轉車が置いてあつて、登記所の門からは、知つてゐる顔がひよつくり出て來たりした。裏町のお師匠さんは、矢張り供達を集めて、三味線だの踊だのを賑やかに教へてゐる



が「まあ、玉ちゃんかえ」かう言つてなつかしさうにして迎へて呉れた。お座敷でも知つてゐる顔が多かつた。「玉公がこんな容色好しにならうとは思はなかつたなア」町の金持の砂糖屋の肥つた主人はこんなことを言つて笑つた。ある姐さんは、その時分深間であつた旦那と切れて、銀行に出る若い亭主を持つてゐたりした。町で遊ぶ人達は、驚いたやうな心持ちで、好い聲で唄を唄つたり、上手な三味線を弾いたり、巧な口の利き方をしたりする冴えた如才のない玉子を見た。田舎の藝者などには見られない様な氣の利いた扮装をしてゐる玉子を見た。大きな凱旋の歓迎會などでも、巧にお座敷を取持つて、一座の花のやうにかどやいてゐる玉子を見た。「あゝも違ふものかね。元はよく隅の方で黙つてゐるやうな子だつたがな。えらく發展したもんだね。僕なんか口ではもうかなはなくなつたよ」町の息子連の一人はかう言つて舌を巻いた。何んな日でも二座敷や三座敷をしないやうなことはなかつた。

裏町にある鰻屋などに止むを得ず引張つて行かれる時にも、玉子は旨く口を外す手腕を持つてゐた。「今度ね。だつてこんな處ちや駄目よ。近中に何處かに行きませうよ。東京に芝居でも見に行きませうね」などと言つて、いつの間にか其處から抜けて歸つて來た。玉子は自分の心持と自分の生活との間に、夥しく隙間のあるのに氣が附かすには居られなかつた。泣きたいやうな心持でゐて、表面では、唄など唄つて、客の驚くほどはしやいで見せた。

保が何うにもならないのが玉子には口惜しかつた。しかし一方では何うにもならないのが却つて一層玉子の心を其方の方へと伴れて行つた。海岸で散歩して、ある家に入らうとした時、保は何うしても言ふことを聞かなかつた。保は詩集などを手にして、センチメンタルな男の心持を女に話して聞かせるやうな青年であつた。「男にも童貞の苦惱といふことがありますから」眞面目でこんなことを玉子に言つた。

母親の方からは、手紙が絶えず届いて來てゐた。玉子がゐないので自暴になつて、新宿通ひが此頃段々烈しくなつて行つたといふことは度々聞いて知つてゐたが、ある日の手紙には、突然役所の方が一時休職になつたといふことを知らせて來た。運わるくわるい病氣を背負ひ込んで、うん／＼淺田が唸つて寝てゐる傍で、汚れたものを母親が洗濯してやつてゐるといふことなども書いてあつた。

其病氣で淺田は一月以上も母親の世話になつてゐた。淺田からも手紙が來て、是非一度逢つて話したいなと、書いてあつたが、玉子は碌々返事も出さずに暮した。

淺田の田舎の方でも、かうなつては、まさかに放つて棄て、置くわけにも行かなかつた。叔父がまたやつて來て、種々話があつたといふことであつた。——此方からも人が入つて、淺田も漸く國に歸ることになりましたから、御安心なされたく、殊によると近い中に、當人が行くかも知れませんが成るべく逢はないやうにした方が好い——かう細い字で心配して母親は書いてよこした。田舎の方でも、母親の親切がいくらか飲み込めたいらしいやうなことも細々とその手紙の中に書いてあつた。

多額納税者の若旦那といふ客に、その頃玉子は三度川の縁の座敷で逢つてゐた。田舎にはめづらしい品の好い男振りの好い無口な人で、ハイカラにかけた髪色の濃いのが色の白いのにくつきりとよく映つて見えてゐた。土地の裁判所に出てる石原といふ三十位の男がいつも取まきと一緒にやつて來るのが例になつて



ゐた。その石原には玉子も前に度々逢つてよく知つてゐた。「若旦那、何うです？ 田舎にはめづらしい妓でせう」など、石原は言つた。

大して心も動かさなかつたが、「小梅さん、好い運が向いて來てゐるのに……まだ解らないんですか」などとお上さんに言はれる頃には、玉子の心も段々その客の方に向つて偏つて行つてゐた。「何うです？ 玉ちゃん、向ふでも大變に氣に入つてゐるんですよ。坂田の小林ツて言つちや大したものなんだから」かう廊下の處で石原に言はれた時には、不思議にも暖かい血が玉子の體に上つて來てゐた。

夜汽車で三人一緒に東京の方へ出かけて行つて、川に臨んだ眺望の好い室で一晩泊つて、あくる日は芝居を見て、家にも寄らずに歸つて來ると、丁度其處に、橋の傍の料理屋から口がかゝつて來てゐて、知つてゐる東京のお客で、ちよつとでも好いからは是非逢ひたいと言つてゐるといふことであつた。一緒に東京から引上げて來たお客を放つて置く譯にも行かず、それに内々は淺田らしいといふことにも勘附いてゐたので、一度はそれとなく斷らせて見たが、何うしても逢ひたい、ちよいとでも好いからと達て言ふので、玉子は決心して、急いでその料理店へと出かけて行つた。

奥の一間には、果して淺田が蒼白い瘡の立つたやうな顔をして坐つてゐた。酒もかなり飲んだらしかつた。

「貴方、病氣は何う？」

かうなつかしさうに心配さうに玉子は言つても、淺田は暗い顔をして黙つてゐたが、不意に、

「今日はね、實はね、お別れに來たんだよ。お前の心持も、う大抵わかつたから……」

「何うして？」

「いや、もう何も言はない。餘程、逢はずに行かうかと思つただけけれど、こゝを通つて、つひよる氣になつちやつた。國に歸る途中なんだよ。母さんにも、お前にも大變世話になつたね」

「何うして、そんなことを言ふの？」

「イヤ、もう何も言ふまい。母さんからちやんとお前の腹も聞いたよ。お前だつて、いつまで僕の様なものにくつ附いてぐづくしてはゐられないんだからね。それは僕にもわかるよ。」かう言つた淺田の聲は曇つて、眼からは涙がこぼれさうになつてゐた。

玉子も誘はれて悲しくなつて、何と言つて好いかわからないやうな氣がして、暫しはじつとして坐つてゐたが、やがて淺田は思ひ返したといふ風で

「本當に世話になつたよ」

「何うしてそんなことおつしやるの？ 國に歸つたつて、またぢき出て來られるんでせう？」

かうなだめるやうに玉子が言ふと、

「いや、もう出て來られないかも知れないよ。僕も、う百性になるんだから」

前に置いた盃を一つあけて、「しかし、僕は何うせ終には一度は國に歸らなけりやならなかつただから……それは仕方がないんだけど……かう早くその時機が來やうとは思はなかつた」過去を思ひ廻すやうにして「でも逢へて好かつた。逢はずに別れて了はなけりやならないかと思つてゐたよ。」



「今歸つて来たばかりですもの」

「何處に行つてたんだえ？」

「ちよつと……」と言ひかけたが、出かゝつた言葉を玉子は飲み込むやうにして、「ちよつと近所に園遊會があつたもんだから、其方に行つてゐたんですの」

淺田は玉子が田舎に來てからの苦惱を思ひ出してゐた。病氣はすつかり治つたけれど別れの辛さは今でも猶ほ執念く心に絡み着いてゐた。女の心が假令自分に偏つて來ても何うにもならないやうな身分の今の身の上ではあるが、それでも女の心の落附いて他方に向いて行つてゐるのが常に男には口惜しかつた。母親の口を通じて玉子の心持を度々聞いて知つてゐる淺田は、無理のないのを知つて居ながら矢張無理を言ひたいやうな心持で幾月か過した。

叔父が一緒に國に伴れて行くと言ふのを種々に言ひ解いて一人で來たのも、實は玉子に逢ひたいと思つたからであつた。停車場で下りて酒屋で訊いて、それからこの料理屋へとかればわざ／＼やつて來た。しかし相對して見れば、話すやうなことはもう何も残つてゐなかつた。不足を言つたり厭味を言つたり愚痴を言つたりする時期は、もうとうに過ぎ去つてゐた。張詰めた心を互に抱いて、せめては泣いて別れやうと思つて來た希望も徒らな空想であつたことを淺田は見た。「短い縁だつたな」かういふ言葉さへ終に口から出さずにつた。

玉子は暗く激したやうな淺田の顔や言葉や態度が段々落着いて行くのを見た。で、二人は一時間ほど田舎

の話や東京の話などを靜かに話した。「もう酒も澤山だ」かう言つて淺田はやがて行く支度をした。

「まだ、時間があるわよ。八時四十分よ、下りは——」かう言つたが、玉子はちよつと下に行つて、戻つて來て、「私、送つて行くわ」

「何アに、好いよ」

「でも……」

車を二臺頼んで、二人はやがて停車場の方へ行つた。さびしい田舎の停車場には、暗い三角燈がしよんほりといつてゐた。レールを越した田では蛙の聲が湧くやうに聞えてゐた。

二人は一緒に住んだ年月を胸に繰返しながら、しかもお互にそれを口に出す氣にはなれないといふやうな氣分で、黙つて待合室に立つてゐた。其處に、玉子の知つてゐる客が二三人ドヤ／＼と入つて來て、

「小梅——何うした」

とか何とか言つたり、玉子の傍に立つてゐる淺田の顔を探すやうにして見たりした。「ちよつと、お見送りに來てるんですよ」こんなことを玉子は言つたが、其時には二人の黙つてゐた氣分も、うすつかり破れてゐた。やがて時間が來た。

「御機嫌よう。それでは、御大事に——」

やがてレールを越えて向の闇に見えなくなつて行く淺田の姿を見てゐた玉子は、急に堪らなく悲しくなつて來た。もつと何か言つてやれば好かつたと思つた。しかしそれも長い間ではなかつた。川の縁の料理店で



春は、明るい賑やかな座敷が玉子の歸つて行くのを待つてゐた。

十五

その年の秋の中頃には、坂田の小林が澤屋の小梅を落籍して藝者屋を始めさせるといふ評判が町を賑かにした。萬事取巻の石原が世話をして、常盤屋といふ小料理店の後の幾間かを借りる約束をしたが、移轉の日には、澤屋から手傳ひの若者などが行つて、景氣よく掃除をする音が四邊に響いて聞こえた。隣の垣根に添つた裏道からは、新しい手拭を姉さんかぶりにして、奥の離座敷の障子に掃塵をかけてゐる玉子の意氣な姿がくつきりと際立つて見えてゐた。濃い八字髭をした三十一二になる石原の姿は、その日は終日其處を出たり入つたりしてゐたが、一片附かたづいた頃には、上手な尺八の音が奥の間からしづかに洩れて聞えてゐた。手傳ひに東京から來てゐた母親が行つて見ると、石原は好い心持さうな態度をして、萩などの咲いてゐる庭に向つて、柱に身をよせかけて、頻に尺八の管を口に當ててゐた。玉を轉ばすやうな音はそれから來れへと續いて聞えた。

「石原さん、お上手なんだね」

かう母親が玉子に言ふと、

「え、え、御得意なんですよ」



其日には小林は自轉車でちよつとやつて來たが、掃除が済んだのを見たり、綺麗になつた庭の踏み石の處に立つたり、手傳ひに來た人達に挨拶をしたりしてから、

「今日はちよつと手放されぬ用事がありますから、母さん失禮しますよ」かう言つて一時間もあらずに歸る支度をした。

「石原君、後をよろしく頼むよ」

こんなことを言つて、スーと自轉車を街道に走らせて行つた。

小林は萬事石原を仲の好い友達のやうに——時には子分のやうにして使つた。

「君にすつかり頼んだよ」などよく言つた。玉子には聞かせないやうな話をも二人ではよく話した。町の助役か何かをしてゐる小林は、常に忙しさうにして彼方此方に出かけて行つた。玉子は短い月日の中に一枚の繪から別の一枚の繪に急に移つて行つた様な自分の生活を繰返して考へずには居られなかつた。品の好い、金持の若旦那らしいすつきりした小林は、玉子の若い心を時の間に引寄せ行つた。種々に言つて呉れた人達も他にも澤山あつたが、玉子は其方には目も呉れなかつた。石原は仲に立つて、何彼と二人の世話をした。醬油の出来る利根川縁の田舎町から毎夜のやうに通つて來た客は、土地でも聞えた金持であつたが、それが身請でも何でもしてやるといふやうな態度を示して來てから小林は急に金を出してやると言ひ出した。話は時の間に纏つた。やがては藝者を二人置かうといふ話までも出來た。

裁判所に出てゐる石原は、その家を裏町の通りに持つてゐた。木槿垣などのある家で、肥つた二十七八の

細君が莞爾した顔を見せて、いつも玉子の訪ねて行くのを迎へた。玉子は引いてからも、何ぞと言つてはよく其處に出かけて行つた。石原のゐない留守に行つて、半日もその細君と話して來ることなどもあつた。何でも仙臺あたりの生れで言葉に濁つた訛があつたが氣の置けない話好きな親切な人であつた。「夫婦とも好い人ね」東京に歸る前に、ちよつとお禮に行つて歸つて來た母親はかう、玉子に向つて言つた。玉子も石原夫婦を力にした。

小林は來ても泊つて行くやうなことはなかつた。酒の支度をする時には、いつもきまつて石原が呼びにやられた。鼠色の中折をかぶつて、ステッキを持つて、雪踏などを穿いて、裏口から扉を明けて入つて來る姿は、田舎の人とは何うしても思はれないほどハイカラであつた。おどかす積りか何かで、玉子のゐる室の障子の破れからソツとステッキを入れたりなどした。濃い髪を綺麗にわけて、流行の香水などをいつも四邊に匂はせてゐた。

「おい、石原君、尺八を聞かせて呉れないか」

酒の後には、小林はいつもかう言つて石原を促した。月の明るい夜などには、その音が殊に冴えて美しく聞えた。「實際君の尺八は旨いね。東京に行つて名人のを聞いて見ても、いくらも君よりは上手ぢやないやうだ」こんなことを言つて小林はほめた。石原は石原で「今夜は遅いから泊つて入らつしやい。何アに、家の方は今度私が行つた時よく言つて置きますから」などとめても、「でも、近いから、自轉車で行けばすぐだから」かう言つて小林は遅くなつても歸つて行つた。



その借りた家には、料理店の先代の主人の姉に當る五十先の女が十歳になる娘と一緒に二間ほど仕切つて住んでゐた。その人達とも玉子はぢき懇意になつた。夜などさびしい時には、三味線を其方へ持つて行つて弾いたりなどした。

小林の家の様子が見たくつて、澤屋の抱妓と一緒に出かけ行つた時には、川に添つた路を真直に歩いて行つた。そこまでは町からは小一里あつた。川の岸には、漆の眞赤に紅葉したのがあつて、枯れた蘆を長い鎌で人がサク／＼刈つてゐたりなどした。刈穫の大方濟んだ野には、刈稻がかけて干してあつたりして、初冬の晴れた日影が靜かに一面にさしわたつてゐた。長い土手を二人の歩いて行くのが繪か何ぞのやうに此方から見えてゐた。

刈稻を山のやうに積んで、上さんが後押をして汗を流して輓いて行く車にも幾臺となく出會した。ある處では、路を除けて、その車の通り過ぎて行くのを待つた。「百性なんて、辛い稼業ね」かう玉子は言つてその後を見送つた。

土手から少し右に入ると、五六十軒茅葺屋根のかたまつた村があつて、路はその傍を通つて田圃の方へと出て行つた。小林の邸はやがて玉子の眼の前にあつた。刈込んだ檜の垣、大きな門、三つもある白壁の土蔵、庭木のこんもりとした栽込——此方の廣場では、雇人共が寄り集まつて、賑かに唐箕を廻してゐるのが手に取るやうに見えてゐた。桔槔がキイと音して高く楊つた。

玉子は彼方此方を覗いて見た。かねて聞いてゐる伶俐な若い細君のことなども思ひ出されて來た。まだが

ういふ身の上にならない前に、三つ位になる女の兒を伴つてその細君の汽車に乗らうとしてゐるのを見た。とがあつた。ハイカラな奥様——何處の奥さんかと思つてゐると、「あれが小林の奥さんよ」と一緒にゐた澤屋の婢が教へて呉れた。かういふ大きな邸に何不足なく暮してゐる細君を玉子は羨ましく思はずには居られなかつた。

歸りにも同じ長い土手を通つて歸つて來た。少し來たところで、一緒に行つた抱妓が不意に、

「姐さん、旦那よ」

「うそ！」

「うそぢやなくつてよ、そら御覽なさい。」

向ふから勢よく自轉車を走らせて來るのは、確にそれであつた。「まア」と言つてゐる中に、自轉車は滑らかに此方へと近寄つて來た。

「何處へ行つたの？」

自轉車を下りた小林は、莞爾した顔をして、二人の方へ歩いて行つた。

「何だ？ さうかえ？ 家を見に行つたのかえ？ つまらない」かう續いて言つて、「誰かに見つけられはしないかえ？」

「大丈夫よ」

「でも、そんな恰好をして、あそこいらをまご／＼してゐては、人が不思議に思つたらうね。困るねえ」ち



よつと笑つて見せて、『僕は今ちよつと寄つて見たら、二人で出かけたつて言ふから、何處に行つたのかと思つた。』

『さう？ 寄つたの？』

玉子は嬉しさにして、『もう一度、家の方へお歸んなさいよ』

『いや、今日はさうしてゐられない……。少し用があるから』

『いゝぢやないの、ねえ照ちやん』力にするやうに抱妓の方を見て、『折角、此處で逢つたのに、歸しちやつまらないわ』

『まア、さう言はずに、今日は少し用があるんだから』

歸らうとするのを引留める女の姿と自轉車と中折の帽子とは、暫しの間其處に離れたり纏れたりしてゐた。

蘆の穂の白い川は夕暮近い赤い雲を靜かに映してゐた。向ふの土手には、頬かぶりをした百姓が鼻唄を唄ひながら空車の音を立て、通つて行つた。

『何うしても歸さないわ。そんなに奥さんのことばかり心配しなくつたつて好いちやないの？』玉子は兩手をひろけて無邪氣に『とうせんほ』の眞似をして、

『照ちやんも手傳つて頂戴よ』

『今日は本當に困るんだから』

『困つたつて好いわよ。ちつとは私の心だつて察しても好いわよ』

『困るなア』

こんなことを小林は言つたが、終には仕方がないと言ふやうに、『ぢや、先に歸つてゐるよ』かう言つてすぐ自轉車に乗らうとした。

『少し一緒に歩きませうよ。滅多にこんな處を歩きたいだつて、歩けないのだから。私が自轉車を押してあげるわ』

『馬鹿を言つてる』

かうは言つたものゝ、これも矢張仕方がないといふやうに、小林は自轉車を軽く手で押して、靜かに後に戻つて行つた。『そら、御覽なさい、勝つたわねえ』など、女達は囁した。

少し行くと、川は大きなカーブを描いて、土手の上にある松並木の梢からかけて、一面に明るい夕日がさしたつてゐた。松並木の間からは、茅葺屋根だの大根島だの水田だのがチラ／＼と透いて見えてゐた。

女達は面白がつて、キャツ／＼言つて、自轉車を押してやつたりなどした。『私には乗れないかしら』玉子はかう言つて、二人に押へて貰つて、好奇に乗つて見やうとして、危く倒れかけて聲を出した。

一二町はこんな風にして纏れるやうにして歩いて來たが、『本當に勘忍して呉れ、先に行つてゐるから、押して行かせられては大變だから』

『そら御覽なさい、とう／＼あやまつたわねえ。ぢや勘忍して上げるわ』玉子は得意さうに手を拍つて笑つた。



飛び乗つたと思ふと、小林は巧に中心を取つて、スーと平らな道を滑らかに轆らせて行つた。で、やがて遠くなつて行つた自轉車の姿は、夕日のさし透つた松並木の中に、いつまでもいつ迄もはつきりと見えてゐた。

石原は何彼につけて他人でないやうな親切を見せた。東京から貰つたなど、言つて、旨い菓子を見せて持つて来て呉れたりした。小林の來ない日はあつても、石原の姿を見せないことはない位であつた。周旋屋にはめられて、身重になつてゐる抱妓を知らずに置いた時などには、一層常より骨を折つて、小林と玉子との間に立つて、骨肉も及ばないやうな世話をして呉れた。石原さん、今日は何うしたんでせうね、偶々遣つて來ない日には、玉子は何となく物足りないやうな氣がした。

小林ばかりではなく、小林一家にも石原は深く取入つてゐるらしくあつた。大旦那の妾が東京にゐて、それに今年十歳になる男の子があつて、年を取つた大奥さんが、それを始つて仕方がないと云ふ話などを石原は玉子にして聞かせた。坂田の小林ツて言へば、大したもんだけれど、矢張、家庭は難かしいもんですね。大旦那ツて言ふ人は、それはやさしい氣の置けない人で、昔は随分道樂もしたんだツて言ひますがね。小林君に好く似てゐますよ。など、も話した。玉子は小林も話さないやうな大きな豪農の内の内情を石原からよく聞かせられた。小林の周圍にゐる友達の話、町會や郡會などでの小林の位置の話、田地や小作人の上りの額などまで玉子は石原から聞くことが出來た。金はそれはあるんですから、旨く言へば、いくらでも出すんですよ。石原はこんなことをも言つた。

ある夜、石原は遅くまで遊んで行つた。尺八を鳴らして聞かせた後で、望んで玉子に長唄を弾いて貰つたりなどした。何故だか、今夜はひどく面白い。小林君、やつて來ないかな、など、言つて、自分で頼んで、婢に酒と肴を取つて來て貰つた。平野に吹荒る、西風が凄しく澤の梢を鳴して、これが止んだら、雪になるだらうと思はる、ほど、もう寒く／＼なつてゐた。奥の一間には火燵がしてあつたりした。

石原の親切な言葉につれて、玉子は其夜はいろいろな話をしてゐた。父母のこと、弟妹のこと、東京で初めて藝者になつた時のことから、淺田や保のことなどまでも話した。役者ツて面白いもんですね。そんなことを言つて玉子は笑つた。

「しかし玉ちゃん、本當にこんな田舎に、ぐづくしてゐては駄目ですよ。こんな處で抱妓を置いたつて碌なことは出來やしないんだから。それに田舎では煩さいからね。小林君が落附いてやつて來ないのも、つまりは四邊に氣を兼ねてゐるからですよ。一つ、小林君に説いて、東京の何處かに藝者屋を出して貰うやうにするんですね。大將は、玉ちゃんには随分氣があるんだし、それ位のこととはちきして呉れますよ。石原はこんなことを言つて、『僕も折を見てさう言つて話して上げるから、玉ちゃんも精々機嫌を取るやうにするんですね……』。それや、何ツて言つたつて、東京の方が好いからね。第一自由がきくからね。田舎では、ちよつとのことでも、すぐ噂に立つて了ふから駄目ですよ。」

「本當ですとも……。さう出來れば、私も家が近くなるし、願つたり叶つたりですけども……」かう言つた玉子は細君に氣兼ねをして來ても落附いてゐない小林のことだの、手紙をやつても返事も碌によこさない保の



ことだのを頭に浮かべてゐた。暫くしてから、

『本當に出来るでせうか？』

かう思ひ込んだやうに玉子が言ふと、

『出来るも出来ないも、玉ちゃんの腕一つちやありませんか』

かう言つて石原は厭に笑つて見せた。

『本當に出来れば嬉しいけど……』

『それは出来ませよ』

石原は凝と玉子の顔を見た。

その時に限らず、石原は自分で酒を頼んで買つて貰つたりすることが段々多くなつて行つた。時には鰻井を取つて婢にまで御馳走をしたりなどした。玉子は別に何とも思つてはゐなかつたけれど、何だか旦那の留守が氣になるやうな心持もしないではなかつた。一緒に住んでゐる料理屋の姉さんの思惑もはかりかねた。何かの次手に、玉子は小林に藝者屋を出す話を持出して見た。『それも好いね。その内考へて見るよ。』こんなことを小林は言つたが、別に深くそれを考へて見るといふ風ではなかつた。『だって、私だって、淋しいわ。一晩だつてゆつくりして入らしやることはないんですもの』玉子は後にはこんなことを言つて促した。

『石原もそんなことを言つてゐたツけ』

小林はある時かう言つて笑ひながら玉子の顔を見た。

自轉車をひつくりかへして、思ひもかけない怪我を小林がしたのは、それから三月ほど経つてからのことであつた。何でも脚をひどく折いて、田舎ではとても療治が出来ないと云ふので、その翌日すぐ汽車で東京の赤十字病院に入院することになった。玉子は蔭ながら停車場まで見送つたが、細君と母親とのついでゐる小林には、言葉一つ交すことが出来なかつた。さうかと言つて、病院には猶更訪ねて行くことが出来なかつた。玉子は石原の手を透して種々なことを聞くだけで満足しなければならぬ身を悲しんだ。石原は月々の手當の金と小林の手紙とを持つて來て呉れた。

玉子は一月ほどさびしく暮した。思ふやうになつて行かないのがつまらなくもあつた。ほつ／＼暖かくなつて、東京から大勢桃見にやつて來るやうな時分であつた。汽車からは、洋服姿の役人風の男だの、羽織の紐を長く垂らした學生だの、瓢箪を持った白鬚の品の好いお爺さんなどがぞろ／＼下りた。桃は今が見頃だなど、見て來た人達は話した。ある日、玉子は石原に誘はれて行つて見たが、その二三日後には、思ひもかけず保がひよつくり玉子の家を訪ねて來た。

一緒に桃を見に行つた二人は、歸りは川の土手の上を歩いて、下流にある大きな森の社に参詣したりした。途中で二人は町の人達に幾人も逢つた。石原は石原で、『此間は東京からめづらしいお客があつたさうですね』など、意味ありさうに言つた。

變だと思つては居たが、まさかにさういふ心が石原にあらうとは玉子は思はなかつた。ふと氣が附いた時には、石原は何うしても自分の思ひ通りにしなければならぬといふやうな熱い心を開いて見せてゐた。『こ



れがわかれば、僕はもう此處にはゐられないんですからね。……これでも僕が随分玉ちゃんを思つてゐたつて言ふことがわかるでせう。僕の心持だつて少しは買つて呉れたつて好いでせう」といふ風なことを言はれた時には、玉子は何うして好いかわからなかつた。酒にでも酔つてゐる時なら、戯談にしてまぎらして了ふことも出来るが、しらふで言はれたゞけ、玉子は一層困つて了つた。玉子には今まで石原の言つた言葉が皆なある意味を持つて蘇つて來た。自分の身の上を隠さずに話したことなどもつくづく後悔された。だつて、私だつて……それは困るわ。旦那に知れ、ば矢張大變ですもの」玉子がかう言ふより他は仕方がなかつた。玉子はその夜母親に長く手紙を書いた。

そのあくる日に母親の來てゐるのを石原は驚いたやうな顔をして見てゐたが、しかし別に表面には何も出して言はなかつた。『大丈夫ですよ、そんなに心配しないで。私だつて無理なことはしませんから』かう一方では見せてゐながら、一方では耻辱を受けた復讐と離れがたない戀慕とを、眼色と口振とで石原は巧みに示した。

『明日は早く病院の方に行つて來やうと思ふんですがね。手紙でも上げませんか。さびしがつてゐるでせうから……』かう言はれた時には、玉子は氣味のわるい烈しい意思がその裏面に包まれてあるのを發見して、暗い厭な心持になつた。何うかして、一時機嫌を取つて、小林の歸つて來るのを待ちたいと思つた。それに、石原が自分より先に病院に行つて小林に逢ふといふことも氣遣はれた。石原は何を言ふかわからなかつた。玉子はその前に詳しく手紙を書いてやりたいと思つた。しかし石原の手を通してより他にはそれも出來なかつた。

つた。病院には細君がついて行つてゐた。

小林が病院に入つてからは、もうかれこれ一月半になつてゐた。此頃では大分好くなつて、月の末あたりには退院して來られるとは聞いてゐたが、それまで玉子は待つてゐられないやうな氣がした。玉子は石原に言つた『何か貴方考へちがひしてゐるぢやいやですよ。何だか變ね。私は別に何にも思つてゐるやしないんですからね』

『僕だつて何とも思つてゐるやしませんよ。戯談ですよ』

かう笑ひながら石原は言つたが、しかしその眼は矢張何事かを語つてゐた。

『困るねえ』など、母親も言つてゐた。しかしこの場合別に何うすることも出來なかつた。玉子は玉子で『だつて餘りぢやないの。そんな人とは思はなかつた。東京に藝者屋を出させるやうにツテ勧めたのも、さういふ腹があつたからですよ。出來るも出來ないも私の腕だ腕だつて何遍も言ふから私は變に思つてゐたのよ。さうよ、屹度さうよ。自分はかけにゐて、旦那をあやつつて、旨くしやうと思つたのよ。』

『さうかねえ、そんな人かね。』

『旦那が歸つて來れば、私、すつかり言つてやるから好い』

『滅多なことは出來ないよ』

『大丈夫よ』

石原は一晚泊つてその翌日歸つて來た。『大變よくなりましたよ。もう立つて歩けるやうになつたから、退



院もちぎですよ』こんなことを言つて、土産に買つて来た菓子折などを持って来た。別に何とも思つてゐないやうであつた。

しかし玉子は母親からやがて思ひもかけないことを耳にした。それは澤屋から母親が聞いて来た話で、玉子と石原との間はもうとうに出来てゐて、町でも評判だといふことであつた。玉子は驚いて目を睜るやうにした。

『だつて、お前は石原と一緒によく出て来て歩いて何かするつて言ふぢやないか。それから、石原は毎日のやうにやつて来て酒など飲んで遅くまで話して行つたんだつてね』母親はかう言つて玉子の體を探すやうにして、『それからお前、此間は若い人と歩いてゐたつて言ふぢやないか』

『それは保さんよ』

『保さんが来たのかえ……』母親は玉子の方を見て、『自分が潔白だからつて、そんなことをしては評判になるよ。旦那の留守の時には、成たけ氣を附けなくつちやねえ、お前……』

『だつて、私、潔白なんだから』

『世間はさうは行かないよ』

石原の話を小林にして好いものかわるいものか、ちよつと玉子は思ひ惑つた。

『滅多なことは出来ないよ』かう言つた母親の言葉にも道理があつた。世の中は玉子にはまだ解つてゐないやうなものであつた。此儘にして黙つて過ぎやうかとも思つたが、あゝいふことを一度はして置いて、今で

は忘れたやうな顔をしてゐる石原の心の底もはかりかねた。要事が出来てちよつと母親の東京へ歸つて行つた夜は、澤屋の婢に来て泊つて貰つた。

此頃小林の方に益々心の偏よつて行つてゐる玉子は、かうして手紙一本書いてやることも出来ず、見舞にも出かけて行くことの出来ない身を憐みながらさびしく暮した。聞はれた身の辛さなども染々と思ひ廻された。あのやうな人と公然一緒に何處へでも出かけて行かれる身であつたら何んなに合せだらう。こんなことも考へた。一人でさびしいにつけて、一日も早く病院から小林の歸つて来るのが待たれた。

病院から歸つて来たら、石原のことは二の次ぎとしても、かうした不自由な籠の中の鳥のやうな田舎の生活には堪へられないから、早く東京に家を一軒持たせて貰はう。藝者屋を始めさせて貰へば、猶ほ結構だが、都合でさうでなくつても好い。玉子は唯一刻も早く口の煩い、邪魔の多い、石原などいふ厭な男のゐるこの田舎から、二人きりで思ひのまゝの楽しい生活の出来る東京へ行きたいと思つた。小林の繁々遣つて来ないのは、四邊に氣を兼ねてゐるからである。二人だけなら、何んなにでも機嫌を取ることが出来る。かう思つて、玉子は、獨寝の床の中で、嬉しかつたその夜の逢瀬のことなどを思ひ浮べた。色の白い髪、濃い顔などもはつきりと見えて来た。髭と口元の處にある何とも言はれない愛嬌を思ひ出した時には、玉子は體中が火のやうに熱くほてつて行くのを覺えた。

ある日の午後退屈まぎれに澤屋に行つて、姐さんの旦那を相手に、戯談などを言つてゐると、前の格子を透して、車に乗つて、のんきな顔をして、小林が通を通つて行くのが見えた。



「あれ、旦那！」

かう言つて玉子は其處から何も彼も忘れたやうに飛び出して行つた。

此方を見た小林は、「よ、其處にゐたのかえ。今行くよ。ちよつと、郡役所に寄つてから……」

「でも、まア、嬉しい。いつ退院していらしやつたの？」

「今、出て来たばかりだよ」

「奥さんは」

「停車場から一足先に歸した」

「さう」玉子は嬉しさうにして、「ぢや、早くよ、待つてよ」

玉子は胸の躍るほどの嬉しさを覚えながら、何んの彼のと姐さんの旦那に冷かされるのも嬉しく、歸ると

すぐに風呂に水を汲み込ませたり酒の支度をさせたりした。自分は自分で一昨日結つた丸髻の形の崩れかけ

たのを氣にしながら、長い間鏡臺に向つて、鬢だの髪だのを一生懸命に梳いた。それがすむと、簞笥から

派手な友禪の長襦袢を出して着て、好きなお召の一枚着の上に笹の模様の出た帯をキウとしめた。

一時間待つのも長いやうな氣がした。

「何うしたんだらう、旦那は？」かう言つて、玉子はわざと婢を郡役所の方に見せにやつた。

やがて小林は来た。

「随分遅いのねえ」

「これでも早く来たんだよ」など、言つて小林は莞爾した顔を見せた。一緒に來やしないかと思つてヒヤヒヤしてゐた石原の來ないのが玉子には嬉しかった。

「もうすっかり好いの？」

「漸く治つた」かう言つて小林は入院中の話などを何彼とした。「僕がゐないんで不自由だったたらうね。石原はよく世話をして呉れたかえ？ さうかえ？ 母さんが來てゐたのかえ？ さびしかつたらうからな。しかし母さんには氣の毒だった。……さうも思つたよ、病院にも來て貰ひたかつたよ。でも、妻はゐるしね、四邊が煩さいからね」

玉子は染々奥さんが羨ましかつたといふ話などをして笑つた。

「そんな風に思つてゐるのかねえ。……でも手紙は度々有難う」

「私、ね、もつと詳しく書いて上げたいこともあつたんですけれども、石原さんの手からなくては駄目なんでせう。細かいことは書けはしなかつたわ」

機嫌の好い顔をして小林は風呂上りの後の酒を過した。玉子も二三杯猪口を口に當てたりした。言はうか、言ふまいかと玉子はまだ其時まで思ひ惑つてゐた。もう一度母親に相談してからとも思つた。しかし言はずには置かれぬほど玉子の心は男の方に縋つて行つてゐた。

玉子は男の胸に顔を當てながら、靜かに話した。

「さうかえ？」



小林はちよつと顔を曇らせたが、別に驚いたといふ風も見せなかつた。フムなど、言つて唯考へるやうな顔をした。

『石原さん、何か言つて?』

『うむ、ちよつと聞いたことがあるがね——』暫く黙つて考へて、『まあ、餘り氣にかけないで、ソツとして置いてお呉れ、僕にも考へることがあるから。少し考へるから……』

『石原さん、何んなこと言つて?』

『何アに、何でもありやしないよ。ちよつときまわりがわりい、濟まないやうなことを言つてゐたッけ……』

『さう……私のこと何か言つてやしくつて?』

『い、え、別に……』

『なら好いけど、あの人變な人ね』

小林は黙つてまた考へるやうな顔をした。續いて玉子が此間中から考へてゐた話を持出した時には、『それも考へてゐるよ。實際、田舎は煩さいからね。ちよつとしても、すぐ評判に立てられるんだからね』かう小林は言つて、『しかし、まあ二三日考へさせて呉れ……。石原の話もそつとして置いてお呉れ』

その夜はいつもに似合はず、小林は緩くりして、玉子の母親の話や弟妹の話などを何彼とした。染々とした身の上話なども出た。『しかし本當に、こんな稼業をしてゐるのも、お前の一生の上から考へると、損だよ。今の中よく考へて見なけりやいけなよ。好い縁があつたら思ひ切つて身を固めるんですね。僕の友達に欲しが

つてゐる人があるから周旋してやらうか——』後は戯談のやうにして言つた。

『厭なこと、私はそんな移氣ぢやないんですから、これでも——』

玉子は男の胸に顔を押し當て、堅く手を握つた。夕暮から催した細かい靜かな雨は、急に庇のトタンに音を立てるほど大降になつて、戀の唄を歌ひかはしてゐるやうな蛙の聲がそゝるやうに裏の田圃から聞えて來てゐた。『好いわね、今夜は、泊つて行つても……。たまには好いわよ』かう玉子は男に言つた。



十六

足元から鳥が立つたやうに、急に玉子は川縁の町から引上げることになった。病院から歸つた後、小林は四五度も来たらうか、ある日突然かう言ひ出した。『何うも困つた。あの事で石原をしくじらしてしまふのも可哀相だ。長年私の爲めにも、私の家のためにも盡して呉れた男だからね。それに、あいつ、爺に氣に入つてゐるから、仕方がない。お前、何事もなかつたやうに一時此家を疊んで東京の方へ歸つてゐて呉れないか。僕はその中都合を見て、東京で一軒家を持つなり、藝者屋が出来なければ小間物店でも何でも持たせるやうにするから。何うも田舎は煩さくつて仕やうがない』

玉子に取つては、それはかねて望んでゐたやうなものであつた。玉子は一も二なく喜んで承諾した。小林が東京に親類筋になつてゐる老肆の唐物店の話をした時には、『さうね、小間物屋は好いわねえ。藝者屋も好いけれど、面倒で、口やかましくつて、厭な稼業ですからね。さういふ大店に親類があるんなら、小間物屋なんか綺麗で好いわねえ、私、母さんと二人でするわ。父さんは、此間、漸く口があつて役所の方へ出たつて言ひますからね。それが好いわ。母さんとするわ。綺麗な二階がある家か何かでね。そこに貴方がやつて来て泊つて行くなんて、ちよいと昔の繪本などにありさうね。それには、今ゐる處も好いけれど、牛込か本

郷あたりが好いわよ。人形町あたりなら猶好いけれど、あそこいらはちと賑かすぎるわねえ。……でも、貴方が、始終来て下さるかしら。一月に一度か二度ではいやよ』玉子がかねての願ひが漸く達せられたやうに嬉々として、『さうすれば、私、もう貴方のことつきり考へてゐないわ。本當に浮氣なんかしないわ。堅氣になるわ。だって、稼業なんかしてたりすると、何うしたつて、他が放つて置かないんですもの。何うせ、藝者だつて世の中では思つてるのね。さうすれば私、地味につくつてすつかり素人になるわよ。嬉しい』かう言つた玉子の胸には、此間、醬油の出来る田舎町の馴染の客がふと訪ねて来て、二人で何か面白さうに話してゐる處へ、突然小林がやつて来て變な顔をしたことなぞが思ひ出されてゐた。

『貴方、此間のことは、もうわかつてね。疑つてゐては厭ですよ。稼業をしてゐる中は知らないけど、今は本當にそんなことはないんだから……』

『いゝよ、いゝよ、わかつたよ』など、小林は笑ひながら言つた。

『本當に、私、堅氣になるわよ。これから貴方ばかりよ。好くつて?』かう言つて艶な眼色をして、『でも、つまらないわねえ。貴方にはあんな好い奥さんがあるんだから』

小間物店なら、さう大した資本も入らない。それに、少し位店を綺麗にしたつて、このしつかりした確かな後楯があれば大丈夫だ。こんな風にも玉子は思つた。一度潰れた家運もこれで取りかへすことが出来るやうにも考へた。

二三日後には、母親は東京から小さい妹をつれてやつて来て、小林に逢つて、更に細い話を聞いた。母



親も喜んだ。此頃好いことのつづくのも不思議だつた。母親は本屋に行つてゐる定雄が小僧から小賣係の方に廻されたことなどを玉子に話した。始めて一緒に田舎につれて来た妹は、今年十二になつて、丈も大きく、可愛くお下けなどに結つて紅いリボンなどをかけてゐた。「福ちゃんツて言ふの？可愛い兒だね。今に別品さんになりますね」など、小林は言つた。

小林の出して呉れた金で玉子は綺麗に田舎から引上げることが出来た。料理屋を始め、懇意な人達には贈物をしたり暇をしたりして歩いた。「しうく歸ることになつたんだつてね」かう隆口を言ふものなどもあるが、玉子は別にそれを氣にも留めなかつた。石原の細君は、薄々石原との關係を知つてはゐるが、それでも別れる時には涙を流さぬばかりにして停車場まで送つて来た。

静かな川や橋や、川に望んだ明るい座敷や、折角懇意になつた田舎の人達にも別れて行くのが辛かつた。停車場では、玉子は其處で別れて行つた淺田のことなどを思ひ浮べた。

「僕は停車場まで送つて行かないからね、その中行くよ」かう言ふ小林と玉子は其家の上り端のところを別れて来た。昨日は一日荷造りや何かで忙しく暮れた。家を持つ時小林が買つて呉れた道具類は、すべて賣拂つたり人に呉れてやつたりして来た。

汽車が鐵橋の上を通つて行く時には、玉子は窓から顔を出して四邊を見廻してゐた。橋の上には矢張田舎の人達が歩いてゐる。川に臨んだ藤棚は、もうすつかり濃い緑葉になつて、初夏の日が美しく澤の若葉に照り渡つてゐる。玉子は一枚の繪の終りに立つてゐるやうな氣で、過ぎて行つた年月を振り返つて見た。其處に

は種々な人と種々な光景とがあつた。熱い情などもあつた。玉子は其處此處に大勢の人に取巻れた自分の姿を見た。

「お前、荷物はあれで大丈夫なのかえ？」

氣が附くと、母親はこんなことを言つてゐた。お下けに結つた妹は、めづらしさうに野に出てゐる百姓などを指した。麥は黄くなつて、涼しい風は窓から流るゝやうに入つて来てゐた。

家に歸つてからも、玉子は新しい世の中に入つて行く前のやうな氣分で、寧ろ此方から彼方へ行く中の宿を通つてゐるやうな氣分で、彼方此方とよく出歩いてゐた。滅多に行つたことのない叔父さん達の家へも訪ねて行つた。そこには母方の祖母がゐて、「咲ちやんかえ？綺麗になつたね。丸で見違へるやうになつたね」など、言つて喜んで呉れた。玉子は幼い時分のことなどを聞きながら、のんきな心持で、小半日も其處で遊んで来た。

で、かうして十日ほどは玉子は何も考へずにぶら／＼と唯遊び暮した。小間物屋を始めに都合の好いやうな店なども彼方此方と聞き合せて貰つた。父親が聞いて来た神田にある店は、位置はさう大して好くはないが、割合に格安で、現在やつてゐるものをそのまゝ譲受けることが出来るといふ話であつた。其他にも一つ二つ聞込んだ店などもあつた。と、急に、田舎の方から便のないのが玉子には心配になり出して来た。あれから手紙が一本来たばかりで、何の音沙汰もない。こつちから出した手紙にも碌々返事がない。三度も此方からやつて漸く来た手紙では、折あしく町にゴタ／＼があつて、體が明けられなくつて困る。しかし、其



中行くから、もう少し待つて居れといふことであつた。月末には手當を爲替で送つてよこした。

『何うしたんだらうね』など、母親も玉子も言ひ暮してゐた。『私、一度行つて来やうかしら』玉子はかうは言つては見たものゝ、一度引揚げて来た町の人達に今更顔を見られるのも厭であつた。月日は段々経つて行つた。保の家ではまた田舎に行かなければならなくなつたといつて、保がある日わざ／＼暇乞にやつて来たりなどした。玉子は機嫌のわるいはづまない顔色をしてつまらなく一日々々と暮した。

ある日玉子は外から歸つて来ると、上がり端にフランス皮の赤靴とステッキとが置いてあつて、座敷では、母親と客とが何か頻りに話してゐた。

玉子は誰かと思つたが、挨拶するのが面倒臭いので、すぐ茶の間に入つて、長火鉢の前に坐つた。男には似合ない静かな聲で、丁寧を受け答へしてゐる母親の聲の方が却て高くはつきりと聞えた。初めて訪ねて来た人らしかつた。誰だらうと初めは唯思つてゐた玉子の耳は、いつかその中其方へと引きつけられて行つてゐた。後には體がピツタリとそこに膠着して了つたやうになつて耳を飲てた。玉子は俄に烈しい心臓の鼓動を感じた。

『それは構ひませんけれど、あの子が折角楽しんで居りましたことですから……』かういふ母親の聲に續いて、客の細い丁寧な静かな聲が聞えた。

やがて茶をさしに襖を明けて此方に入つて来た母親の顔には、毎もに似合はず激した色が名残なく上つてゐるのを玉子は見た。『お前かえ？今歸つたのは？父さんかと思つた。』母親はかう言つたが、すぐ玉子の傍に

行つて、耳の傍に顔を寄せ二言三言話した。

『さうなの？』

玉子の顔はサツと赤くなつた。體がぶる／＼震へて来た。

『何ういふ人？』

『辯護士か何かしてゐる人らしいよ』母親は低い聲でかう言つたが、茶をさしてから、眼色と顔色で『お前、逢つたら何う？』といふ素振をして見せた。

玉子は頭を強く振つて見せた。

襖をしめて母親の向ふに行つたあとで、玉子は長火鉢の火箸に手と額とを當てたまゝ、凝と深い思に沈んだ。棒か何かで烈しく體を打たれたやうな氣もした。欺された、と思ふと、熱い熱い血が體中に沸き上つて来た。『その中行くよ』と言つて莞爾笑つた小林の顔も眼の前を通つて行つた。『それで手紙も碌々よこさなかつたんだ。』かう思つて玉子は下唇を噛んだ。涙が流るゝやうに頬を傳つて落ちた。

やがて再び入つて来た母親は、『ちよつと逢つて行きたいつて言ふんだよ』

『私、厭！』

『でも、もう歸るつて言ふんだから、ちよつと逢つた方が好いよ』

澁々ながら玉子は母親と一緒に座敷の方へ行つた。玉子は小生意氣な色の白い若い男を見た。別に何も話しなかつた。客の方でしやうとしても此方で受けつけないといふやうな風を玉子は見せた。やがて客は歸



つて行つた。

「一體何うなの？」

長火鉢の前に来る母親を促へて、玉子はすぐかう訊いた。

「別に、さう深い話もして行かなかつたけれどもね。小林に頼まれて来たには来たんだよ。何うも、ちよつと都合がわるくつて、お氣の毒だけれども、お約束したことは出来ないツて言ふんだよ。小林の内の内情などを話して行つたよ。いづれ、小林が自分が出て来るには来るが、何うか、それだけ言つて呉れツて頼まれて来たんだツて言ふことだよ」

「それで何うなの？」

「それについては、お前の身の定るやうにするにはするツて言つてゐたよ。何處か相應な處に嫁にでも行くのなら、支度でも何でもしてやるツて言つてゐたよ。」

玉子はキツとして、

「それを母さん黙つて訊いてゐたの？」

「黙つて聞いてゐるやしないけれど、さういふんだから仕方がないぢやないか。……矢張り、私の言つた通りだよ。町で評判に立てられたことなども言つたよ。」

「何んなことを言つたの？」

「保さんと一緒に桃見に行つたことなども言つてゐたし、小林が来た時に、元のお前の馴染か何か、来てゐ

たことも言つてゐたし……それに、石原も何か言つたらしいね」

「それから？」

「でもね、さういふことを根に持つてゐるんぢやないツて、それは繰返し繰返し言つて行つたよ。私達が家を疊んで此方に来る時には、小林もまだその積でゐたんださうだけれど、家の方が大變やかましくつて、今、切れ、ば金を出してやるが、一緒に家を東京に持つやうなことがあれば、終には小林も家に入ることが出来なくなつて了ふやうな風なんだツて……。そこを間違つて取られないやうにツて、繰返し繰返し言つて行つたよ。しかし、其中、小林は来るには来るんだらう。何だか縣會のことや何かで此頃は忙しいんだとさ。」

母親も氣が抜けたやうにぐつたり言つて、傍にある長煙管を取上げた。

「人を馬鹿にしてるよ」

玉子はかう言つたが、すつと立つて座敷の方に行つた。思つてゐたことが氷のやうに解けて行つて了つたのを玉子は見た。心が急に進み立つて来た。復讐の爲に石原は何を饒舌たつか知れなかつた。玉子には何も彼も今になつて意味をつけて蘇つて来るのが口惜しくもあり腹立しくもあつた。周囲の人達が何の彼のと邪魔をして、二人の仲を割いて行つた様なものだ。母親が心配して暫くしてから行つて見ると、玉子は淺田の置いて行つた机に寄りながら、ほつとしたやうにして庭の方を見てゐた。

「母さん、何故、その時もつとはつきり言つてやらなかつた？ 當人に御目にかゝらなければ、何の御返事も出来ないツて言つてやらなかつたの？」



『それは言つてやつたよ。』

『本當に大きなお世話だ。嫁に行くなら、何んな支度でもさせてやるからなんて、小林は言つたんだらうか。』

『それは言つたんだよ、屹度……。』

『私、欺されたのね』かう思ひ詰めたやうに言つた玉子の眼からは、涙がほろ／＼こぼれて落ちた。何も知らずに、心を任せて置いたのが口惜しいと共に、このまゝ、小林にわかれて了ふのが堪らなく辛いのを玉子は感じた。『私、ちよつと行つて来やうかしら？』

『行つたつて、仕方がないよ。向ふで、さういふ積なら、行つたつて逢ひやしないやね。恥さらしに、笑はれに行くやうなもんぢやないかえ？』

『それもさうね』

蒼白い瘡の高ぶつたやうな顔をして、玉子は頻りに下唇を噛んだ。『お前、そんなに考へ込まないたつて好いやね。その中、小林が出て来るつて言ふんだから。その時、話せばわかるぢやないか』かう母親が言つて聞かせても、矢張玉子は落附いてゐられなかつた。後には深く考へ込んだやうに黙つて坐つて、母親が知らせて行つても、夕飯の膳に向はうともしなかつた。をり／＼堪らなくなつたといふやうに深い／＼溜息をついた。

夜中に母親が眼を覺した時には、明るいランプの下で、蒼白い顔を氣味わるく此方に見せて、玉子は長い手紙を書いてゐた。

十七

度々人が遣つて来たりしても、話は纏まらずに一月二月と経つて行つた。玉子はその後何遍となく手紙を書いたが、その返事はいつも要領を得ないやうなものが多かつた。『その中行く』と書いてはあつても、小林は遂にその姿を見せなかつた。家の人達は早くも事件の成行を豫想した。『お前、そんなこと言つたつて、小林様だつて都合があるつて言ふんぢやないか。ちやんと公然に一緒になつたつて言ふ譯ぢやなし、餘りくよくよ思つたつて仕方がないよ。先様だつて、人まで入れて話しをつけやうとしてゐるんだからね』こんなことを母親は言つた。

『私は何うしても厭！小林に逢つてからでなくつては厭です。』

かう言ふ時には、玉子の顔には神經の昂つたやうなピリ／＼した色が歴々と見えてゐた。絶えず玉子は口惜しさうに下唇を咬んだ。格子を明けて郵便配達夫の入つて来るのを待ちかねて、胸を躍して受取つた男の手跡の封書を見る見る見るピリ／＼破いて棄てたりした。蒼白いヒステリックな顔は、狭い家の中に常に際立つて見えてゐた。

玉子の心持が母親には不憫に思はれた。思ひ詰めた若い女心をかねて知つてゐる母親は、つとめてそれ



を慰めるやうにした。成べくその話を避けて、芝居や物見遊山の面白い話などをして聞かせた。「何も、そんなにくよくよするには當らないよ、お前。世の中は廣いぢやないか」母親がかう言ふと、「私も、何にもくよくよなんかしてやしないわ。母さんには私の心なんかわかりやしない」かう投げるやうに言つて、玉子はつまらなさうに外の方へと出て行つた。

くさくさして髪を梳く氣にもならず、一日浴らないでも氣持がわるいと言つた湯にも行かず、氣分がわるいと言つては、亂れた髪を此方に見せて、終日床の中に入つてゐることなども尠くはなかつた。さういふ時には、厚い古い小説本などに讀み耽つて、自分の身につまされるやうな女の心持に引くらべて、獨りで歎け居たりなどした。

「少し三味線でも弾いて御覽な」かう母親に言はれて、機嫌の好い時には、袋を外して、こまをはめて、一つ二つ好きな都々逸を爪弾で弾いて見ることもあるが、唄の文句が一々身につまされるといふやうな風で、玉子はすぐ三味線を下に置いた。溜息がつゞいて出た。

「穴守の叔母さんの處へでも行つてお出でよ」

餘り詰らなさうにしてゐるのを見兼ねて母親が言ふと、「行つたつて、詰らない。……叔母さんの顔なんか見たくもない。……」かう玉子は素氣なく言つて、「私も病氣にでもなつて、早く海岸にでも行つて死んで了ひたい。そしたら、可哀相だと思つて呉れる人もあるから」玉子はいつか讀んだ小説の中に其身を置いてゐた。

ある日、茶の間で新聞を見てゐた玉子は、突然に言つた。「ま、染次さんが情死した！」  
「誰が？」

勝手元にある母親は驚いて此方に来た。「染次さんツて、そら、母さんは知らないかねえ、常盤屋の抱妓よ。私、仲が好かつた人よ」かう言つて、玉子は其處に書いてある半段ばかりの悲惨な記事を見た。玉子の體は震へて來た。

「何處でだえ？」

「あの千代本ツて言ふ待合でだよ」

玉子は其奥の一間をよく知つてゐた。血塗れになつて二人で苦しんで死んでゐる處に入つて行つたお元さんの吃驚した顔なども眼に見えるやうな氣がした。玉子はゾツとした。涙が流れて來た。

銀行に出てる人と云へば、玉子も餘所ながら知らぬでもなかつた。男の方はその日の夕方まで生きてゐた。女は其時既に見事に死んでゐたと書いてあつた。玉子は新聞に顔を押當てたまゝ、長い間黙つて坐つてゐた。歎ける度に、髻のところが微かに揺れた。

「一緒に死んで呉れる人のある染次さんは仕合せだ」かう思ふと、玉子は堪らなくなつたやうに聲を立て、泣いた。

「何だえ？お前、新聞を見て泣いてゐるのかえ？」

「だつて、母さん、思ひ合つた仲ですもの。あの時分でさへ、それや仲が好かつたんですもの。羨ましい位



だつたのよ』

玉子の眼には色の白い丈の高い洋服姿のよく似合った若い銀行員と、丸顔の愛嬌のある髪の濃い染次の姿とが歴々と見えた。染次は其時分でも大分無理な逢瀬を重ねてゐたらしかつた。死ぬ氣になつた前の夜の逢瀬などを玉子は想像した。

『でも思つた人と一緒に死んだんだから好いわ。』かう言つて玉子は又歎歎けた。

『お前、此頃、餘程何うかしてるよ。』かう母親はたしなめるやうに玉子に言つた。母親の眼には、此頃の玉子の状態が常に心配の種になつて映つて見えてゐた。ひどく神経性になつて、ちよつとしたことにもすぐ涙をこぼすかと思ふと、厭に氣味のわるいほど、はしやいで面白くもないことに聲を擧げて笑つたりなどした。その日も一日眼の縁を赤くして、時々思ひ出したやうに涙を袖で拭いてゐた。

それから二三日経つたある日の午後、玉子は田舎から来た手紙を受取つたが、何と言つても夫を母親に見せなかつた。玉子は唯黙つて蒼白い突詰めたやうな顔を見せてゐた。それは田舎から別な人が来て、愈々別れ話がきまつて、金の額などの持出される頃であつた。夜になつてから、『お母さんちよつとそこいら涼んで来ますよ。福ちゃんをつれて行くよ』かう言つて、玉子はいつもの通り何事もないやうな顔をして出かけて行つた。

曇つた蒸暑い夜で、降りそびれた夕立でも俄にやつて来さうな空であつた。星は一つも見えてゐなかつた。出かけてから十分ほどすると、妹は驅け出して歸つて来て、『姉さんの紙入が箆筒の上にあるから頂戴して』

何とも思はず、母親が取つてやつた紙入を持つて妹はまた驅け出して行つたが、待つてゐると言つた路の角に玉子の姿が見えないので泣きさうになつてお福が歸つて来た時には、母親はもう箆筒の上に置いてあつた書置を見て、狼狽て、家を飛び出さうとする處であつた。

『何方へ行つたえ？』

かう言つた母親の眼は血走つてゐた。

『え、何だと……』

父親も奥から聞附て飛び出して来た。

小さい妹は泣きながら話した。『あそこんとこで待つてゐるからッて姉さんが言つたんですよ……。そら、あそこんとこですよ。電信柱のあるところですよ』

『お前さんはレール路の方へ行つて御覽なさい……。まだ、今、行つたばかりだから。私は海岸の方へ行つて見るから。』かう母親は父親に言つて置いて、急いで通りを向ふの方へ驅け出して行つた。

眞暗な闇の中を母親は唯夢中で走つて行つた。何う通りを抜けて、何う橋をわたつたか母親は知らない位であつた。母親は逢ふ人ごとに訊いた。

『今、此處を丸鬚に結つた若い女が通つて行きやしなかつたでせうか』

見たと言ふものもあれば、見ないといふものもある。しかし、何うしても此方に行つたに相違ない。かう思つて母親は夢中で驅けて行つた。



氣が附くと、海軍の學校の寄宿舎が何か、其處にあつて、その側を通つて、細い路が海の方に行つてゐる。眞暗だ。波の寄せる音がサツと微に聞えて来る。

行きかけて引返した母親は、其處にゐる門番に訊いた。年を取つた門番は言つた。

「あゝ、さう言へば、もう少しさつき其處を浴衣を着た丸髷の若い女が歩いてゐたよ。ぶら／＼行つたり來たりしたから變だと思つてゐたよ。」

「此方へ行きませんでしたか？」

「さア、それはわからない」

「しかし、此處は此方に行くより他に路はないんですね」

「一體、何うしたんです？」

かう言つて門番は出て來た。

詳しいことを話してゐる暇はなかつた。母親は急いでその暗い路の方へと行つた。見ると、其處は土手になつてゐる。母親は急いで登らうとして躓いて轉んだ。ポツ／＼落ちて來てゐる夕立は、此時篠をつく様に烈しくサツと降り出した。

海が微白く前に見えた。

「さつき來てゐたものなら、もう飛込んで了つてゐる。」かう思ふと、母親は氣が氣でなかつた。遠い海の波の中に、玉子が浮きつ沈みつして苦しんでゐるのが眼に見えるやうな氣がする。で、雨の降り頻る中を、夢

中で、土手の上の上つては見たが、自分一人の力では何うすることも出来ないの、引返して、門番にでも力を借りやうと思つて、土手をまた下に下りかけると、其處に門番はランタンをつけて遣つて來てゐた。

「何うかして下さい」

母親は思はず叫んだ。

「りましたか？」

かう言つて門番は土手を飛越えて上がつて來た。身投があつたと聞いた生徒達は、あとから二三人降り頻る雨を衝いて此方へとやつて來た。

「りましたか？」

「飛び込んだか何うしたかわかりませんが……」かう言つた母親は、其處に見覚えのある玉子の駒下駄の轉がつてゐるのを薄暗いランタンの光に見て、急に聲を立てた。「あ、飛込んだんですよ。此處に下駄がある。この下駄は娘の下駄です。何うかして下さい、早く……」

あとから來た生徒は、これを聞くと、ヅカ／＼と海の方へと走つて行つたが、暗さは暗し、土砂降りに雨は降るし、波打際もはつきりとはわからないやうな始末で、何うすることも出来なかつた。生徒達はやがて引返して來た。

「船、船はないでせうか？」

母親は狂氣のやうに言つた。



しかしその近所には船はなかつた。たとへあつたにしても、この風雨に船を出すことなどは出来なかつた。

『それにしても本當に飛込んだんだらうか』

『飛込んだんですとも……』

『それにしちや何か見えさうなもんだがなア。何にも見えなかつたよ。白いものも何も見えなかつた』波打際まで行つた一人の生徒はこんなことを言つた。

『でも、この暗ぢや、たとへ飛込んだにしても見えやしないだらうけれど……』

『それはさうだな』かう生徒達は言つた。雨がまた一しきり盛に降り出して來た。

ランタンの薄暗い光を掠めて、太い雨の脚は白く闇の中に見えてゐた。すぶ濡れになつた母親の丸髷からは、雫がほた／＼と顔に落ちてゐた。

『何うも仕やうがないね』

『これぢや仕やうがない』

生徒の一人は下駄を取つて見て、『片方きりないね。片方は何うしたらう。』あたりを見廻して、『あ、此處にある。……門番、ちよつと明りを見せろ、あ、此處に櫛がある』

飛込んだに違ひがない、といふやうに誰にも思はれた。母親はまた海の方を見た。波の打寄せてゐるのが、微白く見えた。

『警察に届けて貰ふんですね、仕やうがないから』

『何うも仕やうがない』

氣の毒だといふ風に誰の顔も見えた。

『何うしたんです一體？』など、生徒の一人は訊いた。

母親の胸は迫つて來た。自分が苦勞して今まで育て、來たことなども思ひ廻された。あの子を手離すのが可哀相なばかりに、見込みのない夫に附いて來たことなども考へられた。涙がほろ／＼落ちて來た。

しかしかうしてゐても仕やうがなかつた。皆は土手を下りて門のところまでやつて來た。生徒の一人は橋の處にある交番に行つて届て呉れたりした。

丁度その頃、玉子はその一つ向ふの橋の通りの暗い軒下に身を寄せて、濡れた衣服を絞つてゐた。玉子はふと目が覺めたやうな氣がした。自分のやつたことが何ういふことで、何ういふ氣で自分は其處に行つたかと言ふことを、翻つて考へて見てゐた。手紙を見てくわつとなつたやうな自分が其處にゐた。妹をまいて一散に暗い小路の中にまぎれ込んで、そこから夢中で海岸へと行つた自分ゐた。確かにその時は死ぬつもりでゐた。體中はくわつとして自分でも自分のことがよくわからなかつた。玉子は下駄をぬいで波打際に走つて行つた自分を見た。染次のことなどを玉子は頭に浮べてゐた。海は微白く闇の中に見えてゐた。急に玉子は恐ろしくなつて來た。夕立がその時サツと降つて來た。この夕立にはつと氣が附いたやうな自分を玉子は見た。と、同時に、後の土手あたりで人聲がした。玉子は恐ろしくなつて一散に遁けて來た。夢中で、跣足で、雨の降り頻る中を……。







惨めさが歴々と眼の前に映つて見えた。此時ほど玉子は深く自分の身を可哀相に思つたことはなかつた。無邪氣に天王山に行つて遊んで暮した時分のことだの、崖の處に咲いてゐる赤い椿の花を取らうとして其處から轉がり落ちたことだの、かうした辛い世の中があるとも知らずに、其時分は無邪氣に遊んでゐたといふことだのが、物心がついてからの濃い淡いさまざまの影と一緒になつて、縫れ合つてこんがらかつて、ほつとした玉子の頭を通つて行つた。「私なんか、私の體なんか、何うなつたつて構はない。」かう思ふと、また熱い涙が烈しく胸に堰き上げて來た。

しかし昂奮した後の疲勞はやがてやつて來た。寄宿舎に行つて、お禮の菓子などを置いて母親が歸つて來た時には、玉子は蒼白い顔を此方に見せて、スヤ／＼と靜かに落附いて眠つてゐた。入らうとした足をそつと茶の間の方に戻して來た母親は、「好い鹽梅だよ。靜かに寝てるよ。ソツとしてお置きよ。」茶の間では、皆な靜かな聲で話した。それとも知らずに、丁度其處にやつて來た宗太郎は、話を聞いて眼を丸くして驚いて、ソツと座敷の方を覗いて見た。

「好い月夜になつたなア」外ではかう言つて通つて行く人の聲がした。

心の激動と急に出て來た熱とで、玉子は翌日も床から離れることが出来なかつた。うつら／＼と唯だ眠つてばかりゐた。「母さん」時にはかうなつかしさうに呼んで、何も言はずに、其處に來た母親の手を堅く握りしめた。蒼白い頬には涙が流れた。

「氣分は何うだえ？」

「もう何ともありませんよ」。母さんに心配をかけて濟まなかつたといふ顔をして、さびしく玉子は笑つて見せた。

「お前、熱が大變あるね」

「さう？」

かう言つて、またすぐ眠つて行つた。醫師がやつて來た時には、ばつちりと眼を明いて四邊を見廻した。

「なアに、大したことはありません。少し熱がありますけれど、他には心配するやうなことは御座いません。

ちつと落附かせて寝かして置きなさい。神経で、頭を少しわゆるくしてゐますから」茶の間に來てから、醫師はかう母親に言つた。

「でも、何うしてあゝよく寝るでせう？ 始終うと／＼してゐるのが心配になりますか——」

「何アに、ちつとして置けば差支はありません。體も頭も勞れてゐるんですから」

それは丁度午後の三時頃であつた。母親はすぐ薬を取りに行つて歸つて來て、これから昨夜の汚れた衣服でも洗はうかと思つてゐると、そこに格子の明く音が靜かにした。

出て行つた母親は、はつと胸を躍らした。其處には、小林と此間來た人とが一緒に立つてゐた。玉子に逢はせて好いか悪いかといふことがすぐ母親の胸をついたが、斷る譯にも行かないので、母親はそつと茶の間に通して、手短かに昨夜の出來事を話してきかせた。

二人は流石に驚いたといふ風であつた。持つて來た話を話し出す譯にも行かないといふやうに二人は顔を



見合せた。まさかそれほど迄とは小林も思つてゐないらしかつた。つい今此處に来る途中でも「あゝいふ女はまた別ですよ。實は君が顔を見せない方が好んだけれど……」。何アに、いくら手紙にはそんなことが書いてあつても、それが手見たいなもんですからな』かう一緒に來た男は小林に言つた。二人はまた顔を見合せた。

「寝てるんですか」

暫くしてから、小林は小聲で訊いた。

やがて小林は玉子の寝てる座敷の方へ行つた。小林の顔を見たら、また昂奮して困るだらうと思つてゐた母親は、丸で異つた光景を其處に見た。母親は不思議な氣がした。玉子は眼を明いて小林の方を見たが別に驚いたやうな風も見せなかつた。唯微にさびしく笑つて見せたばかりであつた。小林の方が却つてどきまぎした。

『つい、忙しかつたり何かしたもんだから……本當に濟まなかつたよ』

『いゝえ』

かう言つて玉子は唯凝と小林の顔を見た。

何も彼も過ぎ去つてゐた。不思議なほど自分の心の落附いてゐるのを玉子は見た。何の關係もないやうな日常の話を二言三言言つた後で、玉子はまたうとくした。

『まア、ソツとして置く方が好う御座んすね』かう言つて小林は手持無沙汰といふ風で、やがて其處から靜

かに出て來た。で、縁側を通らうとすると、其處にゐた母親は、「あれが昨夜の衣服ですよ」と小聲で言つて指さして見せた。軒端の竿には夥しく泥に塗れた中形と帯とがかけてあつた。



## 十八

あくる年の春頃から再び濠端に姿を見せた玉子は、何んな小さな待合へでも出かけて行つた。「雪江さん、雪江さん」かう調法がられて、到る處から電話をかけてよこした。

「雪江さん、奥の離座敷よ」

かう女中に言はれて入つて行つたその室から、一時間も経たない中に玉子は出て、いつか別の座敷に行つてゐた。かと思ふと、長襦袢のまゝで廊下の隅の電話口へ出かけて行つて、「あ、さう、もう明いたわ。すぐ行くつて置いて頂戴」など、言つた。

「今夜、貴方泊つていらつしやる？ちや、待つて、頂戴よ。好いぢやないの？ちよつと行つて来さへすれば好いんだから。すぐ来るわ。一時間位よ。その間、これが私よ」玉子はこんなことを言つて、強い麝香の匂ひのする紙片を男に渡した。で、急いで帯をしめて、紙入を挟んだあとを軽く叩いて見て、狭い薄暗い一間から廊下の方へ出て行つた。

ある一間では、「貴方、ちやんと知つてよ。隠したつて駄目よ。秀子さんがあの時すつと出て行つたから可怪しいと思つたのよ。隠しごととは出来ないわねえ。もうこれからその積でゐるから好い」など、言つて、

わざと體を寄せて男の手を堅く握つた。

ある時ある待合に入つて行つた時には、帳場にゐた女將が指を出して笑つて、ある形をして玉子に見せた。「さう？」と玉子は言つたが、長火鉢の前で酒を飲んでゐる女將の情夫の中年の男には見向きもせず、そのまゝすうと廊下の方へ出て行つた。

其處にゐた女中に、

「さう？あの人とあの人？何方？萩？菊？二階？いゝわよ、ちや、ちよつと出てるからとか何とか言つて誰か聘んで置いて頂戴よ。さう？困るわねえ。行くまでは待つてゐるつていふの？誰れも来ないでも好いつて言ふの？好かないわねえ。ちや待たしてお置きよ、構はないから。」

かう言つて玉子は下の方の六疊の一間に入つて行つた。

一時間ほど玉子が其處にゐると、「雪江さん、ちよつと電話」かう女中の呼ぶ聲が外から聞えた。

「今行くわ」

廊下に出て行くと、「困つちやうのよ。もう歸るつて言つてゐるのよ。まだ明きさうもない？」

「もう好いのよ。今すぐ行くわ」

二階を上つたり下りたりする玉子の姿は、暫し明かるい電氣の下に見えてゐた。やがて初めの客の歸つて行く氣勢がして、「今度はいつ入らつしやるの？お近中ね、屹度よ」など、いふ玉子の聲が聞こえた。

時間過ぎになつてから、ある家からある家へ行くやうな時には「待つたでせう。姐さん達が三人も四人も



來てゐて、中々明きさうにもしないんですもの。私、気が氣でなかつたわ。でもよく待つてゐて下すつたわねえ。……本當に今日は退屈しちやつた。姐さん達が、大勢來て騒ぐお座敷は厭ねえ。『こんなことを言つて、水差とコップの載せてある盆の傍の敷島を一本取つて、落附いた風で靜かにふかした。朝は日さしの高くなつた時分に起きて、長襦袢のまゝで湯殿に行つて、長い間かゝつて髪を直して、それから客と一緒に近所の料理を取つて食つたりした。』男なんて、薄情なもんよ。私、染々さう思つたことがあるんですもの。それに、男でも女でも何方でも思つた方が負ね。かう言つて玉子は笑つた。

山の下の路を通つて緩い坂を上つて行くやうな處にゐる客は、上野の秋の展覽會に賞牌を得たやうな若い洋畫家であつた。二三度逢つたばかりなのに、稻毛の海岸になど作れて行つて呉れた。『僕の家遊びに來ないか。誰もるやしないよ。婆さんが一人ゐるばかりだよ』度々かう言ふので、ある日、玉子は雪助と一緒に出かけ行つて見た。取次に出た婆さんが引込んで行つて、何かごとく言つてゐると思ふと、『あ、よく來たね』かう言つて洋畫家は、つころはないほさくした髪をして、玄關の次の間の襖を明けて出て來た。

『まだ寢てたの？ 随分寢坊ね』

隣の間にある寢道具をちらと見た雪助がいきなりかう言ふと、

『昨夜遅かつたからね。三時だつた、歸つて來たのは。まだ、眠むいよ』眼をこすりながら、『二時頃、あの雨だらう。それも出かけて來てから降られたんだからね。電車はなしね。あの通りさ』其處の長押に無雜作に引かけてある處々に泥のついた衣服の方を見た。

『昨夜、雨が降つたかしら』

『降つたわよ』

『さうかしら？ ちつとも知らない』

『旨く寢込んでゐたんだらう。僕がびしょ／＼ぬれて歩いてゐる時分は、誰かと好い思をして寢てたんだね』笑ひながら畫家が言ふと、『さうぢやないけども……。さうかしら、降つたかしら、私、餘ほど寢坊と見えるわね』玉子は笑ひながら男の方を見た。

『本當に貴方と婆やつきり？』

『さうさ——』

『私、來て上げたいわね。好くつて？』畫家が畫室の方に行く跡について行きながら、『あ、此處で描くのね。寫眞屋さん見たいね。明らいわね。あ、裸の繪がある』かう言つて玉子はそこに立てかけてある大きな裸體畫に眼を附けた。『何してるところなの？ これ？ 池の縁ね？』後を振かへつて、『あ、此方にもあるわね。裸の繪ばかりね。何うしてこんなに裸の繪ばかり書くんでせう？』

ある夫人の肖像畫の前に立つて見てゐた雪助は、『これは好いわねえ。雪江さん。好く描けてゐるわね。丸で生きてるやうね。』かう言つて凝と見て、『かういふ奥さんがゐるんでせうね』

『それはさうよ。毎日來て、坐つて書いて貰ふのよ』ちよつと途切れて、男の方を見て、『皆なモデルがあるのよ。裸でも何でも皆なさうよ。一時間いくらで裸になつて坐つて行く女があるのよ』



「何處に坐るの？さういふ女が来る時には？え、貴方？鈴木さん？此處？其處？」雪助はおどけた調子で、  
 「貴方と二人きりで、一時間もこんな處にゐてよく危くないわねえ」  
 「危ないことがあるのよ」

女達の饒舌るのをやゝ笑つて聞いてゐた畫家は、風景畫だの肖像畫だのを澤山彼方此方から出して  
 見せた。寫生帖にはいろ／＼に其時／＼の人物の態度を寫生したものなどもあつた。繪を一枚／＼見て行つ  
 た玉子は、ふと藝者を描いた一枚の繪に眼をつけて、

「これ、誰か見たやうね」  
 「どれ？」

雪助は顔を其方に向けたが、「お前さん、それは照香さんぢやないかえ？」

「わかつた、わかつた。」玉子は面白さうに手を拍つて、「照香さん、此處に来るのねえ。わかつた／＼。随分  
 ねえ、貴方は？好いわ、そんなら、その積でゐるから」畫家は黙つて笑つてゐた。

「裸體畫はなかつて？」

「いくらもあるぢやないか、其處に……」

「いゝえ、照香さんのよ」

「馬鹿を言つてら、そんなものはないよ」

「あるのよ、屹度。隠して置くのよ。憎らしいねえ、雪助さん」

「昔のことだよ、それはもう……」

「いつの昔？此間、變だと思つたことがあつたのよ」

「もう好いぢやないか、そんなこと」

その日は一時間ほど遊んで歸つて来たが、一月後には、玉子は度々其度に出かけて行く様になつてゐた。  
 夕方に出かけて行つて一緒に角の待合に併せて来た。畫家の寫真帖に、玉子の横顔だの、後姿だの、正  
 面の顔だのが澤山に描かれる頃には、「此位で好いの？」など、言つて低頭き加減にして、玉子は三十分黙  
 つて坐つて居た。「照香さんも、矢張かうして書いて貰つたのね。貴方と二人きりだから何をしてゐたかわか  
 りやしないわね」など、玉子は言つた。畫家の口裏から判じて見ると、照香は裸體のモデルを勤めたことも  
 あるらしかつた。「いやなこと、私は照香さんぢやないんですからね。いやなこと」など、玉子は言つた。畫  
 家は畫家で、「君のも一枚記念の爲めに本當に書いて取つて置かうか」こんなことを言つて、眞面目に繪の具  
 を畫板に塗つた。

面白い稼業もあるものだなと、玉子は思つた。懶惰で放縱で、いつ行つて見ても、酒を飲んでゐたり寝て  
 ゐたりすることが多いと思ふと、時には玉子が訪ねて行つても相手にしないほど眞剣になつて、繪具を塗つ  
 てることなどもあつた。金離れが綺麗で、ちよいと見ては何處かの書生か何ぞのやうな構はない扮装をし  
 てるながら、十圓や二十圓の金は何とも思つてゐないやうにすん／＼出した。待合の勘定も綺麗に拂つて行  
 った。



不思議にも客の金の拂ひやうなどが此頃玉子に飲み込めて来てゐた。「あのお客はもう縁が切れたよ」などといふ女將の言葉もわかつて来てゐた。「あのお客はもう長いことはないよ。用心してお出でよ」かうある女將から言はれた客は、果して次第に足が遠くなつて行つた。「急に澤山つかうやうになつたら、此方でも用心しないと、ひどい目に逢ふよ。」かう姐さんの言つた言葉が成ほど、點頭けたやうな時には、玉子はもう少しで警察に招かれて行く處であつた。「さうなの？あのお客さん、そんな人でしたの？さう言へば、何處か調子の變なところがあつたにはあつたけれど、まさかと思つてゐましたよ。さう？榮さん、呼ばれたの？よかつたわ、私、早く手を引いちやつて。今頃まで聘ばれてゐれば、私もさういふ耻しい思をしなくつちやならなかつたのね。さう？榮さん一晩留められたの？そんなことを言はれたんですか？お金を貰つたら、すつかり吐出せつて？刑事さんに？いやねえ。」かう玉子は言つて思ひ出すやうにして、「何うして、そんなことをしたんでせう？矢張つかひ込み？会社の金を餘程つかつたらしいの？あの人も行つてゐて？さう？何んなでせうね、いやね。」玉子の眼の前には、暗い警察の留置場の一間が見えた。若い色の白い會社員と榮といふ加賀屋の抱妓とが一所に並べられて無慘な調べを受けてゐるさまも歴々と見えた。話してきかせた女中は、「それでも私の家では、あのお客は二三度来たばかりだから、すぐわかつて何でもなかつたけれど、金寶亭では、何でも大變らしいよ。あそこのお鶴さんが矢張来てたよ。」おい、これ、白狀せんか」なんて、あのお客ギウギウ言はせられてゐたよ」

「榮さん、何んな顔をしてゐて？いやだわねえ。」玉子は顔を曇らせて言つた。

玉子の肖像がその青年畫家の畫室の一隅に置かれる時分には、玉子のよく出かけて行くレストランの卓の上にアネモネの花が鮮かに咲いてゐた。夏がまた来てゐた。下の球突場には、客が二三人来てゐて、いつも賑かな聲がした。

ある夜、若い二十七八の色の白い役者のやうな男と一緒に其處から出て来た玉子は、

「話しがあるのよ、今日少し……」

「何んな話だえ？」

「あつちへ行つてから話すわ。あそこに行くわね」

「昨日の今日だからね」

「なアに好くつてよ。構ひやしないわ」

で、二人は纏れるやうにして、いつも行きつけの待合の裏から入つて行つた。お増といふ上州生れの唇の厚い髪の薄い女中は、「誰れかと思つたら貴方？今日は女將さんお留守よ」

「何處へ行つたえ？」

女中は笑つて小指を出して見せた。

「フム」

など、男も笑つて、取ツつきの六疊へとヅカ／＼入つて行つた。

「矢張そこが好いの？」



「だって、此處が一番静かで好いよ。向ふとかけ離れてるて、ね、雪ちゃん」  
女中が出て行つた後で、玉子は、

「貴方妬けて？」

「何が……」

「しらばつくれてるよ、貴方は？」跡を言はずに玉子は聲高く笑つた。

「だって、何が嫉けるんだかわからない」

「仰有しやいよ。ちやんとわかつてるますよ。お上さん、あれでいくつだと思つて？」

「何だ、それを言つてるんですか。男は大きく笑つて見せた。そしてあとは女が何を言つても、相手にせず  
に唯笑つてゐた。

女中が来て、キヤツ／＼騒いで行つたりした。「二階に来るのは誰？秀香？ちやお客はあれだらう」男は  
顔でしやくつて見せて、「あれでもちつとは金があるのかしら。華族は華族でも、貧乏華族だつて評判だかな。  
秀香の方で惚れてるんだらう」

「矢張氣になると見えるのね」女中はかう言つて手を拍いて笑つた。

「貴方も餘ほど審ね。……少しは女といふものゝ心を汲んでおやんなさいよ」

玉子が、う言ふと、

「でも、秀香には閉口した。」

「あんなことを言つて？秀香さんは情がありすぎるの何のつて言つてゐたぢやありませんか。君のやうぢや  
ないなんつて言つてた癖に」

「それが厭だつて言つたんぢやないか」

「仰有いよ」

玉子は打つ眞似をした。

二階からはやがて三味線の音が聞えて来た。便所に出かけて行つた玉子は、「照吉姐さん今上つて行つたわ」  
かう言つて徐かに入つて来た。枕屏風には藤原時代の男女の色紙形の小さな繪が處々に張つてあつた。

「話つて何だえ？」

「何でもないの」かう言つた玉子は、わざと甘へるやうに男の傍に寄添つて、「本當に何でもないのよ？唯、  
ちよつと」

「何うしたんだえ？」

「話ませうか、此間の話ね、そら、あのお客の話よ、大變向ふで乗つて來てるのよ。」

「此間のお客つて？何方だえ？」

「稻垣の方よ」

「フム」

「私、成るだけさうならないやうにしてるんですけどもね」



「でも麻布の大杉ツて言へば、中々幅が利く方だよ。世話になれば好いぢやないか」

「また、あんな事を言ふ？ 好かないわねえ。さうぢやないんですよ。だから、貴方に相談するんぢやないの？」

「そして向ふでは何う言ふんだえ？ 世話をしやるツて言ふのかえ？」

「まア、さうねえ」

玉子は吸ひかけた敷島の灰を傍にある灰吹きに落して、「いろんなことを言つちやいやよ。本気で言つてるんですから。私、此間、少し加減がわるかつたでせう。と、お前體がわるいのに、こんな稼業をしてるのは可哀相だ。少し保養した方が好いよ。なんなら何うかしてやつても好いつてかう言ふのよ。お金はあるらしいわね」

「少しはあるだらう。護謨か何かの會社を持つてるから」

「借金のことなども聞くのよ。私、そんなに望んではるないんだから、好加減には聞いて置いたけれど……」

「此頃考へて來たツて言ふんだね……」

「さうぢやないのよ。ちよつと、貴方に話して見るのよ」

「好いことぢやないか」

「でもね、何うせ長持なんかしないには決つてるわ。此方がいくらかでも好いと思つてるんなら、未始終のことを考へて行く氣になるけれど、何うせ駄目なのはきまつてるんですものねえ。圍ひ者なんて、それはイヤなものよ」

男は考へるやうにして、「引かせて、立派に家まで持たせてやるツて言ふんだね」

「まア、さうなの」

「いつ頃から出てゐるんだえ？」

「つい此間よ、まだ五六度しきや逢つてはしないわよ。」

「えらい腕だねえ、矢張すぐ引張られて了ふんだねえ」

「またあんなことを……」

吸ひさしの巻煙草を男の顔にちよいと押附ける眞似をして玉子は笑つた。

「そして何んな人だえ？ 一體？」

「お爺ぢやんよ」

「お爺ぢやんはわかかつてゐるけれど、これまでに遊びになど餘り來なかつたやうな人かえ？」

「まアさうね。……いやに窮屈な人よ。お酒を飲むと、それでもちつとはまづい長唄なんか唄ふけれど、お座敷にゐても餘り膝など崩さないツていふ方ですからね。遊んだことはない人でせうね」

「いつも一人きりで來るの？」

「え、」

「君の爲めから言へば、しかし、本當に好いことぢやないか」男はいくらか眞面目な聲で、「それは、末の見込ツて言ふことから言へば、わからないやうなもんだけれど、兎に角、そんなお客は今時分滅多にありやし



ないよ。君の爲めには、一時でも好いからさうして貰つた方が好いね。……しかし本當にさう言ふのかえ？」  
『それは本當よ』かう言つて『しかし、私考へるわよ、もう少し。それに、もし、さういふことになつた  
にしたところで、貴方と別れて了ふことなんかイヤですからね。貴方はそれでも好い？私さういふ風にな  
つても、貴方は私を捨てない？それを聞かして頂戴……』  
男はちよつと考へて、

『でもね……他人に圍はれちやつてはねえ』

『そんな女は厭だつて言ふの？』

『さうぢやないけれど、何だか變ぢやないか。』

『ちつとも變なことなんかないぢやないの？私は金で買はれて行くんですもの。私が貴方を思つてさへすり  
や好いぢやありませんか？それで、向ふで厭になればやめるだけのものだわ』

『圍はれちやさうは行かないだらう』

『行かないことなんかありやしないわ。いくらもあるぢやないの？さういふ人は？私だつて、貴方がそんな  
ことは厭だつて言ふなら、無理に行くつて言ひはしないわよ。やめるわよ。でも、私構ひやしないと思ふ  
わ。行つたつて、今と同じやうにしてゐるわよ。何時でも日をきめて逢ふわ。』女はちよつと途切れて『私だ  
つて、貴方でもゐなけりや、あんなお爺ちやんの機嫌なんか取れやしない。それに、私考へると、かうし  
て澤山のお座敷をしてゐるよりか、さうする方が好いと思ふわ。お金だつて、さうすれば、今よりは融通は

さくし……體も樂だし……。何んな面白い眞似でも出来るぢやないの？』

『それはさうだね』

『今ぢや、抱妓だから、いくら拵いだつて駄目よ。姐さんの機嫌、好い顔を見る位のもんですからね。……』

しかし、達つて言ふ譯ぢやないんですよ。まだ母さんにも誰にも話さないんですから』

『母さんに話して見給へな』

『え、話して見るわ。けども、貴方の心を聞いてからと思つたのよ』

『僕はしかし何うでも好いよ』男は笑つて『その方が好いかも知れない。君の爲めには少くとも好いね。僕  
が女房でもなくつて、金でもありや、かういふ時には、男の意地で大騒ぎをするつていふ幕なだけだね  
僅かな月給を取つてゐる身ぢやさういふことも出来ないからね。』

『また、あんな厭味を言ふ。好う御座んすよ。さうなりや私なんかなくなつたつて、秀香さんとも誰とも  
思ふやうなことが出来て、結局好いんでせう』

こんな話が長く續いた。廊下を通る女中は静かに睦ましさうな話聲が其處から洩れて來るのを聞いた。一  
階では照吉姐さんの錆びた端唄の聲が静にしてゐた。

『ね、さうしませうね。暫くしてから急にかう言つた玉子の聲ははしやいで嬉しさうに聞えた。それが面白  
いわ。こんな處で逢つてゐるよりかね。さうすれやね、何處か静かな海岸へでも何處へでも行けるわね。先  
だつて毎日來てるつていふ譯ぢやなし、本宅もあつて、忙しい體なんだから……。本當にね、さうしたら、



何處かへ行きませうね。こつそり逢ふのね、昔の唄にでもありさうよ。かうしてきまつて逢つてゐるよりも、その方が何んなに嬉しいか知れやしないわ。隠れあそびつていふことが一番面白いもんですよ。』

『鈴木さんは何うするんだえ？』

『鈴木さん？』玉子はちよつと笑つて、『鈴木さんなんか構はないけども、けどもあの人も好い方よ。繪かきなんかあんな無邪氣なもんかしら。それや罪はないわよ。貴方見たことはあるわねえ。顔はあんな顔をしてゐるけれど、あれで、やさしい處があるのよ。氣分がさつぱりしてゐるわ』

『ちや鈴木さんにも内所で逢ふのかえ？』

『まさか……私がいくら何でも……』笑つて見せて、『ね、さうませうね。嬉しい』玉子は男の胸に顔を押し當てた。

十九

その年の秋の彼岸の中日の前日から、旦那は来て泊つてゐた。二階の間からは、小さな貸家の混雑した低地を隔て、濁つた汚い色をした海が見渡されてゐた。昨夜の雨は此頃に似合はないほどの強い降で、折角の太祭日も無駄になるなど、思つて寝てゐたが、今朝起きた時は、眩しいやうな好晴で、軒には雀が樂しきうな饒舌をつゞけてゐた。

旦那がまだ寝てゐる中に、下階に下りて来た玉子は、其處に、机の上に、女の名で書いた手紙が一通そつと載せられてあるのを見た。それは昨日旦那が来てから出した手紙の返事であつた。玉子は急いでそれを取つて、走り讀みに讀んで帯の間に挟んだが、それから俄かにそは／＼と落附なくなり出した。で、旦那と一緒に取膳か何かで朝飯をすまして茶を飲んでゐたが、『小づかひを少し置いて行かうな』かう言つて旦那が財布を出しかけたのを見て、

『貴方、そこにも二十はななくつて？』

『何うするんだえ？入るのかえ？』

『え、ちよつと買ひたいものがあるのよ。此間、銀座を通つたら、それは好い襟があつたのよ。震ひつきたい



やうなのよ。それに、紙入がわるくなつたから……」

「襟は此間買ったばかりぢやないか」

「でも欲しいのよ」

「此處にはあるけれども……少し入用な金だけでも……」

旦那が躊躇してゐるのを、

「好いわよ、頂戴よ」

かう言つて無理に貰つて、「これで買へるわ。本當にそれは好い襟よ。夢にまで見たんですもの」嬉しさうな顔をして、

「本當に、お金ツてよく要るものね。お小遣なんてぢきなくなつて了ふのよ。母さんの許にも無沙汰をしてるし、叔父さんの許にも近い内に行つて来やうと思つてゐるのよ。また、土産を買つて行かなくちやならぬい」

旦那は五五六の、何方かと言へば瘦せた方の人であつた。イヤにむつゝりして、容態振つて、朝起きて来た時に、「お目覚めですか」とか何とか言つて下女が叮嚀に挨拶しないと機嫌がわるいといふ風であつた。市會議員はこの前の選挙で落選したが、區では羽振の好い方で、護謨の店が銀座の通りにあつた。子供は總領は中學校に通つてゐた。

胸の處に赤い多きな痣のあるのが玉子には常に氣になつてゐた。それを見ると、厭な氣がした。「何してこんな人の世話になる氣になつたからしら」など、自分が後悔するやうなこともあつた。その痣が胸一杯に蔽ひかぶさるやうに大きくなつた夢から覺めた時には、玉子はゾツとして體が震へた。

「お咲、お咲」

かう呼ぶ聲が常に二階から聞えて来た。

いつも来た翌日は、屹度早く歸つて行くのに、その日は午近くまで長火鉢の傍で新聞などを讀んでぐづぐづしてゐた。段々玉子は氣が氣でなくなつて来てゐた。帯の間に挟んだ手紙のことが絶えず玉子の頭の中にあつた。「今日は緩くりしてゐらつしやる？」かう訊くと「うむ、さうもしてられないがな。……用も少しあるけれど」など、言ひながら、矢張りぐづぐづしてゐた。手紙にはかねて約束して置いた時間が書いてあつた。實は来るか来るかと思つて居た返事が昨夜来ないから、今日は駄目なのかと今朝まで思つてゐた。それにあの雨でもあつた。「明日は駄目」かう玉子は思つて失望して寢てゐた。それなのに……手紙が来たのに……天氣が好いの……。

「貴方お午の支度をするの？」

「何アに好い」旦那はかう言つて矢張其處に坐つてゐた。

まだ時間はあるけれど、髪だつて直して行かなければならぬし、支度もしなければならぬし、困つて了つて玉子がゐると、運好く其處にいつも借りつけてゐる酒屋から「電話です」と小僧が言つて来た。

「戻つた中年の田舎出の下女が掛けて行つて訊くと、店から、旦那にすぐ来て下さるやうにッて番頭さん



が掛けてよこしたとのことであつた。「ウム、今すぐ行く」かう言つて漸く旦那は出かける支度をした。旦那を見送つて、茶の間へ歸ると、玉子はすぐ鏡臺を出して髪を治し始めた。髪結さんを呼んで来て、大急ぎで結つて貰はうかとも一度は思つて見たが、時計がもう一時半の處を指してゐるので、すぐ思ひ返して、亂れた髪を自分で梳いた。

「二時頃、向ふの停車場に行つて待つてゐますから」かうその手紙には書いてあつた。

大島お召の一枚着に黒の鶉縮緬の羽織を着て、成たけ眼に立たないやう扮装をして、旦那に買つて貰つたダイヤの指環と小林に買つて貰つた金の浮彫の指環とをはめて、「ちよつと、家まで行つて来るからね。歸りはそんなに遅くならないつもりだけでも……殊によると夜になるかも知れないからね」かう下女に言つて出がけに、財布の中のさつきの金を改めて見て、浮々した顔をして玉子は出かけて行つた。

電車のレールを横切つて、大きな停車場に來た時には、時計はもう二時半の處を指してゐた。汽車の時刻を見ると、あと二十分待たなければならぬ。いつそ向ふの電車で行かうかとも思つたが、先に乗替の場所があつたり何かするのを思ひ出して、仕方がないから其處で汽車を待つことにした。

山手の方へ行く電車が絶えず待つてゐる玉子の前を通つて行つた。種々な人達がぞろ／＼と乗つたり降りたりするのがほつねんとして腰を掛けてゐる玉子の眼に映つて行つた。「汽車で行つたかしら。電車で行つたかしら？ 屹度電車で行つた。もう遅いつて待つてゐるだらう」こんなことを考へた玉子の眼には、此前嬉々とした土藏に近い一間が浮んで見えた。障子を明けると、黒い色をした土藏と裁込の松とが見えた。それは午

後の三時頃で、向ふの待合の座敷に客がゐる、三味線の音などが聞えてゐた。玉子が勘定をしやうとすると、「好いよ、今日は僕が出すよ。持つてゐるよ」など、言つて、男は玉子のやつたお揃ひの古代更紗の縫ひ（ぶ）しの財布を懐から出した。

やがてやつて來た汽車に待兼ねるやうにして乗つた玉子は、其處にかねて中のよかつた若い妓が大丸歸に結つて、洋服姿の中年のお客と一緒に乗つてゐるにばつたり顔を合せて了つた。

「まア、お琴さん」

「雪江さん」

かう言つて二人は寄つて行つた。車中の人達は皆な視線を此方に向けた。

「まッ好いわねえ、京都？ 奈良？ 羨ましいわねえ」玉子は一緒に來た客の方を見ないやうにして見ながら、「本當に羨ましいわ。今は好いでせうね。氣候が好いから。さうね、紅葉にはまだ早いけれど。幾日位？ 五日位？ 大阪にも行くの？ 好いわねえ」

玉子は小聲で何か言ふと、若い妓は笑つて點頭いて見せた。客は玉子の方を頻りに見てゐた。

やがて次の停車場が來た。挨拶して下りて行つた玉子は、ブラットホームにも何處にも男の姿を見出すことが出来なかつた。わざ／＼二等待合室までも入つて見たが、矢張其處にもゐなかつた。何うしたんだらうと思つてゐると、向ふの茶屋から急いで此方に驅けて來る男の姿が見えた。

「何うしたの？」



「ちよつと其處に休んでゐたんだよ。電車で来るか、汽車で来るかわからないもんだから、彼方へ行つたり此方へ來たりしてゐたんだよ」

「待つたでせう？」

「随分待つた。」

停車場を出て並んで歩きながら、

「私、何んなに氣を揉んだか知れないわ。歸りさうにしてゐて、中々歸らないんですもの。私何うしやうかと思つて、立つたりゐたりしてたわ。電話が家からかゝつて來なけりやまだるたのよ。だから、御覽なさいよ、髪なんか壞れたまゝよ」かう言つて髪を見せるやうにして、「まア、好かつたわ。まさか、貴方は歸りやしないとと思つたけれど……。それに、今お琴さんに逢つた」

「何處で？」

「汽車の中で、大丸鬚か何かで上方見物よ」

「四十位の鬚の生えた男が一緒だつたらう？あれは立花ツて言ふお役人だよ」

「よく知つてゐるわねえ。……。けども、お琴さん、濱町の方が大切なんぢやないの？」

「それはさうさ」

二人はいつか踏切の處へ來てゐた。車夫があとから煩さく附纏つて來た。

「彼處に行くんでせう？」

「何うでも好いけど……」

「彼處へ行きませうよ……ね、歩いて行きませう」

二人は靜かに戀人のやうにして歩いて行つた。晴れた秋の日が長く、路を照してゐた。そこには枝柿の紅いのが並べてある店があつたり、鶏を澤山飼つた養鶏所があつたり、蒼い顔をして若い男がせつせと板を削つてゐる指物師の仕事場があつたりした。二人は成たけ裏道のやうな細い通りを歩いて行つた。

三十分程経つた後には、二人は崖に凭つた大きな家の見晴しの好い一間から、野を横つて行く汽車の白い烟などを見てゐた。風呂場は三和土になつてゐて、内から鍵が掛るやうに出來てゐた。湯に入りながら二人は遠い海を眺めた。

「さうなの？」

ふと玉子は思ひ出したやうに言つた。途中で、二人は鈴木のことを話しながら歩いて來た。「さうなの？千鳥さんが聘ばれてゐるの？」

急に玉子が引いたので、繪を書きに田舎の方へ行つてゐた鈴木は、歸つて來てから一方ならず落膽した。其處の待合の女將が一生懸命に別の女を取持たうとしても、容易にそれに應じなかつた。取替へ引替へ聘んで見せた女も一人として氣に入つたものはなかつた。酔ふと、あのおとなしい人があばれて騒いで、「俺の雪江を伴て來い」など、女中を困らせた。

「矢張、君の腕だね」かうその話をしながら男は笑つた。玉子は生効のあるやうな氣がした。自分の持つて



るる容色が、さうまで容易に男を引きつけることの出来るのが玉子には嬉しかった。身を投げて死なうとした去年の自分、あれは矢張りこの自分だったかしら？といふ風にすら思はれた。世の中には面白いことが澤山に澤山にあつた。玉子は湯から上がったてふまで鈴木のことを頭から離さなかつた。

何をしてても差支ないやうな一間に二人は日の暮れる頃までゐた。前の野には茫と靜かに霧が下りて、光鈍のない赤い丸い月が浮び上るやうに海から昇つた。玉子は圍ひ者の厭な生活を絶えず男に話してきかせた。「それや、私、随分我儘にしてるのよ。厭な時には遠慮なく厭な顔をしてやるわ。お金だつて、随分出させてやるのよ。今度一度来て御覽なさいな。大丈夫ですよ。下女が田舎者で何も知らないから大丈夫ですよ。旦那が来てたつて差支ないわ。従兄とか何とか言つて置くわよ。それや、いろんな道具なんか随分買つたわ。あゝいふ處で、二人で暮すんだと嬉しいけども、貴方には奥さんはあるしね、何うせ駄目ね」

男は男で、父親の病氣の段々重くなつて行く話などをした。「君も知つてるけども、僕の父はお濱奉行か何かしてゐて、昔は随分遊んだ通人なんだけど、あゝなつて了つてはもう駄目だね。それに昨日あたりから大分悪いんだよ。今度は駄目かも知れないよ」など、言つた。玉子は引かされてから、一度男の家に訪ねて行つて、粹な父親と綺麗な細君と可愛い三つ位になる男の子とを見た。男は市役所の方に勤めてゐて、月給はさう澤山は取つてゐないけれど、家にはかなり財産があつて、庭に面した座敷などは瀟洒なつくりに出てゐた。父親に望まれて、玉子は其處で清元などを弾いて一日面白く遊んで来た。引されない以前に家で聘んでゐた藝者位に男の細君は思つてゐるらしかつた。

「好い月だね」

「歸るのはイヤねえ。今夜泊つて行きませうか。大丈夫ですよ。今日歸つたばかりだから、來る心配はないわよ。さうしませうよ」

「でも今日は歸らう。家の父の方も心配だから」

「さう」

いかにも残念さうに玉子は言つた。沈んだ銀色をした野の霧の中に、白い烟を立て、通つて行く汽車は丸で繪か何ぞのやうに見えた。月の光は流るゝやうにあたりを照した。

二人が其處を出たのは、もう彼是十時に近かつた。頼んで置いた車はずつと離れた門の處に置いてあつた。樹の間を洩れる月の光を受けながら、二人は其處まで靜かに下りて行つた。

汽車の時間の都合がわるいので、歸りは二人は電車の方を選んだ。空いてゐる電車の中では、二人は隅の方に腰を掛けた、陰て手を握り合つたりなどした。電車を下りた處で、二人は重ねて逢ふ日と所とを約して別れた。

玉子は遊び勞れてゐた。行く時歩いた長い路の疲勞なども出てゐた。楽しかつた一日の逢瀬を繰返しながら「歸つたらすぐ寝やう」など、思つて歩いた。

座敷に灯の明るくついてゐるのを不思議にして上つて行つた玉子は、其處に旦那の來てゐるのをすぐ知つた。「おや、旦那が入らしたの？」かういくらか慌て氣味で迎へに出た下女に言つて、すぐ座敷の方へ行つた。